

目次

9 8 1 — 2 0 1 5 N O . 2 6 (2 0 1 5 . 8)

小誌風の薔薇	3
風の薔薇叢書	4
水声通信／別冊水声通信	5
水声文庫	11
文学	16
中村真一郎コレクション—中村真一郎手帖	49
小島信夫長篇集成—小島信夫短篇集成—小島信夫批評集成	52
ヘンリー・ミラー・コレクション	58
レーモン・クノー・コレクション	62
ヴィクトル・セガレン著作集	64
バルザック幻想・怪奇小説選集—バルザック芸術／狂気小説選集	66
マルキ・ド・サド全集	68
フィクションの楽しみ	70
現代ウィーン・ミステリー・シリーズ	74
アンデスの風叢書	76
フィクションのエル・ドラード	78
批評の小径	80
エコリティシズム・コレクション	82
語学	83
芸術	83
シュルレアリスムの25時	104
ロックの名盤	106
人文科学	107
ミハイル・バフチン全著作	115
叢書二十世紀ロシア文化史再考	117
言語の政治叢書	118
記号学的実践叢書	121
神秘学	125
神秘学叢書	127
ロサ・ミステイカ叢書	129
シユタイナー教育・医学	132

- 小社は一九八二年に『書肆風の薔薇』として創立され、八六年には白馬書房と業務提携し、九年十二月に現在の社名となりました。
- 本目録には、創業以来、二〇一五年七月までの刊行図書全点、及び白馬書房の在庫図書全点が収録されています(書名の下に★印を付したものが白馬書房の刊行物です)。
- 価格はすべて二〇一五年七月現在の税抜き価格です。書店店頭でお求めの際等には8%の消費税が加算されます。また、増刷時等に価格が変更される場合もありますが、ご了承ください。
- 初版刊行の年月は(二〇〇九年秋以降の新刊についてのみ)判型・定価などの表記の前に、西暦(上二桁は省略)で示してあります。たとえば、『09.12』とあるのは、『二〇〇九年十二月』に第一版第一刷が発行されたことを示しています。
- 製本様式は(並製とある場合を除き)すべて上製本です。
- 本目録中の本は全国どの書店でもお求めになれます。書店の店頭がない場合には、その書店に御注文ください。ただし、アマゾン(オンライン書店)には、二〇一四年五月以降、同社が再販契約を遵守し、定価販売を励行するまで、出荷を停止しておりますので、同サイトではお求めになれません。
- 直接御注文いただく場合には、書名・冊数と住所・氏名・電話を明記の上、税込み価格に次の荷造送料を加えた金額をお送り下さい。入金を確認次第、送本致します。また、代金引換郵便でのご注文も頂けます(代引手数料は小社負担)。
- 荷造送料…………… (冊数にかかわらず) 税込み価格合計額 三、〇〇〇円まで……五〇〇円
三、〇〇一円以上……小社負担
- ご送金は現金書留または郵便振替(名義「水声社」、口座番号〇〇一八〇一四一六五四〇〇)にてお願い致します。
- 『書店様』小社の取次店は、トーン、日販、栗田、大阪屋、太洋社、中央社、人文・社会科学書流通センター、八木書店の八社です。

小誌風の薔薇

文学・芸術・人文科学の問題を、とりわけ言語(記号)の問題として、ジャンル横断的に考察すべく、『言語学のための、というよりはむしろ、言語のための機関』として創刊された小雑誌。毎号特集形式によって、今日の最も根源的な知的実践の現場へと誘う。
A5判並製

① 言語、ささも 一九八二年夏号

執筆||豊崎光一、渋谷孝輔、浅沼圭司、土岐恒二、小林康夫 今日における言語の問題の多様な局面を、シモン『農事詩』の中に、デイヴィッド・ジョーンズ、エイゼンシュテイン、丸山圭三郎、竹内芳郎等の中に探る。装画||加納光於。
四〇頁五〇〇円

② 相互テクスト性の問題 一九八三年夏号

執筆||豊崎光一、三浦信孝、小林康夫、R・ジェニー、V・セガレン、ジュリア・クリステヴァによって定式化された『相互テクスト性』の概念の射程と有効性をセガレン、ヴァレリーの中に、そして翻訳の問題の中に探る。装画||加納光於。
八〇頁六五〇円

③ シュポール／シュルファス 一九八四年夏号

編集||松浦寿夫執筆||松浦、岡崎乾二郎、ソレルス、ブレネ、ミレー、カーヌ他 五月革命の衝撃の中から誕生し、テルケル派と雁行しつつ、美術の大胆な脱構築を企て、今日のフランス美術に大きな影響を与え続けるS/Sの全貌を伝える。
一〇四頁八〇〇円

④ ジャン||フランソワ・リオタール 一九八六年夏号

編集||小林康夫 執筆||ジャン||フランソワ・リオタール、今村仁司、谷川渥、松浦寿夫 『社会主義か野蠻か』の戦間的左翼から欲動の哲学へ、そして未聞の『文』の哲学へ。ポスト構造主義の代表的哲学者リオタールのための全頁特集。
二二八頁二〇〇円

⑤ ウリポの言語遊戯 一九九一年秋号

編集||松島征 執筆||松島、酒詰治男、フランソワ・ルリヨネー、ジョルジュ・ベレック、ジェラルド・ジュネット 古今東西の言語遊戯の理論的探求と新たな言語遊戯の果敢な実践をつづけるウリポ・グループの驚くべき成果をあかす。
二九頁一五〇〇円

風の薔薇叢書

編集 金井美恵子 十坂部恵子 清水徹 十豊崎光一

《どこかに、単純にそして純粹に、言語と呼ばれるべきジャンルは存在しえないだろうか。詩と散文という形式的な対位法のみではなく、文学とそれ以外のものという対象の区別をも越えて》。還元不可能な言語へ向う現代日本のテクニク実践の新しい様相を伝える。
四六判並製西入

鏡・空間・イメージ

宮川淳

実体的思考を蝕む「鏡」、この「似ていること」の魅惑と危険について、《自己同一性の間隙からある非人称の出現》について語る、天折した美術批評家の犀利な長篇評論。《そこにいるのは誰か、そして、誰が語っているのか》。栗 浅田彰・中沢新一・小林康夫・丹生谷貴志他
二二二頁十別丁 図版二四頁 二五〇〇円

文手箱

豊崎光一

《「あいだ」は「空間」の「間」であると同時に、「人間」の「間」でもある。あいだま：つまりはどちらも「存在」ではないのだ。プランシヨ、ブローコ、クロソフスキー、宮川淳等を巡って、文学・哲学・美術の「間」において書かれた十九のエッセイ。》
二五二頁 二五〇〇円

クロニック

豊崎光一

常に第一線のフランス文学者として、欧米、とりわけフランスの文学、芸術、思想の状況を鋭く克明に観つづけてきた著者の二十数年間におよぶ長短さまざまな批評的エッセイの集大成。今日のフランス文化の一面面を鮮やかに浮き彫りにする。
二八三頁 二五〇〇円

不可能なものへの権利

小林康夫

《思考が私の意志にも可能性にも義務にも属さないことが告げられる場だ。思考と私とが無限の《荒廢》によって引き離されている切迫的場だ、この非一場地において問われるゲーム、死、共同体の問題。今日の哲学的思考の可能性を示す好著。》
二五九頁 二五〇〇円

無の透視法

小林康夫

《死の思考、不可能性の思考、無の思考》を求めて、近代芸術を支える理念と神話の失墜以後を生きたる芸術家たち(デュシャン、アルト、ケージ、三島由紀夫等)へ肉迫する芸術論集。気鋭の哲学者 仏文学者の二重の処女作。《語るのは死である》。
二二二頁 二五〇〇円

ポストアート論

室井尚

今日の先端的アートシーンを高速度に横断しつつ、物語なき前衛なき芸術なきポストモダン時代の《芸術》の驚くべき変貌を、《作患》の消滅とパステイッシュの氾濫、そしてとりわけメディアの専制との関連のうちに問う若き美学者の意欲作。
二二二頁 二五〇〇円

吉田健一頌

丹生谷貴志・四方田大彦・松浦寿輝・柳瀬尚紀

絶対への渴望とその不可能性の深淵に、果てしなく雪崩れゆく《近代・世紀末》。この病める意識からの脱出という類例のない試みを生きた《文人》吉田健一。その作品世界に斬新な思考の可能性を見出す若手批評家による書き下し吉田健一論集。
二二三頁 二〇〇〇円

水声通信

A5判並製

① 荒川修作の《死に抗う建築》05年2月号

近代建築に死を！ 東京の西郊に出現した異形の建築《三鷹天命反転住宅》を巡る大特集。執筆 荒川修作、瀬戸内寂聴、馬場駿吉、塚原史、河本英夫、高橋順一他 特別寄稿 清水徹 連載 小林康夫、松浦寿夫、高橋透、桑野隆、野村喜和夫、中村邦生 総 四四頁 一〇〇〇円

② 小島信夫を再読する05年12月号

私小説的な装いのもとに、一貫してメタフィクショナルで実験的な作品を発表し続けてきた日本文壇最長老へのオマージュ。執筆 小島信夫、大庭みな子、三浦清宏、堀江敏幸、千石英世、中村邦生、芳川泰久、斎藤環、茂木健一郎、千野帽子他 連載 小林、松浦、高橋、桑野、野村、中村 一六〇頁 一〇〇〇円

③ 村山知義とラヴォイストたち06年1月号

近代日本最大のアヴァンギャルド集団の多様な側面を、同時代的な文脈において、また今日的な視点から読み説く。執筆 五十殿利治、松浦寿夫、水沢勉、林淑美、ジュニファー・ワイゼンフェルト、白川昌生、滝沢恭司、波瀾剛、正木喜勝、喜多恵美子他 連載 松浦、桑野、野村、中村 一三六頁 一〇〇〇円

④ ロシア・アヴァンギャルド芸術06年2月号

二十世紀初頭のロシアにおいて、文学・芸術のあらゆる分野を席捲したこの運動に、第一線の研究者たちが迫る。執筆 桑野隆、浦雅春、戸田ツトム、武隈喜一、江村公、タチヤナ・コトヴィチ、セリム・ハンマゴメドフ他 連載 小林、松浦、高橋、野村、中村 二八頁 一〇〇〇円

⑤ 野村喜和夫詩の未来に賭ける06年3月号

腐朽しゆく現代詩に死を！ 出発以来、一作ごとに旋風を巻き起こしてきた詩壇の革命児の全貌をあかす。執筆 野村喜和夫、吉増剛造、小林康夫、中沢けい、藤沢周、鈴木和成、城戸朱理、山田せつ子他 追悼 島敦彦、O J U N、松井智恵 連載 桑野(完)、松浦、中村 一四四頁 一〇〇〇円

⑥ ジョルジュ・ペラック06年4月号

《ワリボ》グループ最大の小説家への極東からのオマージュ。執筆 ジョルジュ・ペラック、酒詰治男、塩塚秀一郎、松島征、M・F・フェリエ、原野葉子、湯沢英彦、宮川明子、若島正、オクヤナオミ、春日武彦、宮下誠 連載 松浦、高橋、野村、中村 追悼 佐野衛、黒田杏子 一四四頁 一〇〇〇円

⑦ ダダ1916-1924 06年5月号

二十世紀の文学、芸術の様相を一変させた《ダダ》の運動を九十年の後に徹底的に再考する。執筆 塚原史、宮下誠、鈴木芳子、鈴木雅雄、井口壽乃、村田宏、波瀾剛、マルク・ダシー、白川昌生、平井正、香川檀、谷昌親、平芳幸浩他 特別寄稿 荒川修作 連載 松浦、中村、野村 一六〇頁 一〇〇〇円

8 加納光於の芸術 09年9月号

銅版画から出発しながら驚くべき油彩画へと至った加納光於の全体像へ迫る。執筆||加納光於、大岡信、吉増剛造、平出隆、谷川渥、巖谷國士、建昌哲、中村隆夫、野村喜和夫、土屋誠一、暮沢剛巳、谷川晃一他 特別掲載||高遠弘美 新連載||小林康夫 連載||松浦、高橋、野村、中村 総五二頁 一〇〇〇円

10 宮川淳、三〇年の後に 09年10月号
主体とディスタンスの近代的概念の破砕を企てた美術批評家への遠くからのオマージュ。インタビュ||吉田喜重 執筆||清水徹、浅沼圭司、岡田温司、土屋誠一、桑田光平、神山亮子、野田吉郎他 連載||小林康夫、松浦寿夫、高橋透、野村喜和夫、中村邦生 二八頁 一〇〇〇円

9 軽井沢という記号 06年7月号

軽井沢という多面的な記号をポスト・コロナアルに読み解く! 執筆||千葉一幹、中村邦生、千石英世、芳川泰久、鈴木貞美、川崎淡、千野帽子、福田真人他 特別掲載||馬場駿吉、乗松亨平 展評||須藤哲生、榎木野衣、和田忠彦、土屋誠一 連載||小林、松浦、野村、中村 総五二頁 一〇〇〇円

18 何のための出版? 09年11月号
電子メディアの登場によって出版は死滅するという俗説を笑いつつ、(何のための)出版なのかを問う。執筆||立仙順朗、私市保彦、石塚純一、長谷邦夫、山崎勉、中村邦生他 インタビュ||西沢栄美子+小林康夫 新連載||宮下志朗 連載||小林康夫、松浦寿夫、野村喜和夫 二二頁 一〇〇〇円

10 ジャン||リリック・ナンシー 09年8月号

デリダ以降、最大の哲学者の来日を記念する、本邦初の大特集! 執筆||ナンシー、ジャック・デリダ、小林康夫、鶴飼哲、西谷修、増田一夫、湯浅博雄、合田正人、大西雅一郎、上田和彦、守中高明、西山雄二 特別掲載||イーデン ソール+コタリ 連載||小林、松浦、高橋、野村、中村 一四四頁 一〇〇〇円

14 戦後マンガ史論をどう書くか 06年12月号

史上最大の出版部数と最高の(?)芸術的表現に到達した《戦後マンガ》の六〇年を考える。執筆||斎藤環、長谷邦夫、梶井純、永山薫、吉村和真、竹内オサム、校條剛他 新連載||桑田光平 連載||小林康夫、松浦寿夫、高橋透、野村喜和夫、中村邦生 九六頁 一〇〇〇円

11 表象とスクリーン 09年6月号

「表象の危機」の時代へ肉迫する《表象文化論》の果敢なる試み。執筆||小林康夫、松浦寿輝、吉田喜重、岡田茉莉子、加国尚志、原和之、具沢哉、大橋完太郎、北野圭介、中島隆博、ミハイル・ヤンポリスキー 連載||松浦寿夫、野村喜和夫、中村邦生、デリダ×ナンシー 二八頁 一〇〇〇円

15 《こころ》のアポリア 07年12月号

アリストテレスの『デ・アニマ』から最新の脳科学の知見までを組上りにのせ、「こころ」へ迫る。執筆||坂部恵、黒崎政男、中島隆博、小林康夫、高田康成、山本久美子、信原幸弘、原壘 書評||浅沼圭司、野田倉康一 連載||宮下志朗、松浦寿夫、野村喜和夫、桑田光平、中村邦生 二二頁 一〇〇〇円

16 ジョン・ケージ 07年3月号

二十世紀の音楽、芸術の状況を一変させた稀代の作曲家||思想家の全貌。執筆||近藤譲、藤枝守、渋谷慶一郎×池上高志、柿沼敏江、椎名亮輔、中井悠他 展評||北沢憲昭 追悼||坂部恵他 新連載||湯沢英彦 連載||宮下志朗、小林康夫、高橋透、野村喜和夫、桑田光平、中村邦生 二二頁 一〇〇〇円

20 思想史のなかのシュルレアリスム 07年9+10月号

シュルレアリスムに同伴しつつ、あるいはそれに抗して、同時代を生きぬいた人々の肖像。執筆||鈴木雅雄、塚本昌則、永井敦子、郷原佳以、三ツ堀広一郎、丸山真彦、塩塚秀一郎、星埜守之、齊藤哲也 特別掲載||松浦寿夫、ロマン・ヤコブソン、朝妻恵里子 連載||宮下史朗他 一六八頁 一五〇〇円

17 甦るライブニッツ 07年4+5月号

甦る〈ヴェルブム〉の形而上学、の源流、ライブニッツ。その思想の現代的意味を考える。執筆||佐々木能章、小田部胤久、松田毅、酒井潔、森田園 座談会||坂部恵×黒崎政男×山内志朗×小林康夫 連載||宮下志朗、湯沢英彦、高橋透、野村喜和夫、桑田光平、中村邦生 二八頁 一〇〇〇円

21 ヴンリー・ニッラー 07年11+12月号

二十世紀の小説を根底から革新したミラーの多様な側面に光をあてる。執筆||本田康典、山崎勉、芳川泰久、小林美智代、松田憲次郎 連載||小林康夫、松浦寿夫、高橋透、湯沢英彦、桑田光平、中村邦生 九六頁 一〇〇〇円

18 阿部良雄の仕事 07年6月号

この一月に急逝した世界的なボードレール学者にして美術史家の仕事を検討し追悼する。執筆||出口裕弘、堂本尚郎、清水徹、連實重彦、渡辺守章、中地義和、四方田犬彦、松浦寿夫、稲賀繁美、鈴木雅雄、湯浅博雄、鈴木啓二、横張誠、吉村和明、北村卓、山田兼士、海老根龍介他 一六八頁 一五〇〇円

22 サミュエル・ベケット 08年1+2月号

ジョイスの衣鉢をつぐ小説家にして極度に縮減された詩的戯曲の作家ベケットに迫る。執筆||ベケット、北文美子、近藤耕人、井上善幸、メアリ・フライデン、岡室美奈子、西村和泉、景英淑、野間勉、掘真理子 連載||宮下志朗、本田康典、湯沢英彦、高橋透、桑田光平、中村邦生、松浦寿夫 一四四頁 一五〇〇円

19 《視点》をめぐる 07年7+8月号

誰が視るのか? 誰が語るのか? 《主体》の問題と深く交錯する《視点》の問題を、美学・言語学・物語論のまじわる場所から考える。執筆||浅沼圭司、松浦寿夫、中山真彦、赤羽研二、田口紀子、喜田浩平、井元秀剛 連載||高橋透、湯沢英彦、桑田光平、野村喜和夫、中村邦生 二二頁 一〇〇〇円

23 シュルレアリスム美術をどう語るか 08年3+4月号

モダニズム批評によって否定され排除されてきたシュルレアリスム美術を現代美術史のなかに復権する。執筆||林道郎、鈴木雅雄、齊藤哲也、中田健太郎、河本真理、長尾天、神保京子、長谷川晶子、永井敦子、星埜守之、合田陽祐他 連載||小林康夫、宮下志朗、湯沢英彦、中村邦生他 一八四頁 一五〇〇円

24 交感のポエティクス08年5+6月号

ネイチャー・ライティングや環境文学として現れつつある、自然と人間の新しい(交感)の可能性を探る。執筆||野田研一、近藤耕人、菅啓次郎、喜納育江、山里勝己、中川僚子、伊達直之、結城正美、小峯和明、書評||山田幸平、山梨俊夫、連載||宮下志朗、松浦寿夫、高橋透、中村邦生他、一四四頁、一五〇〇円

25 シュルレアリスム美術はいかにして可能か

08年7+8月号

「図」としてのシュルレアリスム絵画、遠近法的空間とシュルレアリスム絵画をめぐる白熱の討議。執筆||鈴木雅雄、林道郎、塚原史、千葉文夫、齊藤哲也、永井敦子、中田健太郎、中村尚明、宮下誠、書評||小口雅史、連載||宮下志朗、松浦寿夫、湯沢英彦、桑田光平、本田康典、中村邦生、一九二頁、二〇〇〇円

26 カズオ・イシグロ08年9+10月号

執筆||小池昌代、阿部公彦、平井杏子、中川僚子、遠藤不比人、新井潤美、藤田由季美、木下卓、岩田託子、武井博美、特別寄稿||白川昌生、書評||吉田文憲、追悼||長谷邦夫、連載||宮下志朗、松浦寿夫、湯沢英彦、高橋透、桑田光平、本田康典、中村邦生、一六〇頁、二〇〇〇円

27 ジュール・ヴェルヌ08年11+12月号

執筆||ル・クレジオ、横尾忠則、芳川泰久、F・デース、私市保彦、島村山寝、大友徳明、石橋正孝、新島進、堀千晶、藤元直樹、R・シエラード、特別寄稿||塚本昌則、齊藤哲也、鈴木雅雄、書評||田之倉稔、追悼||柳原孝敦、連載||松浦寿夫、高橋透、本田康典、中村邦生、二三四頁、二〇〇〇円

28 黒田アキ09年1+2月号

執筆||黒田アキ、M・テュラス、P・ラクー||ラバルト、小林康夫、宮島達男、J・アルイユ、C・ファラン、本江邦夫、森裕一、道家洋、千種成顕、特別寄稿||中村亨、矢口裕子、A・ステットナー、書評||望月哲男、連載||宮下志朗、松浦寿夫、湯沢英彦、桑田光平、本田康典、中村邦生、二二六頁、二〇〇〇円

29 ポスト・ソウルの黒人文化09年3+4月号

執筆||木内徹、T・エリス、B・D・アッシュ、西本あづさ、森あおい、石田依子、山本伸、中地幸、三石庸子、堀邦維、坂下史子、アルフレッド・ジャリ小特集||J・シユエ、合田陽祐、特別寄稿||白川昌生、連載||宮下志朗、湯沢英彦、高橋透、桑田光平、本田康典、中村邦生、二三四頁、二〇〇〇円

30 ジョルジュ・バタイユ09年5+6月号

執筆||M・シャブサル、D・アルバン、A・ジユフロワ、D・オリエ、谷口亜沙子、高桑和巳、濱野耕一郎、合田正人、丸山真幸、荻野厚志、M・リチャードソン、G||F・ルエツト、神田浩一、西谷修、古永真一、門間広明、鈴木雅雄、連載||宮下志朗、湯沢英彦、高橋透、本田康典、中村邦生、二五四頁、二〇〇〇円

31 アナイス・ニン09年7+8月号

執筆||ヘンリー・ミラー、アントナン・アルトー、ケイト・ミレット、杉崎和子、木村淳子、冥王まさ子、山本豊子、矢口裕子、金澤智、渡部あさみ、柴田元幸、書評||白田紘、特別寄稿||小笠原鳥類、アントワーン・コンパニオン、連載||宮下志朗、松浦寿夫、桑田光平、本田康典、中村邦生、二〇六頁、二〇〇〇円

32 ジャン||ピエール||リシャール09年9+10月号

執筆||ジャン||ピエール||リシャール、ミシエル・コロ、芳川泰久、野村喜和夫、桑田光平、堀千晶、田中成和、湯沢英彦、ジェラルド・ジュネット、山崎敦、三ツ堀広一郎、西脇雅彦、書評||三浦清宏、平井杏子、連載||宮下志朗、松浦寿夫、高橋透、本田康典、中村邦生、一五八頁、二〇〇〇円

34 『社会批評』のジョルジュ・バタイユ二年第一号

(二年8月)

執筆||ジョルジュ・バタイユ、ジャン・ベルニエ、ボリス・スヴァーリン、レイモン・クノ、岩野卓司、丸山真幸、有馬麻理亜、彦江智弘、連載||宮下志朗、松浦寿夫、桑田光平、本田康典、特別寄稿||齊藤哲也、野崎敏、西谷修、鈴木雅雄、中田健太郎、豊崎由美、塩塚秀一郎、D・ラバテ、中村邦生、全号総目次、二八五頁、二五〇〇円

33 エコクリティシズム10年第一号(10年7月)

執筆||結城正美、H・シラネ、野田研一、笹田直人、小谷一明、生田省悟、喜納育江、G・ガリー、中川僚子、小山亘、岩井洋、山里勝己、村上清敏、豊里真弓、山本洋平、高橋龍夫、波戸岡景太、加藤睦、一ノ瀬和夫、D・ブラットン、巽孝之、特別寄稿||J||L・スタインメッツ、今井勉他、連載||宮下志朗他、二九二頁、二五〇〇円

別冊水声通信

A5判並製

坂部恵

執筆||村上陽一郎、木村敏、鈴木忠志、磯崎新、加藤尚武、藤井貞和、佐々木健一、関根清三、荻部直、黒崎政男、山内志朗、乗立雄輝、山根雄一郎、小林康夫、野家啓一、小田部胤久、田中綾乃、伊古田理、高橋克也、伊藤邦武、伊豆藏好美、森田園、下野正俊、川中子義勝 11.6 三五〇頁 二八〇〇円

ジュリアン・グラック

執筆||ミシェル・トゥルニエ、ピエール・ミション、ドミニク・ラブルダン、ミシェル・ミュラ、パトリック・マロ、マリアンヌ・ロレンジ、天沢退二郎、安藤元雄、堀江敏幸、塚本昌則、永井敦子、三ツ堀広一郎 11.12 二六一頁 二五〇〇円

セクシュアリティ

執筆||ジャック・デリダ、ジュリア・クリステヴァ、デイティエ・エリボン、エレヌ・シクス、フランソワーズ・ファン・ロッスム||ギユイヨン、湯浅博雄、澤田直、合田正人、岩野卓司、大西雅一郎、関修、吉川佳英子、郷原佳以、丸山真幸、大森晋輔 12.7 三二五頁 二八〇〇円

バタイユとその友たち

執筆||P・ソレルス、J・ヴァール、岩野卓司、郷原佳以、門間広明、有馬麻理亜、J・シエニウ||ジャンドロン、長谷川晶子、永野潤、R・クノ、A・コジェーヴ、加藤美季子、丸山真幸、伊藤直、伊原木大祐、大原宣久、R・ゲ||クロズィエ、築山和也、永井敦子 14.7 四一九頁 三〇〇〇円

水声文庫

四六判上製

物語るイメージ 絵画、絵巻あるいは漫画そして写真、映画など

浅沼圭司
これまでの物語の基盤を揺るがした(3・11)以降、どのように物語を語ることに生きる事ができるのか? 絵巻、漫画、写真、動画などさまざまな視覚媒体をもとに、物語の未知なるコスモスを追求する、新たな物語論。
13.12 三〇八頁十別丁カラー図版四頁 三五〇〇円

昭和あるいは戯れるイメージ

浅沼圭司
「既存のイメージ体系に依拠しない、あたらしいモデル||イメージを創出することはもはや不可能なのだろうか。」(昭和)をめぐる自己と他者の記憶、不在の体験を想起し、時代の心性をテクニク化する新しいイメージ論。
12.1 二五〇頁 二八〇〇円

平成ボーダー文化論

阿部嘉昭
平成の不気味について——。犯罪、メディア、若者、音楽、写真、女性、アダルトビデオ、漫画などを縦横に論じながら、「平成」という時代を裏側から考察した異色の日本文化論。
15.3 四六判四三三頁 四五〇〇円

幽霊の真理 絶対自由に向かうために

荒川修作+小林康夫
荒川の声が聞こえる——。身体の可能性を(建築)に見出そうとする荒川修作と、哲学者・小林康夫が、美術・文学・哲学を縦横に横断しながら、あらゆる既存の概念の根幹を問い、「知の総合」を目指す、衝撃の対話。
15.3 三〇二頁 三〇〇〇円

アメリカ映画とカラーライン 映像が侵犯する人種境界線

金澤智
いまや人種境界線は可視の要素ではなく、曖昧かつ不安定で不可視なものになりつつある。そのカラーライン(人種/階層)の問題を、「招かれざる客」『ジャキー・ブラウン』[8 MEN]『ビッグ・フィッシュ』などのハリウッド映画にさぐる最もアクチュアルなアメリカ文化・映画論。
14.12 二二三頁 二八〇〇円

ロラン・バルト 偶発事へのまなざし

桑田光平
バルトについて(書きはじめる)ことの意味を問いつつ、ステレオタイプに疲労し、意味に疲労し(私)に疲労し、(私)を放棄することに疲労するバルトの姿にさまざまな側面から肉薄する気鋭の研究者の処女作。
11.12 二四三頁 二五〇〇円

危機の時代のポリフォニー ベンヤミン、バフチン、メイエルホルド

桑野隆
一九二〇年~三〇年代という《危機の時代》にあつて、鮮やかな光世をはなつたベンヤミン、バフチン、メイエルホルド、そしてロシア・アヴァンギャルドの運動。ファシズムとスターリニズムに圧殺されたその悲劇的な営為に秘められた可能性の核心に迫る。
09.10 三三五頁 三〇〇〇円

小説の楽しみ

小島信夫

稀有の実験精神によって戦後文学を領導してきた著者がシェイクスピア、セルバンテスからチェーホフ、カフカ、ベケット、P・ブルックまでを縦横に論じながら、現代における〈小説の自由〉〈小説の可能性〉に肉迫する、最晩年の白熱の語り下ろし。
一四八頁 一五〇〇円

マフルメの〈書物〉

清水徹

自然主義的、リアリスムの文学観を根本的に刷新し、現代文学への途を切り開いた詩人が死の床に至るまで構想しつづけた未開の〈書物〉とは何か。残された膨大なメモ、断章を子細に検討し、〈演劇〉でもあり、〈パフォーマンス〉でもあるものとしての〈書物〉の夢へ肉薄する。
一七八 一七九頁 二〇〇〇円

書簡文学論

小島信夫

『アペラールとエロイーズ』から『パミラ』『危険な関係』『貧しき人々』『チェーホフの手紙』『チャリング・クロス街84番地』そして自作『女流』まで。古今東西の書簡文学、書簡体小説を、闊達自在に読み解く、書簡体による書簡体小説論。書き下ろし。
一八五頁 一八〇〇円

贈与としての美術

白川昌生

美術作品・芸術活動は、どのように価値が形成されるのか？ 未開社会のクラ交換、モースの『贈与論』、シュタイナーの経済理論をもとに、現在の腐朽した美術のあり方を根底から問いただす！
一四三 二二四頁 二五〇〇円

演劇の二場面

小島信夫

「オイデプス王」、説教「をぐり」、「ハムレット」からカントールに至る古今東西の演劇を逍遙しながら、〈軌道から外れ、軌道に復したときには予想もしなかつたものをもとて〉やつてくる演劇の諸相を軽やかに考察する異色の演劇論。
二〇〇頁 二〇〇〇円

西洋美術史を解体する

白川昌生

〈西洋〉そして〈美術〉という伝統的な閉じられた枠組を解体し、相対化し、もうひとつの別の美術史を構想する、西洋美術史への新しい入門書。未知の地平へ向けて歩む二十一世紀の美術を考える。
一七五 一五四頁 一八〇〇円

零度のシュルレアリスム

齊藤哲也

シュルレアリスムとは「何」か？ シュルレアリスムは「死んだ」のか？ いま、なぜシュルレアリスムなのか？ シュルレアリスムをめぐる《七つの謎》を気鋭の研究者とともに考える、必携の入門書。図版多数。
一七五 二二一頁 二五〇〇円

美術館・動物園・精神科施設

白川昌生

美術館、動物園、精神科施設の内外において《見せ物》にする／されるという関係における《倫理》とは何か？ エランベルジェと中井久夫の彼方へ向けて、今日の美術と美術館を考える。
一〇四 二六八頁 二八〇〇円

美術、市場、地域通貨をめぐる

白川昌生

バブル経済の崩壊とともに危機にみまわれた日本の現代美術とその市場に絶望した気鋭の美術家が、勃興する《地域通貨》の運動をてがかりに構想する新しい美術、新しい市場、新しい共同体。腐朽しゆく近代の《美術・制度》を根底から解体する。
一四〇 二五九頁 二八〇〇円

黒いロシア 白いロシア アヴァンギャルドの記憶

武隈喜一

《革命》によって、芸術文化が華開いた〈白いロシア〉の背後には、政治的抑圧によって社会的混乱に陥った野蛮な〈黒いロシア〉があった。ロシア革命からペレストロイカ以降までの芸術と政治の光と影を対照的に描き上げた、斬新な芸術・革命論！
一五八 三五四頁 三五〇〇円

戦後文学の旗手 中村真一郎 『死の影の下に』

鈴木貞美

実験的構成の小説により戦後の日本文学を力強く領導した中村真一郎の作品群には戦前・戦中期の歴史が深く刻まれていた。最初期の、『死の影の下に』五部作のテキストと作家をめぐる文芸・文化状況とを自在に往還しながら、中村真一郎文学の淵源に迫る。
一四五 二〇〇頁 二五〇〇円

魔術的リアリズム 二〇世紀のラテンアメリカ小説

寺尾隆吉

ボルヘス、ガルシア・マルケス、バルガス・ジョサ、そして莫言……ラテンアメリカという〈辺境〉に生まれ、今や世界を風靡しつつある〈魔術的リアリズム〉の代表的な作品を克明に辿りつつ、想像力による世界の変革の夢の意味を問う。
一四〇 二三四頁 二五〇〇円

シュルレアリスム美術を語るために

鈴木雅雄×林道郎

シュルレアリスム研究と美術史学の二人の気鋭の研究者が、往復書簡、講演、対話によって、常に新しいシュルレアリスムの謎に迫る。《現実と夢の間に直接的な通路が穿たれ……》
一七六 二五〇頁 二八〇〇円

桜三月散歩道 あるマンガ家の自伝

長谷邦夫

数々の〈伝説〉を生んだ奇代のパロディ・マンガ家が幼少時から現在までを書き下した一〇〇〇枚におよぶ戦後サブカル史の貴重な証言。山下洋輔、タモリ、筒井康隆らとの交流、赤塚不二夫、石ノ森章太郎、手塚治虫らとの出会いと別れ……
一四一 四〇九頁十別丁図版一六頁 三五〇〇円

サイボーグ・エンツクス

高橋透

人間／動物／機械の境界を攪乱せよ！ ハイブリッド的共存のうちに、種の壁を越え、サイボーグの世界へと向かう新しい世紀の新しい倫理。われわれはみなサイボーグだ！
一八〇頁 二〇〇〇円

マンガ編集者狂笑録

長谷邦夫

『カムイ伝』『巨人の星』『ブラックジャック』そして『PULPO』。マンガ史の舞台裏を支えた編集者たちの型破りな「マンガ愛」を、稀代のパロディストにして赤塚不二夫の盟友が縦横無尽に描く、痛快無比・純情可憐・妄言多謝の書き下ろし。
三八〇頁 二八〇〇円

マンガ家夢十夜

長谷邦夫

十人の天才マンガ家たちが〈夢〉と〈妄想〉を舞台に大競演の、奇想天外・疾風怒濤・ハチャメチャ過剰のフィクティブ・フィクション！ パロディ・マンガの先駆者が描くマンガのパロディ小説、入魂の書下し。小説はマンガより奇なり！！
09.11 二六八頁 二五〇〇円

ナラトロジー入門 プロップからジュネットまでの物語論

橋本陽介

プロップ、トドロフ、バルト、ジュネットは、どのように物語を分析したのか？ 文学研究の世界に影響を与えつづける「ナラトロジー」について、古今東西の文学作品を例に、体系的かつ平易に詳述する実践的入門書。
14.7 二四八頁 二八〇〇円

未完の小島信夫

中村邦生 十千石英世

小島信夫はつねに新しい。なぜ、いまなお私たちは小島文学に魅了されるのか？ とともに生前の小島と親しかった気鋭の小説家と批評家が縦横に語りつくす小島信夫の実像とその魅力。小島信夫との発掘対談、二篇も収録。
二九〇頁 二五〇〇円

川上弘美を読む

松本和也

〈この物語が、いつの時代のものなのか、どこ言葉で語られたものなのか、誰も知りません……。〉「あのこと」のさなかなにも書き続けられた『七夜物語』「あのこと」の後に書かれた『神様2011』、『センチの靴』、『真鶴』などの代表作を、〈ゆらめき〉の諸相から読み解く。
13.3 二六八頁 二八〇〇円

転落譚

中村邦生

《締切の近づいたある日、某駅の階段を上っているとき、いきなり本書の主人公にあたる人物が私の頭のなかに転落してきたのだ。何者か、と思う間もなく消えてしまい、あわてて私は……。》〈私〉はある小説の登場人物、本から外へすべり落ちてしまった……。未聞の長篇小説。
二〇一 三二頁 二八〇〇円

現代女性作家論

松本和也

今日の六人の女性作家（小川洋子、川上弘美、鹿島田真希、西川美和、多和田葉子、川上未映子）の六つの作品の文体・表現を、「記憶・回想」「家族・身体」の視点からあざやかに読みとく。
11.9 二六八頁 二八〇〇円

オルフェウスの主題

野村喜和夫

現代詩の最先端を疾走しつづける著者が、舞城王太郎からランボー／リルケ／マラルメ／宮沢賢治／吉増剛造……に至る古今東西の詩的テクストを渉猟しつつ詩作の根本動機そして詩／生／死をめぐって繰り広げる壮大な批評の冒険！
二六九頁 二八〇〇円

太宰治『人間失格』を読み直す

松本和也

〈人間〉とは何か？ 〈物語〉とは何か？ 閉塞した社会を人間的に生きようとすれば、破壊せざるをえない。「人間失格」における物語の構造そして「人間」という概念の意味を、六〇年をへて新たにときほぐす書き下ろし評論。太宰治、生誕一〇〇年の贈り物。
二二六頁 二五〇〇円

ジョイスとめぐるオペラ劇場

宮田恭子

テノールの歌手としても存在感を刷めたジョイスがいかにオペラの歌詞をわがものとし、『ユリシーズ』『フィンネガズ・ウエイク』に反映させたか。一四のオペラを通してジョイスを考え、ジョイスを通してオペラを語る。
15.6 三三三頁 四〇〇〇円

金井美恵子の想像的世界

芳川泰久

文学の歴史と制度に戦略的に挑み続けてきた小説家のほとんどすべての作品を子細に読みとくとき、その全体像を解き明かす初のモノグラフィイ。〈寄る辺なさ〉と〈不在〉と〈書くこと〉と……
11.6 二七五頁 二八〇〇円

魂のたそがれ 世紀末フランス文学試論

湯沢英彦

ユイスマンス、ジャン・ロラン、メーテルランク、ラシールド等、十九世紀末を生きた作家たちの作品を読み解きながら、魂のありかを見失った〈終わり〉の時代の人々の、迷いと焦燥と闘いを浮かびあがらせる渾身の批評。
13.4 三〇六頁 三三〇〇円

歓待

芳川泰久

Y字路に佇む男の内面を映す「途方に暮れながら」、謎につつまれた父の過去をめぐる「ホネガミ」、モニタの向こうの女を視察する「歓待」。仏文学者／文芸批評家として既存の言語システムを挑発しつづけてきた著者の描く日常の断片は幾重にも錯綜して……。第六回小島信夫文学賞受賞。
二二六頁 三三〇〇円

文学／小説

ダイアーナの水浴

ピエール・クロソフスキー 宮川淳・豊崎光一訳
 水浴するダイアーナに鹿に変えられ猟犬たちに噛み裂かれるアクタイオン。この謎めいた神話の註釈の形をとりながら、ドゥルーズに《神学とボルノグラーフィの合一》と評された著者が、《見る》ことの欲望と罰とを絡回す。
 A5変判二八頁 二〇〇〇円

おしゃべり／子供部屋

ルイールネ・デ・フォレ 清水徹訳
 《かつて書かれたもつとも奇怪でもつとも衝撃的な作品のひとつ》とジョルジュ・パタイユに評された中篇『おしゃべり』に、短篇集『子供部屋』をあわせて、きわめて寡作な、この《沈黙》と《孤独》の小説家の全貌を紹介する。
 09.10 四六判三三二頁 二八〇〇円

さまざまな空間

ジョルジュ・ペレック 塩塚秀一郎訳
 ページベッド―寝室―アバウトマン……世界―空間。言葉あそび、引用、タイポグラフィを交えながら、日常から想像世界へ、あらゆる空間を「極私的」な物語でしるしづける企てが、やがて読む者の空間へのまなざしをも変える要約困難な中編小説。
 A5変判二三三頁 二五〇〇円

うわずみの赤

イエルーン・ブラウワーズ 林俊訳
 終戦間近の蘭領東インド。日本軍による占領下、女性捕虜収容所での悲痛な光景を目撃しつづけ、作家となった《私》は、三十五年後、母の死の知らせを契機に、苛酷な生に立ち向かったひとりの女の姿を追想し始める。現代オランダ作家の自伝的小説。
 四六判 九六頁 一八〇〇円

フランス式クリスマス・プレゼント

ジョゼ・ピエール他 にむらじゅんこ・大磯仁志訳
 シュルレアリスト作家の大御所、ジョゼ・ピエールやピエール・ブルジャッド、七〇年代にフランスの国民的セックス・シンボルだったボルノ女優アリジット・ラエなど個性的な書き手による、クリスマスマスをテーマにしたエロチックで幻想的な短編小説集。
 四六変判二八四頁 二〇〇〇円

老教授ゴバルの犯罪

アルベール・コスリー 田中良知訳
 カイロの貧民街を舞台に、娼婦殺しをめぐって繰り広げられる誇り高き除け者たちのおかしな人生の物語。ヘンリー・ミラーとアルベール・カミュによって見出されたエジプト出身のフランス語作家の本邦初紹介。
 四六判二六三頁 二二〇〇円

倦怠の華

ピエール・ロチ 遠藤文彦訳
 十九世紀末から二十世紀初頭にかけてフランス海軍士官として世界中を巡航した異色作家ロチが変幻自在な対話形式で繰り広げる、奇妙きつな回想／夢／紀行／小説の数々。
 09.9 四六判二七八頁 二八〇〇円

給料をあげてもらうために上司に近づく技術と方法

ジョルジュ・ペレック 桑田光平訳
 フランス文学の奇才が提案する、不透明な時代を生き抜くためのウリボの昇給のススメ！「い段ぬきの『煙滅』など、奇想天外な作品ばかり残した、ペレックによる、新・実用書？」本邦初、フロッチャート文学！！
 15.6 四六判並製一五五頁 二〇〇〇円

フランスの遺言書

アンドレイ・マキーヌ 星替守之訳
 フランスで生まれロシアに嫁いだ祖母の過去には、ベル・エポックの逸話と両大戦を生き抜いた女の悲痛な人生が秘められていた――。祖母への追憶のうちから自らの出生の謎に出会うロシアの少年の成長の物語。第八回日仏翻訳文学賞受賞。
 四六判三六頁 二六〇〇円

ある人生の音楽

アンドレイ・マキーヌ 星替守之訳
 ピアニストを夢見たロシアの少年は、「再教育」を逃れるため兵士になりすまし、『ソヴェト』という時代を生き抜いた――。《歴史》に押し流されていった、ひとりの男の人生へのレクイエム。ロシア系仏ゴンクール賞作家の話題作。
 四六判一四四頁 二〇〇〇円

八月の日曜日

パトリック・モディアノ 堀江敏幸訳
 ニースの青い空、白い建物、棕櫚の木々。舗道に映る《私たち》の影、そしてあの男――。巨大なダイヤモンド《南十字星》をめぐる繰り広げられる孤独な男女の迷行。フランスで最も人気の高い小説家によるミステリアスな恋愛小説。
 四六判三三八頁 二二〇〇円

ロチの結婚

ピエール・ロチ 黒川修司訳
 海軍士官としてタヒチを訪れ、島の女王の寵遇をうけたロチは美しい娘ララフと出会い、楽園的で牧歌的な恋を織りなしてゆくが……異国趣味あふれる悲恋物語。
 10.12 四六判二六三頁 三〇〇〇円

メフィス

フロラ・トリスタン 加藤節子訳
 ユートピア思想の洗礼を浴びたフェミニストにしてジョルジュ・サンドのライバル、アンドレ・ブルトンによって「フランス・ロマン主義の心臓部」と称えられた女性作家の唯一の《プロレタリア小説》が世紀をこえて甦る。
 10.1 四六判三八八頁 三八〇〇円

チュチュ世紀末風俗奇譚

野呂康十安井亜希子訳
 世紀末のバリを舞台に俗悪ブルジョワが繰り広げる、キツチュで奇矯な行動の数々。エログロ、近親相姦、フリックス、腐猫の宴、糞尿譚、罵詈雑言がいたるところ鏝められた露悪趣味文学の極北。
 14.6 四六判函入二八〇頁 三五〇〇円

ウーリカある黒人娘の恋

クレール・ド・デュラス夫人 湯原かの子訳
 「悲しいかな、私はもはや誰にも属していなかったのです。私は人類すべてに対して異邦人だったので！」十八世紀、フランス革命のさなか、バリの貴族社会で愛に焦がれ、「悲恋」に存在を賭した黒人少女の、異色の愛の告白小説。
 14.1 四六判一〇四頁 一五〇〇円

ポストモダン小説 Positive 01

M・レイナー、W・ヴォルマン、H・ジェイ、風間賢二他
ミニマリズムにはウンザリだ！ 既成の小説概念を解体したピンチョンやパース等を継承する八〇〜九〇年代アメリカのアヴァンギャルドでポップな《ポストモダン小説》の全貌を全篇初訳で徹底的に紹介する。詳細作家ガイド付き。
A5変判並製三五九頁 二〇〇〇円

嫌ならやめとけ

レイモンド・フェダマン 今村楯夫訳
アメリカ大陸横断を物語の横軸に、数々のメタ・フィクショナルな仕掛けや驚くべきタイポグラフィの使用によって、絶えず物語を創造／破壊する《ポスト構造主義小説》の傑作。現代アメリカのポストモダン小説の代表作のひとつに数えられる大長篇。
四六判七二六頁 五〇〇〇円

エロス、アンチ・エロス

ハロルド・ジェフイ 今村楯夫訳
荒野から摩天楼へ、摩天楼から荒野へと、エイズ時代のアメリカを自在に疾駆する、十四の倒錯した《愛の物語》。それぞれに独立しながら絡み合い、時にフラッシュ・バックする、ポップでアヴァンギャルドな短編集。
四六判二六二頁 二八〇〇円

暗闇の楽器

ナンシー・ヒューストン 永井遼・いぶきけい訳
現代のマンハッタン／暗黒の中世フランス、二つの世界が時空を超えて交錯する奇跡のパラレル・ストーリー。『天使の記憶』『時のかさなり』の著者の最高傑作。高校生が選ぶゴンクール賞受賞。
10.5 四六判三四頁 二八〇〇円

パラダイスの乞食たち

アーヴィング・ステットナー 本田康典十三保子ステットナー訳
一九四〇年代後半、ブルックリン育ちの《ぼく》は、ヘンリー・ミラーの影響をうけ、大西洋をわたってパリで放浪生活をする……。水彩画家、編集者、詩人、作家として、アメリカ、ヨーロッパ、そして日本で活躍した著者の、みずみずしい自伝的小説。
四六判二九六頁 二五〇〇円

リノット 少女時代の日記 1914-1920

アナイス・ニン 杉崎和子訳
愛に悩み、愛に溺れ、愛に生きる……のちに「性」の作家として世界的に名を馳せるニンが、その才能の萌芽を予感させる鋭い観察眼と繊細な感性によって、十一歳から十七歳までの多感な思春期の日々を赤裸々に綴った日記。
14.8 四六判二五二頁 二五〇〇円

ミノタウロスの誘惑

アナイス・ニン 大野朝子訳
太陽きらめくメキシコの華やかなリゾート地。米国人ジャズ・ピアニストのリリアンは独りで演奏旅行に訪れ、現地のさまざまな人物たちと出会うなか、自分の本当の姿と向き合うようになる……。旅と音楽をモチーフに洗練された筆致で描く珠玉の小説。
10.8 四六判二二三頁 二五〇〇円

人工の冬

アナイス・ニン 矢口裕子訳
異端の愛こそ美しい。——アメリカで長いあいだ発禁となっていた先駆的な性愛小説三篇（『ジューナ』『リス』『声』が原形（一九三九年パリ版）のまま七十年ぶりに甦る。
09.9 四六判三四頁 二八〇〇円

午後の人々

アントニー・ポウエル 小山太一訳
独特のフラックな感覚により、多くの熱狂的ファンを持つイギリス文壇の老練の、本邦初紹介の代表的中編。両大戦間期に青春を送る「失われた世代」の刹那的日常と退廃を、独特な会話のセンスにより優美に描き出す。イギリス版『グレート・ギャツビー』。
四六判二九二頁 二八〇〇円

ドラキユラ【完訳詳注版】

ブラム・ストーカー 新妻昭彦十丹治愛訳／注釈
今や英文学史上の古典の地位を確立したとも言える吸血鬼小説の傑作が、本邦初の完訳にて甦る！ さらに、その前章ともいえる短編「ドラキユラの客」と、「執筆ノート」「取材ノート」も収録。豊富な資料と詳細な注釈で、恐怖の原点に多面的に迫る。
A5判五三八頁 四〇〇〇円

マルタン・ゲールの妻

ジャンネット・ルイス 杉浦悦子訳
突然の夫の失踪。そして八年後の帰還。しかし、帰ってきたのは？ 十六世紀南仏に実際に起きた事件をもとに、待ち続ける妻の揺れ動く心理を流麗な筆致で丹念に描き出した、本邦初紹介の現代アメリカ作家による特異な恋愛小説。
四六判一四九頁 二〇〇〇円

クー・クラックス・クラン 革命とロマンス

トマス・ディクソン・ジュニア 奥田暁代・高橋あき子訳
南北戦争後の混乱を極めた南部再建期に登場した白装束の秘密結社《クー・クラックス・クラン》の全貌を活写し、グラフィス『国民の創生』の原作ともなった歴史ロマンス。《アメリカ文学史上、最も危険な予言の書が、いまここに甦る》（異孝之）
A5判四二頁 五〇〇〇円

パティ・ディプーサ

ペドロ・アルモドバル 杉山晃訳
スペインの新世代を代表する世界的映画監督が、深夜の大都会を舞台に、あらゆる快楽を貪り尽す稀代のセックス・シンボルのダイナミックな日常をメタ・フィクショナルな仕掛けと極彩色のキッチュ感覚で描くコミカル・ポップ小説。
四六判一四四頁 二〇〇〇円

知恵の木

ピオ・パローハ 前田明美訳
キューバをめぐる米西戦争のさなか、無気力で旧態依然の社会のうちに愛するものを失い、人生を模索する主人公の葛藤と軌跡。ヘミングウェイが《私よりもノーベル賞を受けるべき人だ》と評した、十九世紀スペインの「九八年の世代」を代表する作家の自伝的長編小説。
四六判三三三頁 三五〇〇円

フォルトゥナータとハシシタ(上・下巻)

ベニート・ペレス・ガルドス 浅沼澄訳

大富豪の御曹司に弄ばれる二人の女の悲喜劇を通して、緻密に描写されるマドリッドの民衆の姿。《セルバンテス以降のスペインにおける最も偉大な小説家》と称される文豪による十九世紀スペイン文学の傑作！

A5判 上巻五二五頁・下巻五〇二頁 各二八〇〇円

バルセロナ・ストーリーズ

J・パルーチヨ、Q・ムンゾー他 田澤耕編訳

ピカソやミロ、ダリ、ガウディ等を生んだ文化都市バルセロナの言語ニカタルーニャ語による七作家の十三短篇によって、今日の《バルセロナの精神》を鮮やかに浮き彫りにする本邦初の現代カタルーニャ語文学短篇選集。

四六判一八八頁 一五〇〇円

チニーホフの夜

中村邦生

《私はふと過去の風景を見つめているような気持ちになった。むしろ今という時間を遠く未来から懐かしんでいる気分と言うべきかもしれない。——ただ過ぎるためにある動き。すべてが懐かしい気持ちの中に吸い込まれていく。》虚実の陰影を精妙な文体で刻む短編集。

89頁 四六判一八三頁 一八〇〇円

山高帽と黒いオーバーの背

近藤耕人

モンマルトルのユトリロ、セーヌ河岸の意識の流れ、パレ・ロワイヤルのマグリット、地下鉄の女。非人称的に描かれる《わたし》が、パリをさまよう中で見た光景、出会った人、通り過ぎていった空間と時間……。現実と虚構のはざまを往還する珠玉の短編集。

144 四六判二二二頁 二五〇〇円

石の中から聞こえる声

近藤耕人

《石垣の頭上で風が鳴り、さらに遠い洞窟から風の溜息が聞こえるようでもあり……》ニューヨーク、パリ、ロンドン、ダブリン、アラン島……。異邦の風景から浮かび上がる記憶とことば。写真研究者として知られる著者の初の短編集。

四六判二四四頁 二五〇〇円

モスクワの声

大石雅彦

魂のダンスを踊る少女《エコー》、暗躍するカルト集団《ニチエヴォキ》。声なき声に導かれて、《ハイ》の奇怪な冒険がはじまる……。ロシア・アヴァンギャルド芸術、とりわけマレヴィッチの気鋭の研究者として知られる著者の初の長編小説。

四六判三〇六頁 二四〇〇円

日本原発小説集

柿谷浩一編

豊かな未来を実現する夢の技術か？ あるいは人類の滅亡を促進する絶望装置か？ 推進／反対の立場を超えて集成された、初原発文学アンソロジー。現在では入手困難な五篇を収録。

110 四六判並製二四九頁 一八〇〇円

キアロスクーロ

織江耕太郎

原発によって最愛のものを奪われた五人の男たち……。都心のナイトクラブ《キアロスクーロ》に巣食い、原発利権をむさばる政治家、官僚、財界、マスコミ、そして電力資本の暗部を告発し、復讐を誓った彼らの命運は……？

1312 四六判三三九頁 二八〇〇円

批評

小説構想への試み

中村真一郎

日本文壇の私小説的風土に抗して、西欧的方法意識によって戦後文学を領導してきた著者のライフワークともいうべき《四季》四部作の詳細自注つき創作ノート。一六頁の別冊付録(対話II清水徹・小佐井伸II)を付す。

A5判二〇四頁 二八〇〇円

続・小説構想への試み

中村真一郎

戦後文学の一記念碑ともいうべき《四季》四部作のうち『春』及び『夏』の創作ノートを収録した正篇に続き、『秋』『冬』のノートに書き下し詳細自注を収める。さらに、通説の際の便をも考え、四部作全体の人物表と事件年表をも付す。

A5判三三四頁 四〇〇〇円

どいにもない都市どいにもない書物

清水徹II宮川淳

《文学の総体はすでに書かれているのであり、現実の書物とは、すでに存在している書物の総体のごく一部が多少の変形と夾雑物をともないながら……》。書物と都市をめぐる清水のテクストを宮川が《書き直した》パフォーマンスとして書物。

A5変判並製函入二二九頁 二五〇〇円

物語とはなにか

浅沼圭司

ひとはなぜ物語を語る／書くのか。なぜ物語を聞く／読むのか。広漠たる物語の地平を「物語の世界」と「語り」の点と一語りの点という視点から鮮かに照らし出す。鶴屋南北「盟三五大切」と藤沢周平「蟬しぐれ」をモチーフとしたふたつの綺想曲。

A5判三〇五頁 四〇〇〇円

映ろひと戯れ 定家を読む

浅沼圭司

『新古今』のいう以上に、日本の詩歌そのものの代表者ともいうべき藤原定家。その歌の根底にある極め難い美の源泉を、今日のヨーロッパの文学II哲学理論を援用しつつ斬新な手法で分析する。厳選された定家の歌四十五首に美学的側面から徹底的に迫る。

四六判二〇四頁 二五〇〇円

ロラン・バルトの味わい 交響するバルトとニーチェの歌
浅沼圭司

構造主義の、ないしはポスト構造主義の旗手のひとりとして、すぐれて二十世紀的な著述家を、『いまここ』の思想家として読む。《浮遊し、迷走し、もつれつつ》、ニーチェの「歌」と交響するバルトの「歌」を聴く。
1010 四六判二四頁 二五〇〇円

思考の天球
小林康夫

ベンヤミンの《無果実》、カフカの《壁》、オースターの《幽霊》……、遠い記憶のなかの儚きものたちをめぐり乱反射する思考の残像を、寓話的物語形式のうちに書きとめた断章集。しなやかな知の多様な声。言葉が紡ぎ出す即興曲。
四六変判二〇九頁 二〇〇〇円

風の配分
野村喜和夫

移動、律動、眩暈。フランスから南アフリカへ、彷徨する詩人の旅の記録。現代詩の先端を走り続ける詩人の研ぎ澄まされた五感に映る一瞬の風景が、きらめく断章形式のうちに蘇る。第三十回高見順賞受賞。
四六判二三四頁 二八〇〇円

ビートとアートとエトセトラ
ヤリタミサコ

東京ポエクットの主宰者として知られる現代詩の新世代の旗手が、ギンズバーグ、北園克衛、カミングズとその周辺の詩人たちへ軽やかにかつ徹底的に肉迫する。
四六判並製二九三頁 二八〇〇円

詩を呼吸する 現代詩・フルクス・アヴァンギャルド
ヤリタミサコ

日本の今日の詩とことばとアートの状況へコミットし続ける著者がみずからの交友をもまじえながら、若手詩人たちの詩に寄り添いつつ批評する。二冊、同時刊行！
四六判並製二九頁 二八〇〇円

カミングズの詩を遊ぶ
E・E・カミングズ詩集 ヤリタミサコ向山守編訳

一篇の詩が言葉をこえて「詩絵」となる。独自のタイポグラフィを考案し、常套的な詩の書き方を打破したカミングズの詩空間をめぐる《詩の散歩》。時をこえて読みつがれるその詩を新たな感覚でよめる。
107 A5判並製二二頁 二〇〇〇円

歩くキノコ
飯沢耕太郎

ナイロビ、モンバサ、アテネ、イスタンブール、ブダペスト、ブラハ……。食べた飲み飲んだり眠ったり、書いて描いて歩きつづけた六カ月。写真評論家として活躍する著者のユニークな視線に止まったカラフルなエピソードいっぱいの旅のエッセイ。
四六判二〇三頁 二四〇〇円

耳をすまます旅人
友部正人

七〇年代からシンガーソングライターとして旅を続けながら歌う詩人が日本各地で出会った風の音、海の音、古い友人とおしゃべり。全篇から音楽の聴こえてくる旅の連作エッセイ集。どの場所にもきつと一度は行ってみたいくなる。
四六判並製二八五頁 一八〇〇円

纏う

大宮勘一郎・神尾達之・嶋田由紀・廣瀬浩司他
ジメメル ラーヴァターからハイデガー、ドゥルーズ、寺山修司、コンドーム、中村うさぎまで……。六人の気鋭のヨーロッパ文化研究者による、脱「表」「層」文化系論集。
四六判二八八頁 二八〇〇円

わび・さび・幽玄

鈴木貞美・岩井茂樹編
和歌・能・茶、日本庭園、俳諧など、さまざまな領域において《わび》《さび》《幽玄》が日本の美学の核心として語られるようになった状況を歴史的に考察し、《日本の美学》の原点を探る、気鋭の研究者たちによる共同研究。
A5判五三八頁 六〇〇〇円

綺想の風土 あおもり

黒岩恭介
綺想の国あおもりが生んだ文化、芸術家たち——建部綾足、陸羯南、菊岡久利、小國英雄、棟方志功、太宰治、寺山修司、鈴木正治……。青森県近代文学館長を務めた著者が、彼らの作品に直接ふれることによって得た、新たな発見や経験について、丹念につづる美術エッセイ。
155 A5判二四三頁 三五〇〇円

髑髏の世界

中川徳之助
《仏界、入り易く、魔界、入り難し》。《自ら「狂客」を称し、「風狂」を称し、「破戒」を称した室町時代中期の高名な禅僧、一休宗純和尚。《人間》一休の《生》の軌跡を詩偈のなかに読みとき、その実像に迫る。
133 A5判三四九頁 五〇〇〇円

怪談異譚 怨念の近代

谷口基
怨みはらさでおくべきか！ 江戸時代より語り継がれてきた《怪談》は、国民国家形成の過程でどのように変容し、時代の《闇》を描き出してきたのか。円朝や漱石から新発掘の文学作品にいたる諸資料を博捜し、《怨念》の力に現実突破の契機をみる異色の書き下ろし評論。
四六判二六〇頁 二八〇〇円

江戸芸能散歩

東京都高等学校校国語教育研究会編
巻頭エッセイ「柳家小さん、市川團十郎、葛西聖司、服部幸雄」
現代東京に残る、歌舞伎、落語などの緑の地を訪ねる、江戸芸能散歩の決定版。便利なイラスト地図つき。江戸文化入門、古典芸能鑑賞ガイドも収録。
A5判並製二九八頁十別丁図版八頁 一五〇〇円

漱石の文法

北川扶生子
十九世紀末という日本語の根底的な変革期に、新たな読者層をまえに、漱石はどのようにして「世界」を獲得し、「小説」を切り拓いたのか？ 漱石文学の新たな可能性を問う。
124 A5判二八四頁 四〇〇〇円

鷗外のベルリン 交通・衛生・メディア

美留町義雄
カフェ、広告、鉄道、上下水道……。十九世紀後半のドイツへ留学した若きエリート、森鷗外。『舞姫』の舞台となるこの都市で、彼が実見し、日本の現実へと変奏を試みたものとは？ 八十点以上の貴重な図版を駆使して浮かびあがる、二つの帝国の相貌。
108 A5判二二三頁 三五〇〇円

日本近代文学と『獵人日記』

内村裕子

ロシア文学史上、リアリズムの成立に深く関わり、自然描写の転換をもたらしたツルゲーネフの『獵人日記』が、『二葉亭四迷と嵯峨の屋おむろの翻訳を通して独歩、花袋、藤村ら自然主義作家たちに与えた影響』そしてそれが日本近代文学の発展に果たした役割を詳細に解明する。

A 5判四〇九頁 六〇〇〇円

虎の書跡 中島敦とボルヘス、あるいは換喩文学論

諸坂成利

始まりもなく、終わりのない(パベルの図書館)を訪れたものの文学とは？ 中島とボルヘスに典型的にみられる《換喩》的表現に現代の文学の美とリアリティを見出す気鋭の比較文学者の野心作。第九回日本比較文学会賞、平成十七年度国際文化表現学会賞受賞。

A 5判二七頁 三〇〇〇円

幻の《今井邦子像》の真実 彫刻家高村光太郎が

刻んだ歌人の魂

長谷川創一

《をとめ我この血汐もて涙もて思ふままもて歌はんものを》。高村光太郎の幻の《今井邦子像》をてがかりに、その才能と美貌によって一世を風靡したこの歌人の生涯を、大正から昭和への激動の時代のうちに辿る。邦子の自伝的作品三篇を併載。

A 5判三五八頁 四〇〇〇円

絵本で読みとく宮沢賢治

中川素子 十大島丈志編

賢治の作品はどのように受容され、再創造されたのか？ 現代美術研究者、日本語・日本文学研究者、絵本編集者などさまざまな分野の執筆陣が画像化・絵本化された賢治ワールドを多彩な視点から読みとく。

13.11 A 5判二六三頁十別丁カラー図版八頁 三五〇〇円

小林秀雄 骨と死骸の歌 ボードレールの詩を巡って

福田拓也

小林秀雄の初期批評の代表作『悪の華』一面までとされてきた、ボードレールから小林への影響に異義を唱え、最晩年の『本居宣長』に至るまで続くボードレールと小林との関係について徹底的に考察する画期的な小林秀雄論。

15.7 A 5判二九二頁 四〇〇〇円

人間山岸外史

池内規行

《太宰治の初期から中期にかけてのきらめくばかりの才能の奔出も、山岸との切磋琢磨がなければありえなかった》。太宰治の終生の友にして、天才を謳われた批評家／詩人の型破りの生涯を、日本浪漫派を経て戦後に至る軌跡の中に鮮やかに描く決定版評伝。

15.11 四六判四二頁十別丁図版八頁 四〇〇〇円

〈殺し〉の短歌史

現代短歌研究会編 田中綾他

一九一〇年の大逆事件から、第二次世界大戦、戦後の政治運動を経て、二十一世紀の無差別連続殺人にいたるまで、この百年におよぶ〈殺し〉の近現代を、短歌という〈方法〉によって別括する。

10.6 A 5判二七二頁 二八〇〇円

『新青年』の共和国

大石雅彦

本邦推理小説Ⅱ幻想文学史上に屹立する三大長篇——夢野久作『ドグラ・マグラ』、小栗虫太郎『黒死館殺人事件』、久生十蘭『魔都』に気鋭のロシア文学者が挑む！ 現代的理論装置を武器に、錯綜する謎の迷宮を徹底的に解明する。

四六判二九頁 二〇〇〇円

三島由紀夫〈表面〉の思想

川上陽子

明晰な思考によって戦後文学を牽引した三島にとって〈私〉とは誰なのか。『仮面の告白』『金閣寺』から『豊饒の海』にいたる代表作の精緻な分析から、現実／虚構／言語／肉体に囚われた小説家の〈表面〉をあぶりだす。

13.3 A 5判二七五頁 四〇〇〇円

中上健次の「ジャズ」

安岡真

戦後生まれで初の芥川賞受賞者である中上健次。彼の土台にあったもの、そしてたどりついたものはいったい何か？ ジャズ、芸能、神話、古典から中上の〈根〉を探る。

13.10 四六判二五六頁 二八〇〇円

日本探偵小説論

野崎六助

関東大震災の瓦礫のなから、純文学やプロレタリア文学、映画や写真などの新興メディアをも巻きこみつつ自立してゆく〈探偵小説〉をつぶさに検証し戦後にまで至るスリリングな通史。

10.10 四六判四三九頁 四〇〇〇円

わが先行者たち 文学的肖像

栗原幸夫

危機の瞬間にひらめく回想……編集者、批評家、あるいはアクティヴィストとして、〈戦後〉という時代を協働した埴谷雄高、中野重治、堀田善衛ら、こよなき先行者たちの肖像と回想。自筆年譜を付す。

10.9 四六判四六〇頁 四五〇〇円

文芸時評 1993-2007

川村湊

野中終、角田光代から松浦寿輝、川上末映子に至る数百人の作家たちを畑上、日本の小説界の激変を『毎日新聞』紙上で証言し続けてきた著者の十五年におたる文芸時評を集成する。《持続は力なり》という言葉でこれほどに鮮やかに示している仕事もない。(松浦寿輝)

A 5判六三三頁 五〇〇〇円

コンテツツ批評に未来はあるか

波戸岡景太

データベース化が進行し、人間と社会とがますます乖離してゆく現在(《コンテツツ》)はどのように語りうるのか？ 村上春樹、『シユタインズ・ゲート』からエミネム、『もののけ姫』に至る多彩な表現のうちに、この二十一世紀を読み直す。

11.11 四六判三三四頁 二五〇〇円

カルチャー・スクラップ

安原顯

『パイディア』、『海』、『マリ・クレール』と、時代の現場で文化を読み続けてきたスーパードキュメンタリーが、瀕死の《カルチャー》を愛惜しつつ、偏愛する書物・映画・音楽を語り尽くした世紀末の先鋭的カルチャー・クリティック。

四六判並製二七九頁 二五〇〇円

迷路のモノローグ★

菅谷規矩雄

《わたしは戦後世代は、いまだみずからの思想の文体を、モードをこえた文体の思想として成就していかない》。現代日本の最も戦闘的な詩人の一人として知られる著者が、朔太郎、堀辰雄、埴谷雄高、吉本隆明を解読する。

A 5判一四三頁 一九〇〇円

溶解論

遠藤徹

ホメロス『オデュッセイア』から、ダリ等のシュルレアリスム、あるいは永井豪『デビルマン』、そして最終作で溶解・拡散したゴジラまで、古今東西のドロドロ・イメージを縦横無尽に往還し、世紀末文化の様相を解読する！
四六判一九九頁 二〇〇〇円

プラスチックの文化史

遠藤徹

第二次大戦後、人々の行動様式と生活空間を無意識のうちに変化させた「魔法の物質」プラスチック。その化学的発明の歴史そして社会への伝播と影響を、ハイ・アート、ポップ・カルチャー等の具体例に則して解き明かす、斬新な技術文化論。
四六判三四頁 三三〇〇円

越境する文学

土屋勝彦編 管啓次郎 十沼野充義 十西成彦 十田中敬子他

現代文学は《世界》と、どう切り結ぶのか？ アフリカ、ロシア、南米、ヨーロッパ、そして日本——国家の領域を突破することで《複数性》を獲得した、移民・亡命者たちの文化表現とその実践をめぐる共同研究の成果。
88頁 A5判三〇六頁 四五〇〇円

〈冒険〉としての小説 ロマネスクをめぐる

赤羽研三

バフチン、ルカーチ、ジュネットらの物語論を踏まえ、語り／読み／登場人物のレベルにおける〈冒険〉から、〈冒険〉としての小説の一般理論の構築へ向けて、十九世紀以降の小説を題材に、多様なジャンルにおける〈冒険〉の諸相に肉薄する。
154頁 四六判四三三頁 四〇〇〇円

危機のなかの文学

赤羽研三・北山研二・佐々木滋子・中山眞彦・吉田裕他

政治、経済、社会、文化のあらゆる領域で激動する二十一世紀の世界において、文学は成立するのだろうか？ するとしたら、いかなるかたちで、何のために？ 《文学の自明性》を疑い、危機のなかの文学を問う。
106頁 A5判二七四頁 三八〇〇円

ミメシスを越えて

近藤耕人

ホメロス、ダンテ、ラブレ、ブルースト、ジョイス、ベケット。現代文学の原点にして頂点である不朽の作品群を通して、分離、転移、複合する「わたし」の変容を追い、人間の認識力の根源に迫る、壮大な批評の試み。
A5判三〇四頁 四〇〇〇円

ロマンの原点を求めて 『源氏物語』『トリスタンとイゾー』『ペルスヴァルまたは聖杯物語』

中山眞彦

彷徨するエクリチュール、解体する物語、揺れ動く登場人物たち……『源氏物語』は物語的型を壊し、型を超えて、世界の現実そのものに迫ろうとする。ロマンは世界のすべてに向けて開いたテキストである。日仏の三古典を精緻に読み解きつつ、《ロマン》の復権をめざす。
四六判三三〇頁 四〇〇〇円

サッフオー 詩と生涯

沓掛良彦

プラトンによって「十番目の詩女神」と讃えられたレスボス島の詩人の現存するすべての詩編、詩断片を収録するとともに、その謎につつまれた生と詩的世界を精細に説き明かす。
A5判四五三頁 六〇〇〇円

オペラのメデイア 近代ヨーロッパのミソジニー

梅野りんこ

ルイー四世の威光を称えるべく誕生したフランス・オペラ。そこに幾度となく登場する魔女メデイアは、父を裏切り、子を殺し、夫を懲罰し続ける……近代ヨーロッパに底流するミソジニーの一端を、オペラの台本を通して浮き彫りにする。
142頁 A5判三〇六頁 四五〇〇円

ヴィクトル・ユゴーと降霊術

稲垣直樹

十九世紀後半のオカルト復興の嵐の中で『レ・ミゼラブル』の作家が、水死した長女の霊の出現を契機に没頭した驚くべき交霊会の模様を具体的に再現しつつ、文学創造と交霊術との深くかつ根本的な関係を問う異色の書き下し。
四六判二五六頁 二五〇〇円

焔の女 ルイーズ・ラベの詩と生涯

沓掛良彦

「十六世紀のサッフオー」「リヨンのサッフオー」と呼ばれたフランス文学史上最も有名な女流詩人の、運命的な報われることになかった激しい恋の果実ともいふべき全詩作品の完訳を含む本邦初の本格的書き下しモノグラフィ。
A5判一九九頁 二五〇〇円

メリメとロシア作家たち

浦野進

プーシキン、ゴーゴリ、トゥルゲーネフといった十九世紀ロシアの文豪たちを積極的にフランスに紹介したのはメリメだった。ロシアがメリメに与えた影響に光をあてるはじめての試み。
126頁 A5判二五二頁十別丁図版八頁 四〇〇〇円

リヨンのルイーズ・ラベ

マドレーヌ・ラザール 菅波和子訳

十六世紀というルネサンスの最盛期に南フランスの文化都市リヨンに生きた、類いまれな美貌と知性を兼ね備え《綱目屋小町》と謳われた奔放な女性詩人の実像を、現代フランスの碩学が克明に描きだす異色の評伝。
A5判三二八頁 四〇〇〇円

我が生涯の記

ジヨルジュ・サンド 加藤節子訳

生誕二〇〇年を経て甦る異貌のフェミニストの波乱の生涯。膨大な数の小説を書きつつ、ショパンやミュッセとの恋愛にとどまらず、時代の政治と社会を鋭く批判しつづけた《男装の麗人》の激しくも美しい自伝。
A5判並製三分冊貼函入計二六〇三頁十別丁図版三頁 一五〇〇〇円

テキストと表象

小西嘉幸

崇高／庭園／自伝／書簡体小説といった時代のトポスを、そしてルソー、モンテスキュー、ラクロアなどの謎めいたテキストを読みつつ、気鋭のフランス文学者が、表象の不可能を問い、十八世紀西欧の文学と思想を現代に解き放つ。
A5判三三三頁 四〇〇〇円

フロベール伝

アンリ・トロワイヤ 市川裕見子 十土屋良二訳

《何について書かれたでもない書物》を夢み、作品から作者を抹消することを願った現代文学の先駆者の日常を、当代きっての伝記作家が描く伝記文学の白眉。
A5判三七九頁 四〇〇〇円

フローベール『サラムボー』を読む

朝比奈弘治

現代文学の先駆者フローベールの、謎めいた歴史小説『サラムボー』を四つの視角から精緻に読み直し、《何について書かれたのでもない書物》の夢へと、そして今日における小説の運命へと肉迫する作品論＝小説論。

四六判二五九頁 三〇〇〇円

ボードレール伝

アンリ・トロワイヤ 沓掛良彦・中島淑恵訳

母への依存、浪費癖、借金苦、そして死後の栄光……。憂鬱と理想との間を揺れ動く《ダンディ》な《ボヘミアン》、《この世に適せざる存在》であり続けた天才詩人シャルル・ボードレールの生涯を、評伝の名手トロワイヤが鮮やかに描き出す。

A5判三六九頁 四〇〇〇円

ニーチェ・コントラ・ボードレール

道躰章弘

ニーチェがボードレールの読者だったことは今日、ようやく知られはじめているが、ニーチェとボードレール（そしてヴァーグナー）の深くかつ微妙な関係に光をあて、ボードレールの《二重性》の意味を探る哲学的肖像。

四六判二四九頁 二五〇〇円

マラルメ―書物と山高帽

立仙順朗

《いたるところにあつてどこにもない》詩を求めて、マラルメ後期散文の謎めいた森の中へとわけいり、マス・メディアの支配する大衆社会の中の詩と詩人の運命を、言葉と沈黙の意味を問う。《失われた全体のかわりに断片を……》。

A5判三四四頁 四〇〇〇円

祝祭としての文学 マラルメと第三共和制

佐々木滋子

六〇年代の《危機》を脱したマラルメのバリでの精力的な活動を克明に追いながら、出現しつつあった大衆社会のなかで夢みられた未来の書物・未来の演劇・未来の祝祭の意味を問う。《過去は終わったが、未来が遅れている……》

123 A5判三七五頁 五〇〇〇円

『イジチュール』あるいは夜の詩学

佐々木滋子

ステファヌ・マラルメの代表作のひとつ『イジチュール』。「危機の夜の中に誕生した」この作品の言語実践とマラルメの詩的思考の意味に肉迫する、日本のマラルメ研究の水準を示すともいえるべき、世界的にも類例のない野心的試み。

A5判四〇二頁 七〇〇〇円

世紀末の白い爆弾 ステファヌ・マラルメの書物と演劇、そして行動

中畑寛之

至高の《書物》を孤独に試みる言葉の錬金術師マラルメ。十九世紀末のパリを騒然とさせた爆弾テロの閃光のなかで詩人が選んだ文学的《行動》の意味／戦略とは？ 気鋭の研究者が、書くという行為＝文学的爆弾を新たな視点で読み解く。

89頁 A5判六六四頁 八〇〇〇円

《彼女》という場所 もうひとつのマラルメ伝

永倉千夏子

晩年の《ミューズ》メリー・ローランとは誰か？ メリーとの関係からマラルメの作品を読み解くと同時に、この偉大な詩人の文学的人生を縦横無尽に解き明かす、最新の異色の伝記。

124 A5判七八七頁 二〇〇〇円

マラルメと音楽 絶対音楽から象徴主義へ

黒木朋興

象徴主義を代表する詩人マラルメ、その鞏固な詩句は《音楽》といかなる関係をととり結んでいたのか？ ヴァーグナーによる《絶対音楽》の影響から、当時の音楽学者たちの理論を丹念に洗いなおすことにより、詩人と《音楽》の関係を更新する。

139 A5判五〇四頁 七〇〇〇円

ロートレアモンと文化的アイデンティティー イジール・デュカスにおける文化的二重性と三言語併用

寺本成彦訳

十三歳で渡仏したウルクアイ出身のイジドル・デュカス。その彼がスペイン語を話せないわけがない！ 不問に付されてきたデュカスのバイリンガルの問題をラテンアメリカの二人の研究者が新たな視点から徹底的に問い直す。

121 A5判七四頁＋別丁図版八頁 二五〇〇円

アルチュール・ランボー伝

ジャン＝リュック・ステンメッツ 加藤京二郎・斎藤豊他訳

伝説の環にからめとられた詩人、アルチュール・ランボー。その不可能な存在を歴史の場に連れ戻し、《ひとつ》《一貫した》詩人の姿を、今日までのランボー研究の成果のうえに、生き生きと現前させる、最新の評伝。

A5判六二〇頁 八〇〇〇円

ヴィタリー・ランボー

クロード・ジャンコラ 加藤京二郎・富田正二・三上典生他訳

十九世紀フランスの詩人ランボーの母であり、巷間、《悪名》の高いヴィタリーの知られざる生涯を克明にたどる。母子の《反目》と《愛》のなから立ち現れる早熟な《天才》詩人の新たな一面。

A5判四二二頁 五〇〇〇円

ランボーと父フレデリック

チャールズ・ヘンリー・L・ボーデナム 加藤京二郎他訳

アルチュール・ランボーが、その《見者の詩法》を編み出したのは、父が残した書類の束のなかからだった。これまで語られることのなかったアルチュールの父、フレデリックに光を当て、貴重な研究。

A5判二八四頁 三五〇〇円

マラルメの想像的宇宙

ジャン＝ピエール・リシャル 田中成和訳

マラルメのテキストのなかに「隠された同一性」を浮彫りにするテーマ批評＝ヌーヴェル・クリティックの最も力強い試み。《リシャルとともに》《真の文芸批評》が姿をみせる。必読である《運実重彦》。再開第一回日仏翻訳文学賞受賞。

A5判七四六頁 九〇〇〇円

ステファヌ・マラルメ

ギイ・ミシヨ 田中成和訳

書くことの問題を、とりわけ《言語》の問題として極限にまで問いつめた十九世紀フランスの偉大な詩人、現代文学のプロブレマティックの隠れた中心ともいえるべき、この難解をもって知られる詩人への定評ある最良の入門書。

四六判二八三頁 二八〇〇円

ランボー家の方へ

イザベル・ランボー他 加藤京二郎他編訳
家族の目からみた《天才詩人》の最期の日々。詩人の妹の痛切な回想録をはじめ、両親、兄、妹の残した日記、書簡等、詩人のすべてを見続けた四人の家族の、現存するほぼすべてのテクストを集成する。
A5判二八二頁 三五〇〇円

ヴェルレーヌ伝

アンリ・トロワイヤ 沓掛良彦・中島淑恵訳
ランボーとの「恋愛」、放埒と困窮……。男たちを愛し女たちに恋した詩人の、矛盾に満ちた栄光の生涯をフランスの人氣小説家が綴る。
A5判四二九頁＋別丁図版一六頁 五〇〇〇円

エロスの祭司 評伝ピエール・ルイス

沓掛良彦
『ピリテイスの歌』『女と人形』によってマラルメの絶賛をうけながら文学的名声の絶頂で文壇を去り古書と未発表原稿に埋もれて死んだ世紀末の詩人の、文学と友情、そして二五〇〇人の「女たち」に捧げられた狂熱の生涯に迫る渾身の書き下ろし。
A5判五三六頁 六〇〇〇円

ピエール・ロチ伝

アラン・ケラー ヴイレジエ 遠藤文彦訳
フランス海軍の士官として世界中を巡航しながら、『お菊さん』等、四十篇もの小説を残したエキゾティズムの作家の波瀾にみちた生涯を活写する決定版評伝。
1012 A5判六五二頁 八〇〇〇円

ジュール・ヴェルヌ伝

フォルカー・デース 石橋正孝訳
ブルジョワとしての「市民ヴェルヌ」と、読書と個人の経験を織り交ぜ文学の素材とする「作家ヴェルヌ」の姿を一次資料、未刊行資料を博搜しながら描きつつ、驚異の旅の読み直しをも提唱する世界的権威による本邦初のジュール・ヴェルヌ評伝。
146 A5判六九頁＋別丁図版三三頁 一〇〇〇〇円

ヴィクトル・セガレン伝

ジル・マンズロン 木下誠訳
ブルターニュからポリネシアへ、ゴーギャンとランボーの経験、ドビュッシューとの共作、中国の旅（多様性）の美学としての《エグゾティスム》、常に新たなその作品……時代に先駆けたセガレンの生々作品の全貌！
143 A5判六九三頁＋別丁図版八頁 一〇〇〇〇円

シャルル・クロ詩人にして科学者 詩・蓄音機・色彩写真

福田裕大
世紀末の詩人として知られ、またエジソンに先立ち蓄音機を考案したともされるシャルル・クロは、色彩写真と呼ばれる技術開発の先駆でもあった。これらの領域で繰り広げられた探究を仔細に追い、彼の内側で詩と科学が交差する地点を描き出す。
144 A5判三二八頁＋別丁カラー図版八頁 四五〇〇〇円

ヴァレリーの芸術哲学、あるいは身体の解剖

伊藤亜紗
詩を用いて身体を解剖し、その機能を開拓する——二十世紀最大のフランス詩人が夢みた《純粋性》とは何だったのか。『カイエ』等の残された膨大な断片から、作品論、時間論、身体論を再構成する作業を通して、その謎に迫る。
134 四六判二七六頁 三〇〇〇円

狂気と文学的事象

シヨシヤナ・フェルマン 土田知則訳
イエール学派の新鋭が、フリーコ、デリダ、ネルヴァル、フロバール、フロイト、ラカン等の、哲学から文学に至る狂気に関するあらゆるタイプの言語を渉猟しながら、あくまで読解に抵抗する、『狂気』という文学的事象を撃つ。
四六判五七〇頁 五〇〇〇円

詩的言語の脱構築

バーバラ・ジョンソン 土田知則訳
イエール学派の泰斗が、デリダのグラマトロジー、ラカンのフロイト解釈等をもとに、ポードレール、マラルメのテクストを精密に読み解き、ついには《詩の危機》の瞬間を開示するにいたる、デイコンストラクション批評の最良の成果。
四六判二八八頁 三五〇〇円

作家の聖別 フランス・ロマン主義

ポール・ベニシユー 片岡大右十原大地十辻川慶子十古城毅訳
十九世紀前半、宗教的権力に代わり、世俗的な聖職者たらんとした詩人、文学者たちの「聖別」の過程を克明に追いながら、いかにして文学が高い精神的職務を担うよう求められるに至ったかを論じる。フランス・ロマン主義を徹底的に解明する著者畢生の大著の第一巻。
151 A5判六八七頁 八〇〇〇円

フランス現代作家と絵画

吉川一義十岑村傑編
二十世紀フランスの作家たちは美術作品との出会いと対話をいかに創作の契機としたのだろうか。ブルースト、ヴァレリーからデュラス、ゴダールに至る十二人の作家たちにおける文学と美術の創造的な関係を多角的に読み解く。
A5判三四四頁 四〇〇〇円

バルト以前／バルト以後

渡辺諒
ロラン・バルト『記号の帝国』の精緻な読解をもとに、異郷への関心に貫かれた作家／思想家たちを自在に往還し、「絶対マイノリティ文学」としてのフロンフォノン文学、ジャボノフォン文学を発見する鮮烈な文芸批評／エッセイ。
四六判三三五頁 三五〇〇円

ブルースト／バタイユ／ブランシヨ 十字路のエクリチュール

ロジェ・ラポルト 山本光久訳
「ブランシヨ以後、最もブランシヨ的な作家」と評される、現代フランスの特別な詩人にして作家、批評家が、「書くこと」と「倫理性」の問題、「読む」「書く」「翻訳する」ことの同一性の問題を問いつめた、極限へ向かう《エチカ》。
四六判二六四頁 三〇〇〇円

ブルースト的冒険 偶然・反復・倒錯

湯沢英彦
『失われた時を求めて』以前の生身の小説家の《歴史》の検証からはじまり、書物「物語」という「記憶の場所」において、ブルーストの《私》が展開する真実の探求のあり方を、テクストによる冒険としてとらえ直す、入念なブルースト研究の見事な成果。
四六判三九〇頁 三八〇〇円

ブルースト的絵画空間

真屋和子
エルスチールのモデルは、ターナーだった。ラスキンの思想や同時代のさまざまな画家たちの作品を祖上に、従来はモネなど印象派の画家だと考えられてきたエルスチールのモデルをターナーだとする新たな説を提示し、ブルーストの芸術観・文学観をあざやかに浮き彫りにする。
112 A5判四四三頁 六五〇〇円

アントナン・アルトー 自我の変容（思考の不可 能性）から（詩への反抗）へ

熊木淳

初期の書簡から演劇論、そして晩年の思考までアルトーをつらぬくものは、先立つ（起源）への徹底的な反抗であった。あらゆる系譜を逆転させる戦略的な視点から現代詩への影響を論じた最もアクチュアルなアルトー読解。

148 A5判三六三頁 五〇〇〇円

ジュールジュ・バタイユ 神秘経験をめぐる思想の限界と 新たな可能性

岩野卓司

バタイユの経済理論、哲学・文学作品を精査し、アリストテレス以来の形而上学の伝統そのものを問い直しながら、その「外」へと開かれた「経験」の思想を明らかにする極限の哲学。

103 A5判三二七頁 四五〇〇円

ジュールジュ・バタイユの《不定形》の美学

江澤健一郎

若き日のバタイユが『ドキュマン』誌で展開した、イデアリスムに抗する《不定形》という思想のうちに、晩年のマネ論やラスコー論にまで直結する図像や造形に関する思索を見出し、豊富な図版も交えながらその著作を精緻に読み解く。

A5判三九四頁 四五〇〇円

バタイユと文学空間

福島勲

两大戦間期そして戦後という動乱の時代を生きたバタイユの夢みた新たな文学、新たな社会とは何か。他者との不可能な交流の場、終わらぬ対話の場としての文学を問い、新たなコミュニケーションの形態をさぐる。

113 四六判一九九頁 三〇〇〇円

レヴィナスとブランシヨ（他者）を揺るがす中性的な もの

上田和彦

《私》に呼びかける「他者」とは誰なのか。「他者」の呼びかけに応える「私」とは誰なのか。ともにハイデガールの存在論の彼方をめざした哲学者と作家の数十年におよぶ友愛にみちた深く微妙な関係を鋭く問う気鋭の力作。

A5判三二七頁 四〇〇〇円

甦るレヴィナス『全体性と無限』読解

小手川正二郎

これまで顧みられなかった理性論という観点から「全体性と無限」の独自性に光をあて、主体論においてハイデガーと対峙し、なお根強い影響力をもつデリダの読解を糺す。生きていくレヴィナス哲学を甦らせる変革の書。

152 四六判三四四頁 三五〇〇円

モーリス・ブランシヨ 不可視のパートナー

クリストフ・ピタン

上田和彦・岩野卓司・郷原佳以・西山達也・安原伸朗訳
ブランシヨの生と作品を、神話化することなく批判的な精神を保ちながら丹念に読み、その「自伝的なもの」を炙り出す、ブランシヨ研究の牽引者による、顔のない作家」の本邦初の決定版伝記。

142 A5判六三三頁 八〇〇〇円

ルイ＝ルネ・デ＝フォレ

佐藤典子

バタイユが、そしてまたブランシヨが賞賛した「虚無のことば」。「書く／読む主体」という観点から、「隠蔽することで新たな事実を獲得する」と語った作家のメタフィクショナルな小説に迫る。

106 A5判一九九頁 四〇〇〇円

ベケット 果てしなき欲望

アラン・バディウ 西村和泉訳

不動の沈黙の先にはことばがあった。読むものに勇気を与え続けるベケットの詩作／思索の中で救い出されるものは何か？ フランス現代哲学の領袖が開く、ベケット批評の新天地。

四六判一二二頁 二〇〇〇円

ミラン・クンデラと小説

赤塚若樹

今日の《世界文学》におけるメルクマールとして屹立するミラン・クンデラを支え続ける《小説の精神》を、その作品と、多くの研究を自在に往還しながら、小説のテーマ、ことば、歴史を軸に、立体的に論じる、本格的な作家論。小説論。第九回木村彰一賞受賞。

A5判四五九頁 六〇〇〇円

サミュエル・ベケット！ これからの批評

岡室美奈子・川島健・長島確編

気鋭の研究者たちが、最新の研究を踏まえて、〈不条理劇の作家〉とは別の新たなベケット像を大胆に提示する、ベケット研究のスタンダード・ワーク。文献資料付き。執筆：竹本幹夫・西村和泉・垣口由香・藤原曜・宮脇永吏・景英淑・菊池慶子・久米宗隆・片岡昇・木内久美子

122 A5判三六七頁 三八〇〇円

ベケットを見る八つの方法 批評のポータル

岡室美奈子・川島健編

〈不可視の領域への刺すようなまなざしを持つ人、ベケット〉（J・M・クツツェー）。小説・哲学・演劇・美術・メディア等、多様で深遠な知の坩堝ともいうべき諸作品を精査する、ノーベル賞受賞者クツツェーを始めとする内外の研究者たちによるベケット研究の最前線。

133 A5判三八五頁 四五〇〇円

ベケットのアイランド

川島健

ベケット作品において繰り返し描かれる果てなき彷徨の原点は故郷アイランドにあった。様々な信条とイデオロギーが交錯する場、誰のものでもなく、誰のものにもなりえる空間「一人地帯」をキーワードに初期作品群に刻まれたアイランドの相貌の変化を追う。

142 A5判二二二頁 四〇〇〇円

ジャック・ルーボーの極私的東京案内

ジャック・ルーボー 田中淳一訳

数学者／小説家／ウリビアンが山手線で試作／詩作／思索するディープな東京案内。《詩作は詩と一体となり、秘密を隠した子供の笑い声と化す》（円城塔）。

117 A5判並製オールカラー一〇五頁 二八〇〇円

ロベール・デスノスラジオの詩人

小高正行

ラジオ番組・広告を詩的実践の場所としておこない、音声によって集団的な(夢)をリスナーと共有することでラジオの可能性を切り開いた詩人デスノス。二〇世紀マルメディアの先駆となった、番組・広告制作者としての詩人にスポットを当てる異色のモノグラフ。
196 四六判二七三頁 三〇〇〇円

セリーヌ伝

フレデリック・ヴィトウー 権寧訳

『夜の果ての旅』『なしくずしの死』などの作品で知られる「反ユダヤ」的作家セリーヌ。「自伝的」著作や多くの書簡・証言等をもとに、これまでの定説・伝説を覆す画期的評伝。第三十三回日本翻訳出版文化賞受賞。
A5判六八四頁十別丁図版六頁 八〇〇〇円

ドリユ・ラ・ロシエル

ベルナル・フランク 有田英也訳

一九三〇年代、共産主義と全体主義の狭間で揺れ続けた末、ナチス・ドイツに協力、大戦末期に自殺したフランス作家の生涯と作品を通して、自らもユダヤ人である著者が、現代に潜むファシズムの亡霊を浮き彫りにする、異色の作家論。
A5判三四七頁 四〇〇〇円

ポール・レオトリーの肖像

菅野賢治

ベル・エポックから戦後期のパリ文壇に生き、慧眼の劇評家として名を馳せる一方、日々の細密なメモを素材にした、長大な作品『文学日記』を残し、世を去った、二十世紀仏文学界の奇才のロマネスクな生涯が、生き生きと描き出される本格的評伝。
A5判三六〇頁 六〇〇〇円

また君に恋をした

アンドレ・ゴルトツ 杉村裕史訳

サルトルに「ヨーロッパの最も鋭い知性」と評された八十三歳の老哲学者が不治の病に伏す妻に宛てて最後のラヴレターを書く。ともに人生を歩み、ともに暮を閉じる……
1010 四六判三九頁 一五〇〇円

サン・テグジュペリ

R・M・アルベレス 中村三郎訳

砂漠と鉱物的孤独にみちたこの惑星にあって、《夢はひとつの奇蹟である》。あの「星の王子さま」の作者が夢想した数々の(生のウイジョン)を読みときながら、行動と瞑想によって培われた生涯を克明にたどるサン・テグジュペリの古典。
A5判二六頁 二五〇〇円

フランス・プロレタリア文学史 民衆表現の文学

ミシェル・ラゴン 高橋治男訳

《無名の文学、ないがしろにされた文学、文学とはみなされなかった文学、奇妙なことに資本主義体制からも社会主義体制からも等しく外部にとどまるようにと断罪された文学》の歴史。中世から現代に至るフランスにおけるプロレタリア文学の唯一の通史。
二〇 A5判五五四頁十別丁図版二四頁 八〇〇〇円

アナキストの大泥棒 アレクサンドル・ジャコブの生涯

アラン・セルジャン 高橋治男訳

遠洋航路に出た幼年時代、そして非合法活動で捕まり南米ギアナの流刑地へおくれた青年時代。波瀾万丈の冒険と流刑地での地獄をくぐり抜けた稀代のアナキストの驚くべき人生を辿った唯一のモノグラフ。
146 四六判三〇四頁十別丁図版八頁 三三〇〇円

シモーヌ・ヴェーユ研究*

村上吉男

不幸への並み外れた共感によって、労働の問題を文字通りの実践において問いつめ、三十四歳で逝ったシモーヌ・ヴェーユ。残された膨大なノート、論文、著作を渉猟しつつ、驚くべき生涯と思想の全体像に迫る大著。
A5判四八五頁十別丁八頁 五五〇〇円

D・H・ロレンスとシモーヌ・ヴェーユ*

リチャード・リリス 川成洋・並木慎一訳

性と生命力の深淵を宗教的情熱をもって探求し続けたロレンス、労働の問題の深淵へと降りたつたヴェーユ。二十世紀の煉獄を最も誠実に、勇敢に生きぬいたこの二人の文学者＝思想家の作品を英国の俊敏な批評家が鋭く解明する。
A5判二四三頁 二五〇〇円

『ユリシーズ』と我ら 日常生活の芸術

デ克蘭・カイバード 坂内太訳

アイルランド文学研究の泰斗が二十世紀最大の作家ジョイスの代表作の全十八章を、「目覚める」「歩く」「食べる」といった人間の日常の、主として(身体的な行爲)という素点から自在かつ独創的に読み解く。
1112 A5判三八四頁 五〇〇〇円

ジョイスをめぐる冒険

夏目博明

アリュージョンを手がかりにテクストの成り立ちを探り、仕組まれたトリックをかくくぐり、『ユリシーズ』を読みとく。アイルランドの歴史、経済をも俯瞰しながら、さまざまな批評理論を駆使し、ジョイス研究の新たな方位をさぐる。
156 A5判三〇七頁 四〇〇〇円

モダニストミナ・ロイの月世界案内 詩と芸術

フウの会編

エズラ・パウンド、T・S・エリオットらの賛辞を浴び、マルセル・デュシャーンにも影響を与えた前衛詩人であり、女優、デザイナーでもあったミナ・ロイ。その詩と散文の翻訳に加えて、詳細な作家論、作品論、解説によって詩人の全貌に迫る本邦初の試み。
148 A5判三八七頁十別丁カラ図版八頁 四〇〇〇円

ミューリエル・スパークを読む

大社淑子

いま、もっとも再評価が求められている英国の作家、ミューリエル・スパーク。有無を言わせぬ圧倒的な叙述によってエスカレートする、愛、諧謔、そして暴力。比類ない魅力をもたらしたその文学を概観する、必携の作家論/作品論。
1311 四六判三〇二頁 三三〇〇円

ドリス・レスリングを読む

大社淑子

アフリカに生まれ、SF・コミニズムそして性愛にいたるまで、旺盛な想像力による多彩な創作活動で知られる二〇〇七年度ノーベル賞作家が半世紀以上にわたって書きついだ作品のほぼ全てを詳細に読みとく。
1112 四六判二六二頁 三〇〇〇円

カズオ・イシグロ 境界のない世界

平井杏子

長崎に生まれイギリスで書き続けるグロバーな英語作家イシグロの全貌にせまる。デビュー作『遠い山なみの光』から、映画化され三月に日本公開予定の『わたしを離さないで』、そして最新作『夜想曲集』までの全作品を徹底的に論じつづす、本邦初のモノグラフ。
112 四六判二六四頁 一五〇〇円

日常の相貌 イギリス小説を読む

中川僚子

『わたしを離さないで』『闇の奥』『フランケンシュタイン』『ダロウエイ夫人』「恐るる女たち」等のイギリス小説にひそむ日常をおびやかす非日常との境界ににおける生の陰影を、怪物の言葉、牧草地の廃墟、ドレスの結び、漂着するゴミなどをとおして鋭く読みとく。
118 A5判二五七頁 三八〇〇円

英国ミステリーの部屋 ドイル／クリステイ室内装

飾事典

昭和女子大学短期大学部文化創造学科

ミステリー界の二大巨匠、コナン・ドイルとアガサ・クリステイ。シャーロック・ホームズのパイプ、ポアロのタイプライター、謎のメモが燃やされる暖炉……。彼らの作品の中でインテリアはどのように描かれているのか。イギリス文化とミステリーを知るためのインテリア事典。1108 四六判並製七八頁 二〇〇〇円

北アイルランドのインターフェイス

佐藤亨

北アイルランドの首都ベルファストに散在する、プロテスタントとカトリックの対立／交流の場「インターフェイス」。その両義性から読み解く、北アイルランドの社会・歴史・文化、そして紛争の現在。
141 A5判一四四頁十別丁カラー図版八頁 二五〇〇円

北アイルランドとミューラル

佐藤亨

北アイルランドという身体全体に彫られた意味のわからない、痛々しい刺青のようなもの——街頭の激しく美しく圧倒的な壁絵（ミューラル）が映し出す血塗られた（紛争）の地の現在。
113 A5判一三三頁十別丁カラー図版八頁 二五〇〇円

オルタナティブ・フィクション

風間賢二

マジックリアリズム、ミニマリズム、スリッパストリームからアヴァン・ポツプ、ポストコロニアル文学まで！ 六〇年代カウンター・カルチャーの洗礼を受けた英米小説の数々の〈徒花〉を概観する、ポストモダン小説入門／ブックガイド。
四六判並製三〇三頁 二五〇〇円

偽アメリカ文学の誕生

都甲幸治

《塵に訊け》とかつてジョン・フアンテは言った。「都甲幸治に訊け！」と私は言いたい。《偽アメリカ文学の誕生》を告げる本書は、すぐれた《偽アメリカ文学者》の登場を告げている。（柴田元幸）二十一世紀もつとも話題のアメリカ文学者の注目の第一評論集。
四六判三五二頁 二八〇〇円

シルヴィア・プラス父の娘、母の娘

木村慧子

ジュリア・クリステヴァ、メラニー・クライン等の精神分析理論を参照しながら、三十歳で自殺した、この女性詩人の残したテキストを縦横に分析し、文学理論の新たな地平を切り開く野心作。
A5判三二六頁 四〇〇〇円

アジア系アメリカ作家たち

杉浦悦子

《どの領域にもどのアイデンティティにもとどまることなく流動に身を任せ、幾重にも層を成す未知の自己を探り出し、創造してゆく》ジークリッド・ヌネ、シンシア・カドハタ、カレン・テイ・ヤマシタ、ジュンバ・ラヒリの作品に「国境」「母語」そして「文学」の意味を問う。
A5判二三八頁 二八〇〇円

アメリカに響く。パレスチナの声 サイド、ダル

ウイーシユから、ネオミ・シーハブ・ナイへ

小泉純一

アメリカに生きるパレスチナ系の詩人ナイ、ダルウイーシユ、そしてエドワード・サイドがみた（9・11）。混乱の中東／アメリカ、そこに生きる民衆ととりわけ子供たちの日々、死、そして希望に耳をすまます。〈故郷を失った痛み〉に対して文学は何ができるか？
110 A5判二五七頁 三八〇〇円

水の音の記憶 エコクリティシズムの試み

結城正美

文学表現は、はたして《環境》と共生しうるのか。田口ランディ、石牟礼道子、T・ウィリアムスらの再読を通して《人／自然》の新たな結びつきを検証する。鮮烈な環境文学論の誕生。
107 四六判二六七頁 三〇〇〇円

ファシズム、そして

和田忠彦

究極のモダニズムとしてのファシズム。国家と歴史の境界を越え、先駆者／篡奪者／傍観者／抵抗者として生きた表現者たちの実験と実践を手がかりに、二十世紀イタリアの《夢》と《現実》に肉迫する。
A5判二七四頁 三〇〇〇円

カフカの夢分析

フェリックス・ガタリ 杉村昌昭訳

現代哲学の最大の異端児が遺したカフカ論。そして構想していたカフカについての映画のシナリオ断片を集成する。六十五の夢に導かれて、新たなカフカが立ち現れる。
四六判一六八頁 一八〇〇円

カフカのプラハ

クラウス・ヴァーゲンバッハ 須藤正美訳

カフカが書き残したエピソードと随所に織り込まれた写真を眺めながら、カフカお気に入りのカフエ、映画館、散歩道を訪ねるうち、きつとプラハに行ってみたくなる！ 図版百点収録、ファン必携のカフカ・ハンドブック。
A5変判三三頁 二〇〇〇円

カフカと〈民族〉音楽

池田あいの

チェコに生まれたユダヤ系ドイツ人のカフカにとって、〈民族〉とは何を意味していたのか。激動の十九世紀末プラハを舞台に、友人プロットや作曲家ヤナーチェクとの関係を検証しつつ、〈小説〉と翻訳、そして《音楽》のアイデンティティを問うカフカ研究の新しい展開。
181 A5判二二五頁 三五〇〇円

カフカの動物物語〈檻〉に囚われた生

山尾涼

様々な抑圧に曝され苦しむカフカの動物たちは、何を訴えているのだろうか？ 存在の危機に瀕する彼（女）ら／動物たちは、隠蔽された問題を我々／人間に暴露し始める……時代の〈破れ目〉を穿つカフカの文学に、〈人間〉を再考するための契機を見出す。
153 A5判二五三頁 四〇〇〇円

オーストリア文学小百科

鈴木隆雄 編集主幹

中世からハプスブルク帝国時代、そして現代に至る豊饒なオーストリア文学の世界を網羅する本邦初の事典。作家、作品、文学活動、思潮、様式はもちろん、文学活動の場となった都市、地域、演劇、映画、音楽、美術等、一千項目以上を収録。
A5判函入総七〇八頁 一〇〇〇〇円

オーストリア文学とハプスブルク神話

クラウディオ・マグリス 鈴木隆雄・藤井忠・村山雅人訳
夢・幻想・諦観の交錯する詩的空間で人生の奥義を探究するオーストリア文学の起源から今日までを克明に辿りつつ、その現実逃避と、文学の人工楽園のトポスを呪縛し続けた《ハプスブルク帝国》の神話とを明るみに出し、滅びの苦痛と困難を告げる。
A5判五〇四頁 六〇〇〇円

フルバンあるいは絶滅の記憶

マネス・シユペルバー 鈴木隆雄訳
現代史の狂気を生き抜いたユダヤ人の小説家／心理学者が、忘却から浮かび上る《絶滅》の記憶に戦慄しつつ反ユダヤ感情の起源を追及し、宗族にも民族にも帰属せぬ「ユダヤ的存在」の新たな像を探索する現代ユダヤ論集。
四六判三〇〇頁 二八〇〇円

オーストリア中世歌謡の伝統と革新

松村国隆
中世オーストリア《恋愛歌謡》の伝統と権威に抗し、《格言歌》の世界を切り開いた、遍歴の歌人ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデの生涯と歌謡を中心に、十二〜十三世紀オーストリアの歌謡の世界を跡づける画期的研究。
A5判二九九頁 四五〇〇円

ヴォリナ

マネス・シユペルバー 鈴木隆雄訳
ユダヤ人絶滅計画の猛威の前に、人々が自らに課した重いくびきと、残された者に刻まれた罪の刻印。ポーランド東部、ガリチアの地、厳格なユダヤの伝統が支配する架空の小村の悲劇を描く傑作中篇。《ヒトラー》という名の災禍も、我らを罰する鞭なのだ。《
四六判二六頁 二五〇〇円

アーダルベルト・シュティフター研究

谷口泰
十九世紀オーストリア文学を代表するこの小説家の静謐な文学空間に秘められた政治性と現代性を丹念に読み解き、憩いと調和を愛する小市民的な作家という日本における通俗的なイメージを一新する著者畢生の大著。
A5判クロス装貼函入四八五頁 八〇〇〇円

歴史の横領

サロンと文学カフェから眺めた両大戦間期およびナチス体制下のウィーン M・ドゥブロヴィツチ 鈴木隆雄訳
憎悪の感情に引き裂かれた戦時下にあつて、信条の違いを越え、自由な精神が躍動し、数多の運命が交錯する舞台だった《カフェ》に集う、有名無名の作家、知識人、政治家、市井の人々。ウィーン新聞界の重鎮が回想する《現代史》のなかの日常。
四六判三三八二頁 四〇〇〇円

すべて過ぎ去りしこと……

マネス・シユペルバー 鈴木隆雄・藤井忠訳
今世紀初頭、東欧のユダヤ人町のラビの家に生まれ、ウィーンでマルクス主義者、心理学者、小説家となった著者は、スターリン主義と第二次大戦を生きぬいた！ 喪失、抵抗、放浪の記憶のなかに「人間の条件」を問う自叙伝。
A5判八二二頁 八〇〇〇円

中世ヨーロッパの歌

ピーター・ドロンケ 高田康成訳
祈り、諷刺、ユーモア、恋する心…… 吟遊詩人が歌い紡ぎ、写本に綴られ今なお残る数多の中世歌謡を、汎ヨーロッパ的な伝統のうちにとらえ、多様性を秘めた《ひとつの統一》として読み解く中世ラテン文学の傾学による大著。
A5判六二二頁 七〇〇〇円

デーモンと迷宮ダイアグラム・デフォルメ・ミメーシス

ミハイル・ヤンポリスキー 乗松亨平・平松潤奈訳
身体はデフォルメされる、「デーモン」あるいは「迷宮」という分身によってリルケ、ユゴー、ソクローフからロイ・フラー……現代ロシアの気鋭の批評家が幅広い芸術作品と五〇〇冊に及ぶ引用文献によって誘う、身体論の臨界。
A5判四七三頁十別丁函版「六頁 四八〇〇円

ブーニンの「眼」イメージの文学

宮川絹代
ロシア初のノーベル文学賞詩人にして小説家、イワン・ブーニンの恋愛小説集『暗い並木道』『日射病』『ミーチャの恋』『最も美しい太陽』などをとらえ、イメージⅡ具体的表象』の視点から、その不可視な本質に迫る。二〇一四年度日本ロシア文学会賞受賞。
13.10 A5判四三三頁 六〇〇〇円

隠喩・神話・事実性

ミハイル・ヤンポリスキー 日本講演集 平松潤奈他訳
記号論から出発し、ソヴィエト文化批判、身体論をへて《政治的なるもの》の考察へと向かった、現代ロシアの知のカオスの体現者の、昨夏の来日時の三篇の講演と長篇インタビューによって、その思想の核心に迫る。
A5判一九五頁 二〇〇〇円

都市と芸術の「ロシア」

近藤昌夫十 鴻野わか菜十 嵐田浩吉十 杉谷倫枝十 大平陽一十 村田真一十 竹内正美
ロシアの都市と芸術のなかに絶えず出現し、越境し、霧散してゆく《ロシア的なるもの》。その姿なき姿を世紀末から革命の時代の文学、映画、演劇、電子音楽の中に探る、七人の若手ロシア文学者による論文集。
A5判二六頁 二五〇〇円

リアリズムの条件 ロシア近代文学の成立と植民地

乗松亨平
《書物に耽溺した者に亡霊がとりつく。現実」という名の亡霊が。——構造主義以降の批評は、不可避の帰結として、「現実」に復讐される》ロシア文学の植民地表象を分析しつつポストコロニアル批評の彼方をめざす。第一回表象文化論学会賞奨励賞、二〇一一年度日本ロシア文学会賞受賞。 8.10 A5判三三八頁 四〇〇〇円

聖ペテルブルク

大石雅彦
ソ連邦の解体とともに西欧的なものとロシア的なもののせめぎ合いの場となったサンクト・ペテルブルク。そこに内在する膨大な文学的／芸術的記憶を記号論以降の現代的理論装置によって解きほぐす。
四六判三〇四頁 三五〇〇円

ドストエフスキーと小説の問い

番場俊
ドストエフスキーは、「小説」という形式をいかなるかたちで探求しつづけたのか。フロイト、バフチンを武器に、手紙／告白／メディア／時間を巡って、ドストエフスキー研究の新たな次元を切り開く、第四回表象文化論学会賞奨励賞、二〇一三年度日本ロシア文学会賞受賞。 12.12 A5判三三三頁 五〇〇〇円

プーシキン伝

アンリ・トロワイヤ 篠塚比名子訳
十九世紀前半、皇帝ニコライ一世の絶対的な権力支配のもと、高らかに《愛》と《自由》を謳いあげ、いまなお民衆から最も強く愛されている《ロシアの至宝》。一発の銃弾で幕をとじた、三十七年の短くも劇的なその生涯を描き尽くす決定版評伝。
A5判七七二頁 七〇〇〇円

プーシキンの決闘

原求作

詩人とその美しき若妻とフランス人将校との間に生まれる奇妙な三角関係。そこに舞い込んだ一通の不隠な手紙……。いまだ謎に包まれた十九世紀ロシアの天才詩人の死の逸話を豊かな人物造形により蘇らせる異色の評伝。小説。

A5判二六九頁 二五〇〇円

トゥルゲーネフ伝

アンリ・トロワイヤ 市川裕見子訳

十九世紀ロシアの貴族社会に生まれ、フランスをも愛した男の情熱的な生涯。ドフトエフスキー、トルストイと並ぶもう一人のロシアの文豪の実像を追う。

104 A5判二六〇頁 三八〇〇円

セルギイ・ラドネシスキイ年代記

原求作

タタール支配下の中世ロシアの分裂と混沌と戦乱と混沌を克明に描き、そこで人々の導き手となった隠者セルギイの生涯を描く書下し長篇歴史小説。主人公を時代に翻弄される個人として生き生きと甦らせる。《彼は祖国を救う運命にある》。

A5判六〇一頁 五〇〇〇円

トルストイ★

鹿島由紀子

ロシア文学史上最大の作家トルストイの諸作品を総巡りながら、《怒り苦惱する》《トルストイではなく、《日常の多色の》トルストイに照明をあて、その多面性、今日性を鮮やかに描くユニークなトルストイ論集。

A5判二七九頁 二八〇〇円

ロシア文学の庭

鹿島由紀子

ゴーゴリ、ドストエフスキー、トルストイ、チェーホフらの作品を中心に、ロシア文学のアイデンティティを探索しつつ、世紀末知識人の《憂鬱（タスカール）》のうちに、ロシア的心性の典型を確認するにいたるロシア文学論集。

四六判三二五頁 三五〇〇円

ロシアの十大作家

松下裕

プーシキン、ゴーゴリからドストエフスキー、チェーホフまで、日本の文学のみならず、日本人の心情と生活にまで深い影響を与え続けたロシア文学——その激情とユーモア、自由と反逆の精神を物語性豊かに語りかける、ユニークなロシア文学入門。

四六判二三八頁 二五〇〇円

美学の破壊★

渡辺雅司

十九世紀ロシアの《ニヒリスト》批評家ビーサレフ。そのニヒリズム思想の形成のプロセスを入念に跡づけ、十九世紀ロシア思想史が抱えていた問題の解明へと向かう本邦唯一のモノグラフィイー。略年譜、書誌を付す。

四六判一九五頁 二〇〇〇円

日常と祝祭 ソヴィエト時代のある編集者の回想

アレクサンドル・プジコフ 木村妙子訳

知られざるソヴィエト文化・出版状況の現場からの記録。権力の介入、奔走する編集者、個人的な作家たちのエピソード。祝祭の気分のみちた文学大全集の企画のかけには日常的編集作業。そこにはいつも、文学があった。

四六判四二〇頁 四〇〇〇円

ぼくの旅のすがた★

米谷耕太郎

かつての全共闘世代。今はフリーのロシア語通訳の著者がみた素顔の、等身大のソ連と東欧。暖い眼差しと苦いユーモアのうちに捉えられたペレストロイカの光と影。ソ連・東欧をさすらい歩く新しい世代の新しい旅のかたち。

四六判 四七頁 一五〇〇円

えうゐ ①〜⑬号★

北海道大学ロシア文学研究室編

ロシアの文学、思想を多角的に考察するための専門誌。主な執筆者：外川継男、鷲巢繁男、小平武、内村剛介、渡辺武、矢沢英一、安井侑子、北岡誠司他

A5判並製 平均一六〇頁 七五〇円（1〜4号）／八五〇円（5〜8号）
（品切＝1、2、10号）

ブルーノ・シュルツ 目から手へ

加藤有子

イメージ／言語という二つのジャンルをこえた表象へと向かうシュルツの独自の世界観をトータルに捉え、ナチスに射殺されたこのポーランドの小説家／画家の全貌に迫る。第四回表象文化論学会賞受賞。

123 A5判三六八頁 四八〇〇円

スペイン人とは誰か その起源と実像

アメリカ・カストロ 本田誠二訳

《レコンキスタ》以前、《スペイン》は存在しなかった——。スペインを代表する歴史学者／文芸批評家が人文諸科学の広範な文献を渉猟し、スペインとスペイン人の起源を根底からくつがえす。《スペイン》のアイデンティティの捉え直しを迫る論争の書。

121 A5判五四一頁 八〇〇〇円

セルバンテスへ向けて

アメリカ・カストロ 本田誠二訳

小説そのものの創始者＝革新者は突然、出現したわけではない。『わがシッドの歌』から『ドン・キホーテ』に至るスペイン文学の歩みを現代スペインの碩学が独自の歴史＝文学観から綿密に洗い直す。

A5判八三四頁 一〇〇〇〇円

セルバンテスの芸術

本田誠二

小説そのものの起源にして、その最高の到達点ともいえるべき『ドン・キホーテ』を生んだセルバンテスの創作理念を、長篇、短篇、戯曲、叙事詩等を含めた全作品から解き明かす。『ドン・キホーテ』出版四〇〇年を記念する大著。

A5判四二四頁 五〇〇〇円

ポストフランコのスペイン文化

杉浦勉編 執筆：浜田滋郎・木下亮・M・キングダー他

独裁者フランコの死後、アントニオ・バンデラス、ペドロ・アルモドバル、パコ・デ・ルシア等を筆頭に、世界的アーティストを輩出し続ける民主スペインの文化の現在を紹介する、本邦初の現代スペイン・カルチャー・ガイド。

A5判並製二六九頁 四〇〇〇円

シングルという生き方

カルメン・アルボルク 細田晴子訳

ひとりであるからひとりぼっちなわけじゃない。スペインのカリスマ女性国会議員が、フェミニズムの歴史を繙き、古今東西の独身者の文化を俯瞰し、シングル女性の性を語りながら、新しい女性の生き方を提案する。ヨーロッパのベスト・セラァー。

四六判二六六頁 一九〇〇円

アルジェリアの闘うフェミニスト

ハリリダ・メサウーディ 中島和子訳

「胸を張って立ち続けていること、それが大切なのです」イスラーム原理主義者に命を狙われながらも、真の自由のために、女性の権利のために立ち上がり、のちにアルジェリアの文化大臣(二〇〇二―二〇一四)を務めることになった、凛々しい女性の証言。
157 四六判二七七頁 三〇〇〇円

カピリアの女たち

フアドマ・アムルシュ 中島和子訳

フランス統治下の北アフリカはアルジェリア、イスラームの閉鎖的な男性社会に私生児として生を享けた過酷な宿命に抗して、「愛すること」を支えに逞しく人生を切り開いた、一人のベルベル人女性が紡ぐ回想記。
A5判三二六頁 三五〇〇円

彼女たちのターニング・ポイント

笠原路子

スカイダイバー、織物作家、アシカ調教師、通訳、書店主、印章彫刻家……各界で奮闘する四七人の働く女性たちへの直撃インタビュー集! 仕事、結婚、離婚、育児……と、考え迷い決断するそれぞれの人生が鮮やかに浮び上る。
四六判並製二二頁 一八〇〇円

孤独の肖像

中村茂樹

どこにも居場所がないと感じている一〇代〜二〇代の若者たちは、孤独と向き合いつつ何を考えているのか? いじめ、登校拒否、ひきこもり、家出……うまくは生きられないが、一所懸命に自分を探している若者たちを描き出すノンフィクション。
四六判並製三〇頁 一六〇〇円

さよならは何度でもガンと向き合った医師の遺言

ダヴィッド・セルヴァンシユレバール 二瓶恵訳

ガンが発見されて以来、自ら考案した「ガン克服」法を実践し、人生を賭けてガンと闘ったフランス人医師が遺した最後の言葉。家族や友人たち、すべての愛しいひとたちに(さよなら)を告げる希望に溢れたメッセージ。
1310 四六判並製九〇頁 一五〇〇円

サブ・カルチャー

マンガを「見る」という体験 フレーム、キャラクター、モダン・アート 鈴木雅雄編

執筆||伊藤剛・野田謙介・齊藤哲也・加治屋建司・中田健太郎 マンガ批評、文学研究、美術史を専門とする気鋭の論者たちが、マンガをめぐる時間・運動・言説の問題を自在に語り、新たな理論的枠組から視覚体験としての(マンガ)を問うおす。
147 A5判並製二六八頁 二八〇〇円

ターミナル・エヴァ 新世紀アニメの世紀末

永瀬唯編

執筆||永瀬・大月隆寛・斎藤環・坂本啓介・榎木野衣・西村謙一・村崎百郎・谷内田浩正『新世紀エヴァンゲリオン』をめぐる書下し評論集。ユニークで豪華な執筆陣が多様な視点から読み解く『エヴァ』の世界の全貌!
A5判並製七二頁 二〇〇〇円

ザ・デイ・アフター・エヴァ 対論(新世紀アニメ)ふたたび

永瀬唯編

対話者||大原まり子、水民潤子、松代守弘、斎藤環、小谷真理、唐沢俊一『エヴァ』映画版再公開(九八年三月)を機に、編者がホストとなって(エヴァ騒動)を総括するとともに、その作品としての意味を問う画期的対話集。
A5判並製一五九頁 二〇〇〇円

欲望の未来 機械じかけの夢の文化史

永瀬唯

クロインやサイborgの系譜から、心霊写真、絶叫マシンの技術史、さらには久生十蘭『魔都』や『風の谷のナウシカ』まで、様々な分野の技術、思想、作品に表れた、人々の《未来》への夢想/妄想。理と文、学とオタクを越境する、ユニークな評論集。
四六判二六八頁 二五〇〇円

ボディ・エキゾチカ

秋田昌美

対抗文化、性文化の分野で旺盛に活動する著者が、奇形的身体の魅惑と謎に挑む。人工的身体変形術、見世物文化におけるフリークス趣味、江戸の博物学的性器論などを通して、規範を逸脱した身体をめぐる欲望と視線のありかを探る。
四六判二三四頁 二三〇〇円

スカム・カルチャー

秋田昌美

強度の個人的妄想については異端的芸術へと昇華する。オカルト猟奇殺人の系譜学、サタニック・ハヴィメタル、素朴アートのエクストリーム・テスト、インダストリアル・ノイズ等、現代社会の裏面に隠棲する異形の文化を顕揚する。
A5判二〇九頁 一三〇〇円

裸体の帝国 ヌード・ワールド01

秋田昌美

ヘア・ヌード・ブームよ去れ! 今世紀、全世界を席卷したエクストリーム・ボディ・ムーブメント《ヌードイズム》の歴史と思想を徹底的に解明するヌード論シリーズ第一弾、欧州編。美麗にして珍奇、異端 カルトな図版多数。
A5判二八頁 一六五〇円

ストレンジ・ヌード・カルトヌード・ワールド02

秋田昌美

ビバ男尊女卑！のCAD(スケコマシ)文化から、スペース・エイジ・パチエラー・セックス、ビートルズとセックス文化、狂気のグラフィズム軍団「HARAKIRI」の全貌まで、六〇〜七〇年代に発生した不思議の裸体文化を集成する！
A5判一八五頁 二五〇〇円

フリンジ・カルチャー

宇田川岳夫

ふくしま政美、宮谷一彦等の「肉弾劇画」J・A・シーザー、三上寛のフリンジ・ミュージック、そして八切止夫を筆頭とするコア・オカルトの知られざる展開……九〇年代オタク文化に牙を剥く裏オタク文化の全貌！
A5判二七頁 二〇〇〇円

マンガ地獄変

植地毅・宇田川岳夫・吉田豪他

《スーパー劇画王》梶原一騎のダークサイドから、伝説のトラウマ・カルト、ふくしま政美「聖マッスル」まで、七〇年代「埋没マンガ」発見の旅。大槻ケンヂ、浅草キッド等その筋の方々、大絶賛！《オタクは買わない！ オトコは買え！》
A5判並製二八八頁 一八〇〇円

男魂(だんこん)マンガ高校(マンガ地獄変2)

植地毅・宇田川岳夫・吉田豪他

好評『マンガ地獄変』続編！『ハリスの旋風』『夕やけ番長』『男一匹ガキ大将』『愛と誠』『激！ 極虎一家』。男の汗と涙と意地がスパークするタイマン・バトル・コミックスが理屈など無視して今、蘇る！ B面特集はグルメ漫画だ！
A5判並製三三三頁 一五〇〇円

トラウマ・ヒーロー総進撃！(マンガ地獄変3)

植地毅・大久保太郎・大西祥平他

《社会のウラはマンガで学んだ！》恐怖のマンガ大王、日野日出志から、反核トラウマ爆弾『はだしのゲン』、そして神様・手塚治虫の暗黒面まで、何も知らない子供の心にショックと残酷を植え付けまくったトラウマ漫画、総まとめ！
A5判並製二四七頁 一五〇〇円

巨人マンガの系譜

蕪木和夫

『スポーツマン金太郎』から『ちかいの魔球』『黒い秘密兵器』『巨人の星』『侍ジャイアンツ』まで、長島、王、金田などキラ星のごときスターが在籍し、野球少年の憧れだった頃の名作巨人野球マンガの魅力を徹底解説！
四六判並製一九六頁 一五〇〇円

犯罪地獄変

犯罪地獄変編集部編

「津山三十人殺し」から「酒鬼薔薇聖斗」まで、新聞、週刊誌、TV等の各種メディアにおける犯罪の扱いを検証し、情報化社会における犯罪Ⅱ「エンターテインメント」化現象を追及する、本音で論じる全く新しい形の犯罪読(毒)本。
A5判並製一〇四頁 一四〇〇円

爆走！ アクション・ムービー・ジャンキーズ

植地毅編

今、アクション映画が途方もなく熱い。ブルース・ウィリスからセガル、スタローン、シユワちゃん、ジャッキー・チェン、リー・リンチェイまで、巨額の予算をつぎこんだ大作アクション映画の魅力と魔力を完全解説。
四六判並製三三四頁 一五〇〇円

激辛！ アジアン・ムービー・ジャンキーズ

植地毅・ギンティ小林他編

ジャッキー・チェン、サモ・ハン、リー・リンチェイから、「Mr・BOO」、アンソニー・ウォンまで、デスウィッチュ・スタントとワイヤー・アクションで八〇年代ガキんちよバトル・スピリッツを燃え上がらせたアジア映画の完全観戦ガイド。
四六判並製二六頁 一五〇〇円

超B級フリーゾク大全集

いその・えいたろう

TV番組「11PM」出演で知られる風俗ライターの小分け的存在が、三十年にわたるフリーゾク取材を集大成。インタビュアー、エッセイ、ドキュメント等、様々な角度から、知られざる「B級フリーゾク」のウラ・オモテを全公開。
A5判並製二二九頁 二〇〇〇円

にっぽんフリーゾク改造論

田守公一

停滞するフリーゾク業界にあつて、斬新なアイデアで一大旋風を巻き起こした名古屋の革命児が、欲望産業の現在と未来を論じ尽くす。他では書けない内幕を白日に晒しながら、開かれたフリーゾクへの展望を語る衝撃の赤裸々告白。
四六判一九八頁 一五〇〇円

フォーリオン

トミ・アングラー作品集 日本語版監修 伴田良輔

『すてきな三にんぐみ』『こうもりのルーフアス』等、斬新な物語と独特なユーモアで知られる絵本作家の幻のエロティック画集。植草甚一や筒井康隆も絶賛したポップでシニカルな機械仕掛けのエロティシズムが横溢する迷宮的作品集。
四六判三三三頁 一八〇〇円

天然【完全版】

根本敬

特殊漫画家大統領、根本敬の幻の名作復活！あの村田藤吉の極貧少年時代を描いた名作『生きる』と双璧をなす初期の大長編野球劇画『天然』【甲編・乙編】に大幅に加筆した、待望の完全版！全ての根本マニア垂涎の一冊！
A5判並製四〇六頁 一八〇〇円

時代の体温―陰核・混沌の隣人たち

根本敬作画 湯浅学作音

九九年初頭、世田谷美術館「時代の体温」展に出品された根本敬のインスタレーションと、そこで制作された三冊の画集。そして、会場に流れていた湯浅学の音響処理による「因果者」たちが放出した音霊。それらをCDブックに合体！
A5判三三三頁 二八〇〇円

音山「おんざん」

湯浅学

音楽評論家にして「幻の名盤解放同盟」の湯浅学による、圧倒的音盤ガイド。ロックをはじめ歌謡曲・演歌からヒップ・ホップ、韓国のポプチャックからアメリカ南部のザデイコまでを縦横無尽に語り尽くす音楽評論集。

四六判並製二二三頁 一八〇〇円

パリの空の下、人は流れる

船橋英雄・根本敬・湯浅学

幻の名盤解放同盟の船橋英雄によるマヌケでロンリーなパリ島旅行案内。根本敬の漫画「無能の人」、同盟員三人による旅についての鼎談「世界は駅前シリーズだ」、幻の名盤「旅モノ」デイスコグラフィーなど、盛りだくさん。

四六判並製二二三頁 一八〇〇円

幻の名盤百科全書

幻の名盤解放同盟（根本敬・湯浅学・船橋英雄）

幻の名盤解放同盟の仕事の集大成。『ディーブ歌謡』『夜、因果者の夜』に新たに一〇〇枚以上の書き下ろしを加えた決定版。「真理とは、断じて個的であらねばならぬこと」。

四六判五七〇頁 三〇〇〇円

オン・ザ・ロード、アゲイン

久信田浩之 写真||芝田満之・堀清英

一九六〇年代のサイケデリック・バス・ミュージックから、レイブ・カルチャー、リサイクル・ムーブメントなどまで、脈動する米国オルタナティブ・シーンを体感し、現在に息づくビートニクのスピリッツに迫る、渾身のドキュメント。

A5判三〇八頁 二八〇〇円

バナナの皮はなぜずべるのか？

黒木夏美

人類の誕生以来、最もポピュラーなギャグ||《バナナの皮すべり》は、いつ、どこで、誰によって、どうやって生みだされたのか？ さまざまなメディアに描かれたバナナの皮を踏んで検証する。

104 A5判並製二四七頁 二〇〇〇円

うまい野菜 料理人が教える本当においしい野菜の作り方と食べ方

我田大

究極のうまい野菜を求めて、見よう見まねで始めた、板前さんのゼロからの野菜作り！ 新潟県の南魚沼産、化学肥料ナシ、栄養たっぷりの本当においしい野菜をまるごと味わう本！ 南仲坊氏推薦！ 四〇種類の野菜の栽培法と旬のレシピつき。

141 A5判並製オールカラー九五頁 二二〇〇円

詩歌

ピエリアの薔薇

沓掛良彦詩集

前七世紀から紀元十世紀に及ぶギリシア詩の一大集成として夙に名高い『ギリシア詞華集』より、サッフォールからビザンチン時代に至る六〇詩人の二一〇詩篇を訳出した本邦最新、最大の古代ギリシア詩集。栗||入沢康夫・井上輝夫

A5判クロス装クロス函入三二七頁 五〇〇〇円

夜のガスパール

アロイジウス・ベルトラン散文詩集 及川茂訳

散文詩というジャンルそのものを創始しながら、ボードレールやマラルメにそしてブルトンに、再発見され、大きな影響を与えるまで、不当に忘れられていたフランス小ロマン派詩人の残した唯一の散文詩集。

A5判クロス装函入二二三頁 四〇〇〇円

ブリテイスの歌

ピエール・ルイス 沓掛良彦訳

古代ギリシア、性愛の悦楽渦巻くレスボス、キュプロスの島々を漂泊した伝説の女流詩人ブリテイスが愛欲と逸楽に充ちた生涯を自ら歌う濃艶な巻物……『エロスの祭司』による官能詩集の白眉。付録||「ブリテイスの秘められた歌」(本邦初訳)。

A5判並製函入三八八頁 六〇〇〇円

夏の遺言

山崎剛太郎詩集

堀原雄と立原道造に師事し、戦中から戦後にかけて、中村真一郎 福永武彦らとへマチネ・ポエティックの詩的実験を試みた著者が、篋底深く秘めてきた夢想と苦悩の恋愛詩篇が半世紀を経て甦る。

四六判二二八頁 三〇〇〇円

薔薇の柩 付・異国拾遺

山崎剛太郎詩集

九十五歳の研ぎ澄まされた眼が見据える過去と現在、生と死、そして愛あるいは永遠……。へマチネ・ポエティック、最後の詩人が静かにすぎゆく日常の時間を鋭く甘みにうたう瞳目の最新詩集。

137 B5変判五三頁 二五〇〇円

果実の重み

佐岐えりぬ詩集 ベルナル・シトロエン仏訳

《四季》派の流れを汲む『山の樹』の同人として出発した、憂愁にみちた特異な抒情詩人の、日仏二カ国語による典雅な詩集。ここに封印された生きることの困難、恐れ、そしてその悦びは、読む者を打たずにはいないだろう。

A5判並製二二九頁 三五〇〇円

果実の重み(特装版)

佐岐えりぬ詩集 ベルナル・シトロエン仏訳

本書の仏訳者であり、著者の友人でもあるフランスの彫刻家・詩人ベルナル・シトロエンのオリジナル・シルクスクリーン一葉を挿入した特装版。残部僅少。限定五〇部／著者、仏訳者サイン・限定番号入
A5判麻クロス装麻クロス函入二九頁 二〇〇〇円

わたしの庭はわたしに似ている

川田靖子詩集

《わたしの庭には何でもある／急斜面も断崖も／古い井戸までかくし持つ／「……」／奥底の暗い鏡にうつるのは／あなたの顔とはかきらない／現世の現実ではなく／ときとして幻がうつる》。小熊秀雄賞詩人の最新詩集。《庭が私に似るのではなく、私が庭に似てきたのである》
A5判八七頁 二五〇〇円

私は母を産まなかつた／ALLENとMAKOTO

と肛門へ

ヤリタミサコ詩集

子どもの頃の家族・人間関係のなかでの反発と否定、そしてギンズバーグ、白石かずこ、塩見允枝子らと反響しあう現在を、日常の言葉で強靱に、ときに郷愁をもって表出する注目の新鋭の第一詩集。写真Ⅱ萩原義弘
1211 A4変判五七頁 二〇〇〇円

青葙

春日井建歌集

三島由紀夫や中井英夫の推挽によって彗星の如く登場し、十代にして、塚本邦雄・岡井隆・寺山修司とともに《前衛短歌の四天王》の一人に数えられた著者が二十数年間の沈黙を破る衝撃的な最新歌集。
A5判クロス装クロス函入二五〇頁 四〇〇〇円

松扇(ひおうぎ)

鹿島由紀子歌集

《通過する列車は何にせかざるいきなり秋とわれを残せり》。トルストイを中心とする近代ロシア文学の研究者として知られる著者の第二歌集。日常の風景が、そして相聞の場面が透徹した視線と思索のうちに鮮やかによみがえる。
A5判二七頁 三〇〇〇円

扇面流図(せんめんながしず)

鹿島由紀子歌集

《五十路来ていつしか木には春が来て椿の花は血いろに咲けり》。《ひとひらのさくらを追える幼な児の小さき肩にさくらまた散る》。中年にまで至った人生のさまざまな情景を、四季折々の日常を彩り豊かに詠み込んだ著者の第三歌集。
A5判一四九頁 三〇〇〇円

夢中夢(むちゅうむ)

馬場駿吉句集

《手に提げて紫陽花はわが鬱の脳》。高名な医師にして美術批評家、そして俳壇から完全に離れた地点で書き続ける孤高の俳人の一九七六年以降の近作を収録する奔放にしてパロディ的、官能的な最新句集。造本Ⅱ加納光於。采Ⅱ武満徹・吉増剛造
A5判クロス装貼函入一六五頁 三〇〇〇円

中村真二郎コレクション

《第一次戦後派》の代表的作家のひとりとして、二十世紀後半の日本の文学に決定的な転回をもたらした著者の、長篇、短篇、評伝、批評、エッセイ、さらには定型押韻詩にいたる多彩な作品を集成する。
A5判上製

中村真二郎 青春日記

池内輝雄・傳馬義澄編

のちの(戦後派)の巨人の旧制高校時代の膨大な日記の完全翻刻版。莫大な猟の読書ノートにして、福永武彦・川俣晃目らとの交遊録でもある中村真一郎研究の第一級資料。翻刻Ⅱ荒川澄子+安西晋二十石井佑佳+岡崎直也+河合恒十
125 四〇二頁 五〇〇〇円

城北綺譚

解説Ⅱ菅野昭正

《つましい情熱の純愛物語と直截な文明批評との結合。愛の小説は、こうしてすこし位相をずらすと文明批評の小説になる》(菅野昭正)時代と家に翻弄されて人生を狂わせた老人の封印された忘れ得ぬ恋。新発見の遺稿の初の単行本化。
一六六頁 一八〇〇円

日本古典にみる性と愛

解説Ⅱ沓掛良彦

《中村真一郎氏が小説の美作者としての独自の視点からその深く愛する日本古典を樂しげに語る》とき、その筆先から生まれる古典評論は、独自の強い輝きを放っている。(沓掛良彦) 記紀の世界から江戸の歌舞伎まで、日本の性愛史が鮮やかに浮かび上がる愛の古典文学論。
二二三頁 二五〇〇円

全ての人は過ぎて行く

解説Ⅱ飯島耕一

《わたしは三十歳をこえてまもない新進作家の中村真一郎講師に出会い、デュアメルやジロドゥーの小説をめぐる講義を聴いた。大きなブライアーのパイプをつねに手にした、長身の、スマートな先生だった》(飯島耕一) 最晩年の自伝「私の履歴書」と表題の連作エッセイを収める。
三〇二頁 三〇〇〇円

中村真二郎手帖

編集 中村真一郎の会

第二次大戦後の日本文学に西欧的な方法意識を導入せんとした《第一次戦後派》を代表する作家の多面的な文業を徹底的に考察する。《中村真一郎の会》の編集によって、年一回、四月に刊行する。

A5判並製

中村真二郎手帖 4

執筆 清水徹（故会長加藤周一さんを偲ぶ）、中村真二郎（一九三五年のノート）、堀川貴司（評伝という文学）、早川間多（『木村兼葭堂のサロン』をめぐって）、鈴木貞美（『魂の夜の中を』をめぐって）、W・J・タイラー、竹村民郎、エセイ 安井侑子、岡崎秀実 連載 木島佐一 九六頁 一〇〇〇円

中村真二郎手帖 1

特集 中村真二郎の小説 執筆 加藤周一（巻頭言）、鈴木貞美（『死の影の下に』をめぐって）、清水徹（『四季』のほうへ）、杵掛良彦（中村真一郎と王朝文学）、エセイ 池内輝雄、三輪秀彦、高遠弘美 インタビュー 山崎剛太郎（聞き手 木村妙子） 他 九六頁 一〇〇〇円

中村真二郎手帖 5

執筆 中村真一郎（一九三五年のノート（続））、入沢康夫（『四季』四部作についての雑感一束）、小林宣之（『夏』の女主人公A嬢をめぐる補遺I）、鈴木貞美（『長い夜の終り』をめぐって）、エセイ 加太肇江、塩川治子、小島千加子、柏原成光 連載 高遠弘美、木島佐一 一〇4 九六頁 一〇〇〇円

中村真二郎手帖 2

執筆 池澤夏樹（『雲のゆき来』の私的な読み）、鈴木貞美（『シオンの娘等』論）、諏訪正（中村真一郎のラジオドラマ）、望月洋子（江戸後期文人の世界）、佐岐えりぬ（中村真一郎の日記について） エセイ 井波律子、小佐井伸二 連載 高遠弘美、木島佐一 九六頁 一〇〇〇円

中村真二郎手帖 6

執筆 中村真一郎（一九三六年のノート）、井上隆史（中村真一郎と三島由紀夫）、鈴木貞美（『仮面と欲望』について）、菅野昭正（『時間の迷路』をめぐって）、入沢康夫、諏訪正、小林宣之 エセイ 平山真理子、岸川典生、前野裕 連載 木島佐一 一14 九六頁 一〇〇〇円

中村真二郎手帖 3

執筆 加藤周一（中村真一郎と小田実）、小畑精和（幻の映画『パリよ、さらば』と中村真一郎）、朝比奈美知子（近代との対峙を生きたる文学者）、小林宣之（中村真二郎に魅せるネルヴァル）、鈴木貞美（『愛神と死神と』をめぐって）、池内輝雄 エセイ 中村香織、前島良雄 連載 高遠弘美、木島佐一 九六頁 一〇〇〇円

中村真二郎手帖 7

執筆 丸谷才一（中村真一郎の功績）、川崎渕（フランスの車旅）、富士川義之（中村真一郎とヘンリー・ジェイムズ） 『中村真一郎 青春日記』をめぐって 鈴木貞美、安西晋一、岡崎直也、石井佑佳 エセイ 山崎剛太郎、十河清 他 連載 小林宣之、木島佐一 124 一四三頁 一〇〇〇円

中村真二郎手帖 8

執筆 中村真一郎（初期短篇集） 安西晋二編、清水徹 依岡隆児＋竹内洋＋鈴木貞美＋石川肇（討議 『中村真一郎 青春日記』と旧制高校）、井上隆史、近藤圭一、高井泉、中村香織 エセイ 下重暁子、鳥山玲、松本茂、小山正見、深澤茂樹 連載 小林宣之、木島佐一 134 一七六頁 一五〇〇円

中村真二郎手帖 10

特集 マチネポエティクと中村真一郎（清水徹 安藤元雄 菅野昭正 池内輝雄） 執筆 影山恒男（中村真一郎と堀辰雄）、鳥山玲（『ミナーシスと継承』）、中村香織（父、真一郎の思い出）、連載 小林宣之、木島佐一 159 八八頁 一〇〇〇円

中村真二郎手帖 9

執筆 加賀乙彦（中村真一郎さんの思い出）、池澤夏樹（『夏』を読む）、井上隆史（昭和三十七年の全体小説論）、三枝大修（翻訳家・中村真一郎）、貴船哲治、中村香織、深澤茂樹、矢代朝子、松本茂 連載 小林宣之、木島佐一 145 一八八頁 一〇〇〇円

小島信夫長篇集成

編集 千石英世・中村邦生 / 編集協力・解題 柿谷浩一

夫と妻、父と子、男と女、性と愛、生と死——人間をめぐるあらゆる関係性を、小説の可能性への問いとともに、生涯問い続けた小島信夫。入手困難であった作品をふくむ全一五長篇を集成する。《短篇集成》《批評集成》につぐ本集成によって、その驚くべき作品世界は、今ようやく全貌を見せることになるだろう。内容見本呈 A5判上製

① 島／裁判／夜と昼の鎖

解説 春日武彦

人間存在にとつて〈状況〉とはいかなるものなのか？ 架空の島／ケナリ島を舞台に繰り広げられる奇妙な抗争を描きSFを彷彿とさせる初長篇の他、寓話的筆致によって社会と個人の関係を鋭く迫る、初期の野心作・異色作。

近刊

② 墓碑銘／女流／大学生諸君！

解説 石原千秋

極限状況における混血の兵士の揺れるアイデンティティを追い、人種と階級、生と性を問う『墓碑銘』、年上の女への憧れを瑞々しく描く自伝的な青春小説『女流』、そして幻の娯楽小説『大学生諸君！』——著者の成長と挑戦を標す作品群。

近刊

③ 抱擁家族／美濃

解説 小池昌代

新居の建設、妻の情事と死、後妻との結婚——執拗なまでに家庭を維持しようとして自己喪失の危機に陥る男の悲喜劇を綴る代表作『抱擁家族』、故郷にまつわる歴史や風土を織りこみながら未聞の小説世界を拓く『美濃』を収録。

近刊

④ 別れる理由Ⅰ

解説 千石英世

連載期間十二年半、全四〇〇枚。夫婦・親子・男女の愛の錯綜と混沌を凄絶なまでに描き尽くし、旧来の小説の方法を悉く破砕する伝説的問題作、著者随一の超大作にして日本文学史に異彩を放ち続ける現代小説の極大『別れる理由』。その覚醒を告げる第一巻。
157 六七八頁 九〇〇〇円

⑤ 別れる理由Ⅱ

解説 佐々木敦

異色のミュージカルの展開のもと、狂気の主人公・前田永造を衝えこむ奇々怪々な夏の夜の夢。喧々譁々の大激論、不義密通と乱交パティ、いつ果てるとも知れぬセックス、そして女／虫／馬への変身……。いよいよ暴走をはじめた小説世界。
158 六八一頁 九〇〇〇円

⑥ 別れる理由Ⅲ

解説 千野帽子

虚構世界としての底が割れ、『別れる理由』は未聞の新局面へと突入する。作者、そして実在人物たちが登場現実世界へと彷徨い出た前田永造と対話を交わす虚実の境を踏み越え、ついに我々の生きる現実をも小説化してしまった怪物的巨篇、ここに完結す。
近刊

⑦ 菅野満子の手紙

解説 近藤耕人

兄の身に起こった恋愛事件をモデルに描いた自作『女流』をめぐる手紙や対話、さらには実在の人物までをも交錯させながら、作品世界は時間と空間のはざまを揺動し、異様な自己増殖を繰り返す。小説の限界に挑む小島文学の新たな展開。
近刊

⑧ 寓話

解説 保坂和志

ある日、かつて書いた長篇『墓碑銘』の主人公から作者のもとへ電話がかかってきた。創作であったはずの人物から届く手紙に記された暗号を解説し続ける作者……。〈書くこと／書かれること〉を根本から問い直す。

近刊

⑨ 静温な日々／うるわしき日々

解説 中村邦生

アルコール中毒に苦しむ中年の息子、健忘症を発症した再婚の妻。記憶を失いゆく彼らを前に、老作家は何を思い、何を願うのか。混沌を極める現代社会における家族と老いの問題を軽やかに描き、生の淵源を照らし出す。

近刊

⑩ 各務原・名古屋・国立／残光

解説 平井杏子

「アイコさん、ノブさんが来たんだよ。コジマ・ノブさんですよ」作家とその家族が生きている現実、過去の小説、不確かな記憶、そして忘却……すべてを取りこみながら創作を続けた著者が最晩年に見出した、究極の愛のかたち。

近刊

小島信夫短篇集成

編集 千石英世・中村邦生 / 編集協力・解題 柿谷浩一

生と死の不可思議を鋭く穿つ初期の代表作から、小説とは何かを問いかけて止まない晩年の実験的な作品群、さらには長らく入手困難であった作品や単行本未収録作品を多数含む、小島信夫が生涯を賭して書き継いだ全一八七短篇のすべてを網羅する。
内容見本呈 A5判上製

1 小銃／馬

解説 千石英世

〈小説家 小島信夫〉の誕生と成長の軌跡――みずみずしい最初期の作品群、「小銃」「吃音学院」「微笑」などの代表作、著者随一の怪作「馬」などに加え、単行本未収録作「太陽が輝く」「男と女と神様の話」をふくむ二七篇を収める (一九二七―五四)。
141 六〇五頁 八〇〇〇円

2 アメリカン・スクール／無限後退

解説 芳川泰久

終戦後の日米関係を鋭く諷刺する芥川賞受賞作「アメリカン・スクール」以後の小島文学の変遷を追う。最晩年まで脳裏を離れなかった信仰の問題を先取りする「神」、冥界を思わせる空間を舞台に繰り広げられる追走劇「鬼」など、全二六篇を収録 (一九五四―五六)。
142 六〇四頁 八〇〇〇円

3 愛の完結／異郷の道化師

解説 堀江敏幸

アメリカ滞在、夫婦のセックスをめぐる考察を経て、新たな段階へと突入する小島信夫の小説世界。生／性と死が交錯する謎めいた名篇「愛の完結」、姦通というモチーフに男と女それぞれの視点から迫る「黒い炎」「神のあやまち」など全二〇篇を収録 (一九五六―五九)。
143 五九七頁 八〇〇〇円

8 暮坂／こよなく愛した

解説 千野帽子

家族とは、信仰とは、記憶とは、そして〈書くこと〉とは何なのか……？ 大正、昭和、平成を生きた小説家の最晩年、創作と現実のあわいを揺蕩いながら綴られた、文学の新しい地平を指し示す異色の短篇群二七篇を収める (一九九〇―二〇〇四)。
144 六〇四頁 八〇〇〇円

全巻完結 全八冊セット定価六〇〇〇円

4 夫のいない部屋／弱い結婚

解説 平田俊子

夫婦の性をさまざまな角度から考究する短篇群の他、長篇「抱擁家族」のための準備期間に書き継がれた多彩な作品群。男子中学生の同性愛のゆくえをたどる自伝的な異色作「ガリレオの胸像」、「抱擁家族」の前日譚とも言うべき「四十年代」など全二〇篇を収録 (一九五九―六六)。
151 五六〇頁 八〇〇〇円

5 眼／階段のあがりはな

解説 いうとうせいこう

饒舌な語り手の独り語り、書簡体小説 エッセイ的、自伝的な要素を多分にふくむ小説など、著者の模索と挑戦が標された作品群。妻の入院・手術を滑稽かつ哀切に綴る「眼」、郷里への回想のうちにそこに息づく人々の本質を突く「郷里の言葉」など全二三篇 (一九六二―七〇)。
153 四〇頁 六〇〇〇円

6 ハッピーネス／女たち

解説 中村邦生

巨篇「別れる理由」への迂遠な助走となった連作「町」の作品群、そして、「菅野満子の手紙」「寓話」など破格の長篇のかたわら執筆され、小説とエッセイ、記憶と忘却を縦横無尽に横断／往還する、メタフィクショナルな短篇世界の全貌。全二三篇収録 (一九七一―八二)。
153 四六七頁 七〇〇〇円

7 月光／平安

解説 保坂和志

愛妻との生活、別荘での日々、友人たちとの対話、芸術への思索、人智を超えたものへの関心、過去と現在、忘却と啓示――あらゆる記憶／思惟／時間が小説の(いま・ここ)へと流れこみ、混濁と錯綜のうちに新たな小説世界が拓かれてゆく……。全二三篇を収録 (一九八二―八九)。
154 五六一頁 七〇〇〇円

小島信夫批評集成

編集 千石英世・中村邦生・十山崎勉

目覚しい小説のみならず、〈柔軟な思考と融通無碍な文体、そして生き生きとした行論〉による特異な批評の書き手でもあった小島信夫の、生前に刊行されたすべての批評作品を八巻に集成する。小社創立三十周年記念出版。

内容見本呈 A5判上製

1 現代文学の進退

解説 中村邦生

世界／日本の様々な作家と作品を具体的に論じつつ、現代文学の方法論に迫る『小島信夫文学論集』（1966）。現代文学論、作家論（漱石、秋声、独歩ら）、文芸時評など、批評の可能性を問う『現代文学の進退』（1970）。後の優れた長篇評論の出現を予感させる最初期の二冊を収録。 11.4 六四二頁 八〇〇〇円

2 変幻自在の人間

解説 都甲幸治

小説家としての日常から、夫婦関係や性を論じる『小説家の日々』（1971）。古今東西の作家、文学についてのエッセイと時評を収録した『文学断章』（1972）。美術、演劇など、芸術表現についての批評を収めた『変幻自在の人間』（1971）。作家の本音と肉声にあふれる三冊を収録。 11.5 八〇七頁 一〇〇〇〇円

3 私の作家評伝(全)

解説 千石英世

「先人の歩んだ道は、私たちの血の中に色こくあとをとどめている」と述べる著者が時代のペールをはぎながら、歴史を生きた文学者と併走する。森田草平、徳田秋声、夏目漱石、森鷗外、島崎藤村、二葉亭四迷、石川啄木、泉鏡花等々を論じる（1972-75）。芸術選奨文部大臣賞受賞。 11.3 五五七頁 七〇〇〇円

4 私の作家遍歴Ⅰ

解説 保坂和志

小泉八雲の来日を契機として、古今東西の文学者たちを遍歴する出色の長篇評論がここに開始される。八雲と同時代に日本を訪れた外国人は、何を見、何を考えたのか。彼らが共通に抱いた問いを掘り下げ、人間のあり方を探究する不朽の名著（1980）。第十三回日本文学大賞受賞。 10.12 四八頁 六〇〇〇円

5 私の作家遍歴Ⅱ

解説 宇野邦一

稀代の作家による「遍歴」の続篇。東京大学における小泉八雲の最後の講義をきっかけに、芸術における恋愛や人生について大胆に、そして奔放に語りつくす。迂回や逸脱を繰り返しながらも、全篇にわたって、トルストイの芸術論を詳細に検討する珠玉の一冊（1980）。 11.1 四六四頁 六〇〇〇円

6 私の作家遍歴Ⅲ

解説 阿部公彦

「遍歴」はついにトルストイやドストエフスキーから、農奴や奴隷の問題へ、そして奴隷であったにもかかわらず寓話を語り始めたインソップにまで及ぶ。寓話の動物たちのように、お互いを圧倒し合うロシア文学の登場人物たち。小説の方法に肉薄する三部作の完結篇（1981）。 11.2 四七六頁 六〇〇〇円

7 そんなに沢山のトランクを

解説 堀江敏幸

「小説のように論じる」著者の本領が発揮された後の『作家遍歴』につながる「そんな沢山のトランクを」（1982）。忘れられていた俳人を現代に甦らせる『原石鼎』（1980）。美術という領域に同時代の生き様を探る『X氏との対話』（1997）。晩年なお躍動する批評精神の精華。 11.6 七三九頁 九〇〇〇円

8 漱石を読む

解説 千野帽子 年譜・書誌 柿谷浩一

『明暗』の女性のいしれぬエロスとは何なのか。夏目漱石の作品が先取りしている日本文学の可能性とその未来を掘り起こす。漱石と秋声という対照的な二人の作家が、著者の手によって架橋され、変容する。著者最晩年の傑作長篇評論（1993）。詳細な年譜・著作一覧を付す。 10.11 六七九頁 八〇〇〇円

全巻完結 全八冊セット定価六〇〇〇円

不世出の小説家が最後まで架蔵していた蔵書三千余冊が昭和女子大学に寄贈された。小島信夫自身による様々な書き込みを含む昭和女子大学〈小島信夫文庫〉の全貌。テキスト 坂東真理子、柿谷浩一、中村邦生、千石英世、平井杏子、中西裕、太田鈴子 12.5 A4判一七頁 五〇〇〇円

小島信夫の書き込み本を読む 小島信夫文庫関係資料目録

昭和女子大学図書館編

作家の旧蔵書の他に、筐底に秘されてきた草稿や創作ノート、メモ、日記等の諸資料一五〇点以上を収蔵する昭和女子大学の〈小島文庫〉の諸資料の目録。テキスト 江口雄輔、中西裕、平井杏子、太田鈴子、近藤耕人、竜野連、中村邦生、千石英世、柿谷浩一、猪俣和也。 12.3 A4判一〇九頁 五〇〇〇円

④ クリシーの静かな日々

小林美智代 十田澤晴海 十飛田茂雄 訳

性解放への企てと暴力的なまでに虚飾を排した挑戦的な文体によって、世界の文学界に一大センセーションを巻き起こしたミラーは今、ドゥルーズ・ガタリやステイヴ・エリックソン等によって新しく読まれようとしている。日本におけるミラー像を一新する、全巻新訳による新選集。 内容見本呈 四六判上製

ボルノグラフィイとして書かれた著者の面目躍如たる表題作をはじめ、「マックス」「初恋」等、初期から晩年に至る猥雑にして詩的な七短篇を集成する。「ヘンリー・ミラー」の文章には、一切のものが存在している。」(ドゥルーズ・ガタリ) 二五二頁 二五〇〇円

① 北回帰線

本田康典 訳

一九三〇年代、パリで貧困のどん底にあつてシュルレアリスムの影響をうけつつ、伝統的小説の「人工性と欺瞞とを」片っ端からたたき潰した、二十世紀前半の英米小説界を震撼させた最大の伝説的話題作。

三三四頁 三〇〇〇円

⑤ マルシーの巨像

金澤智 訳

第二次世界大戦の直前、ギリシャを訪れた著者はそこに今や現代社会からは失われてしまった混沌と情熱、神性と永遠を見出す。現代文明への痛烈な批判と独特の詩情が全編に迸る無頼の紀行文学。「ミラーの最良の作品、それは『マルシー』だ。」(フィリップ・ソレルス) 二四八頁 二五〇〇円

② 南回帰線

松田憲次郎 訳

《これらの出来事はすべて実際に起こったことなのだ》著者のパリ時代を描いた前作につづき、それ以前のニューヨークでの出来事を描きながら、フィクションと自伝の境界線を無化しようとする、早過ぎた《ポストモダン》的自伝小説。

三三八頁 三八〇〇円

⑥ セクサス 薔薇色の十字架刑 一

井上健 訳

マンハッタンの電信会社に勤める主人公は、マールという名のセクシーなダンサーと恋に落ちる。「芸術家の女神」との運命的な出会い、そして大胆な性描写で練り上げられる死と再生の磔刑のドラマ。 自伝的長編三部作の第一弾。本邦初の完訳版。 102 五九九頁 五〇〇〇円

③ 黒い春

山崎勉 訳

ニューヨークの底辺の人々の幸と不幸、希望と絶望、愛と憎悪、優しさと残酷さ、猥雑さ、無頓着、激情、呪詛、狂気、そして純真さへのパセティックなオマージュ。十短篇によって緊密に構成された、シュルレアリスムの影響のものと色濃い、想像力の可能性の果てへの旅。

二五四頁 二五〇〇円

⑦ プレクサス 薔薇色の十字架刑 Ⅱ

武舎るみ 訳

晴れて正式に結婚したふたりの蜜月は、度重なる激突と生活苦とによって、破局へ向かっていく……巷の語り部ミラーが「運命の女」との情熱と苦悩に満ちた結婚生活を振り返り、猥雑、饒舌、エネルギッシュに語りつくす「あの三年。」 102 六五二頁 五〇〇〇円

⑧ ネクサス 薔薇色の十字架刑 Ⅲ

田澤晴海 訳

作家志望の主人公は最愛の妻モーナと同性愛の女性画家ステイシャとの奇妙な共同生活を営みながら、雄大な構想の小説を書き続けてゆく。若きミラーが初めてヨーロッパへ旅立つ直前の一九二七年を背景にした自伝的長編三部作完結篇。

106 四五九頁 四五〇〇円

⑨ 迷宮の作家たち

木村公一 訳

作家としてばかりでなく、読書家としても偉大だった著者が愛する七人の文学者たち(バルザック、ランボー、ハガード、ロレンス、ソロー、ホイットマン、アンダーソン)について論じる。バルザックの《神秘》、ロレンスの《性》、そして考察は芸術、人生、世界観にまで及ぶ。

三〇三頁 二八〇〇円

① 母

小林美智代 訳

アメリカでの作家修業時代に書かれた「エヴァアグレスへ」や最晩年の「母」中国」など、初期から最晩年までの、中・短篇五作品を収録。年齢を重ねにつれ次第に円熟していくヘンリー・ミラーの実像を彷彿とさせる中・短篇集。

13・12 三三二頁 三〇〇〇円

⑩ 殺人者を殺せ

金澤智 十飛田茂雄 十菅原聖喜 訳

エロチックな描写、グロテスクな人物風刺、哲学的瞑想、痛烈な現代文明批判へと、自由自在に変幻する文章の魔術！二十世紀の文学に大きな衝撃を与え、文学の光景を一新した著者の代表的なエッセイと書簡、七編を収録。

二五七頁 二五〇〇円

⑫ 冷暖房完備の悪夢

金澤智 訳

アメリカにおける悪夢とは、悪夢のなかでさえエアコンがきいて快適だということだ……。「豊かな国」アメリカの虚妄の繁栄を暴き、現代文明の行く末を予見する、世紀を超えて読み継がれるアメリカ批判の書。

近刊

⑬ わが生涯の書物

野平宗弘 十佐藤亨 十河野賢司 他 訳

書物との出会いは現実の世界における人間との出会いと等しい、ないしはそれ以上のものである。ミラーの文学と人生に決定的な影響を与えた書物について、ミラー自身が詳述する。巻末に、一九五〇年にミラー自身が作成した千点におよぶ読書目録を掲載する。 14・12 五七六頁 五〇〇〇円

第一期全十巻完結 全十冊セット定価三四、一〇〇円

⑭ 友だちの本

中村亨十 本田康典十 鈴木章能訳

晩年のミラーが失明に近い状態になりながら執筆を急いだ『友だちの本』は、そのほかの友だち『ジョーイ、わが人生におけるほかの女性たち』は没後七年目にして、『友だちの本 三部作』として刊行された。友だちのおかげで生き延びることができたと言語ミラーの回想録。 142 三九二頁 四〇〇〇円

⑬ 三島由紀夫の死について

松田憲次郎他

先鋭な映画論を展開しつつブニエールを称賛する論考、深く影響を受けたシュルレアリスムや精神分析からの脱却を図り、自らの独自性を宣言するにいたる前衛芸術論、出色の日本人論ともなっている三島由紀夫論など十一編を収める、ミラーの思想のエッセンスが繰り広げられる珠玉のエッセイ集。 近刊

⑫ 対話／インタヴュー集成

松田憲次郎十 泉澤みゆき十 萩椋亮十 菅原聖喜十 森田紀久子他訳

一九五〇年代から最晩年までの対話とインタヴューを集成する。ミラーが自らの創作、文学的系譜、猥褻性、ニューヨークやパリでの生活、友人や愛した女性との関係など多岐にわたって縦横に語りながら、座談家としての魅力を遺憾なく発揮する、ミラー自身と彼の文学を理解する上での第一級の一冊。 近刊

ヘンリー・ミラー関連書

ヘンリー・ミラーの八人目の妻

ホキ徳田

文豪ヘンリー・ミラーの最後の妻が、一九六〇、七〇年代のロサンゼルスを駆け巡る！ 自由人ミラーの私生活とハリウッドの古き良き時代、そしてナイトクラブ開店騒動を描くドタバタ・エッセイ集。 1312 四六判四二六頁 三三〇〇円

この世で一番幸せな男

M・V・ディアボーン 室岡博訳

《金もない資力もない希望とてもないが、私はこの世で最高に幸せな人間だ。》セックスと自由と書物を崇め、《奔放な生》を生き抜いた文学の異端児の人生の光と影。膨大な資料を駆使しながら等身大のミラーを甦らせる、フェミニスト批評家による辛辣な評伝。 四六判四七八頁十別丁 図版二六頁 四五〇〇円

回想するヘンリー・ミラー

トウインカ・スイーボード編 本田康典十 小林美智代十 泉沢みゆき訳

〈人生において起こるすべてを信じるのだ。思い出と信念、そして未来へのメッセージ……老境のミラーが老若、男女、有名無名のさまざまな来客たちを楽しませた、無類のテーブル・トーク。 四六判二〇〇頁 二〇〇〇円

ヘンリー・ミラーを読む

本田康典十 松田憲次郎編

『北回帰線』によって全世界に衝撃を与えたミラーを、同時代（ロレンス、ジョイス、ニン、シュルレアリスム）の文脈のなかに位置づけるとともに、その今日的意味を問う。執筆Ⅱ金澤智十J・M・デッカー十 三宅あつ子十 中村亨十 木村公一十 B・W・リー十 大石健太郎十 野平宗弘十 K・バーチエル 四六判二四五頁 三三〇〇円

ヘンリー・ミラーの文学 愛の欠落から追求へ

小林美智代

二十世紀アメリカの偉大な反骨の小説家はパトスの知を伝えるための革命的な方法探求者だった——その主要作品の表現と形式を考察し、ミラー文学への新たな理解を提示する。 107 四六判二九八頁 三三〇〇円

ミラーさんとピンチオンさん

レオポルト・マウラー 波戸岡景大訳

野暮ったい測量器具を片手に荒野をゆく二人の中年男。その名もミラーとピンチオン。くしくも現代アメリカを代表する作家と同じ姓をもつ、彼らのゆく手に待ち受けるのは、女、ワニ、奇蹟、金星、そしてオオカミ少年……？ ウィーン発のグラフィックノベル。 135 A5判並製一八二頁 一五〇〇円

レーモン・クノー・コレクション

シュレアリズムからパタフィジックへ、そしてウリポの創設へ。(時代に抗して生きた破格の存在)が残した破天荒な小説作品のほぼすべてを十三巻に集成する。

内容見本呈 四六判上製

4 きびしい冬

鈴木雅生訳

舞台は第一次世界大戦中の、地方都市ル・アール。戦傷のため前線からこの町にやってくる英国軍との連絡にあたっている将校ルアモアは、妻を亡くし、空虚な日々を送っていたが、ある少女と出会い……。作家の既存のイメージを覆す、叙情的な作品。
122 一六三頁 一八〇〇円

1 はまびき

久保昭博訳

パリ郊外を舞台に繰り広げられる小市民たちの恋愛と陰謀の喜劇。だが突如勃発した戦争は、小説の時空間を奇妙にねじ曲げ……。パタイユやデスノスがこの作品を讀えんがために、ドゥマゴ賞を創設したという、実験と遊戯に満ちた処女作。
126 三七〇頁 三三〇〇円

5 わが友ピエロ

菅野昭正訳

遊園地ユニ・パークで働くこととなったピエロ。人はいいがどじな彼は、ひっそりと《ユニ・パーク》に隣接し、謎の王国ポルデューの王子がまつられているといふ礼拝堂の主と知り合う。そんななか、《ユニ・パーク》では、ある事件が巻き起こり……。
128 二六七頁 二五〇〇円

2 最後の日々

宮川明子訳

冴えない哲学専攻の大学生たち、カフェに通う老人たち、時に客の星占いをし、てやり、季節ごとに通り過ぎていく彼らを見守るウエイター、アルフレッド。彼らの最後の日々を描きながら、第二次世界大戦前の不穏なパリの雰囲気伝える、初々しい自伝的小説。
121 二八三頁 二五〇〇円

6 ルイユから遠くはなれて

三ツ堀広一郎訳

ボクシングの世界チャンピオン、ローマ教皇、巨大シラミの研究者……ありえたかもしれない無数の人生を夢見、白昼夢にふけるジャック。ある時、故郷のルイユを飛び出し……。夢と現実が交錯する、きわめて凡庸できわめて奇想天外な冒険小説。
121 二三五頁 二二〇〇円

3 リモンの子供たち

塩塚秀一郎訳

実在の《狂人》たちをテーマに『不正確科学百科事典』を執筆するジャンベルナック氏と、あるブルジョワ一族。二つの世界が交差し、突飛な《狂人》たちの言行が、破局へ向かう時代の空気を照らし出す。人間の愚かさを根源的に問う知られざる傑作。第二十回日仏翻訳文学賞受賞。
131 三九五頁 三三〇〇円

7 文体練習

松島征・原野葉子・福田裕大・河田学訳

ある男がバスに乗り、若い男と口論になり、二時間後、別の場所先ほどの男を見かける。たったこれだけの内容を隠喩的に『予言的に』ねちねち口調で『食通スタイルで』など、九十九通りの楽しい語り口。文体で遊ぶ、エロコ、カルヴィーノ、イオネスコ絶賛の世紀の奇書。
129 二六〇頁 二二〇〇円

8 聖グラングラン祭

渡邊一民訳

全く雨のふらない《ふるさとの都》では、圧倒的な権力を誇る市長ナポニードのもと、恒例の奇祭《聖グラングラン祭》が行われつつあった。一方、三人の息子たちによりナポニードのある陰謀が明らかになる……。ジョイスの手法を応用したクノー中期の代表作。
110 三〇五頁 二八〇〇円

12 青い花

新島進訳

十三世紀 十五世紀 十七世紀 十八世紀に姿を現し活動する、さながらドン・キホーテのようなオージュ公と、現代、ある年の河岸に繋がれた船に暮らすシドロランの運命が交錯する。どちらが夢なのか、あるいはすべてが夢なのか。ユーモア溢れるクノー版《胡蝶の夢》。
1212 三三三頁 三〇〇〇円

9 人生の日曜日

芳川泰久訳

人はいいが、ばつとしない二等兵ブリュは、オールドミスで二十年上の小間物屋ジュリアに見初められ、結婚する。誰とでもすぐにうち解け親密になれるブリュだったが、ひよんなことで妻がこっそりやっていた奇妙な副業の代役をつとめる羽目になる……。
123 二八一頁 二五〇〇円

13 イカロスの飛行

石川清子訳

作家ユーベルの書く小説から、主人公イカロスが逃げ出した。彼を探すために雇われたおとぼけ探偵や、他の作家たちの本から逃げだした登場人物たちも町に紛れ込み……。見るものなすこと初めてづくしのパリの町で、イカロスを待っていた運命とは……。
1210 二〇三頁 二〇〇〇円

10 地下鉄のザジ

久保昭博訳

パリのガブリエル伯父さんに預けられた少女ザジ。彼女の願いはたったひとつ、地下鉄に乗ること。楽しみにしていたザジだったが、あいにくスト中。変態やうるさい未亡人につきまとわれながら、活気あふれるパリを駆け回る、ザジの三日間の冒険。
1109 三三三頁 二二〇〇円

11 サリー・マール全集

中島万紀子訳

アイランド生まれの少女サリーが、習いたての仏語で書いた奇妙な作品からなる彼女の《全集》。彼女の初恋と処女的想像力からなる性の探求日記、「フィネガンズ・ウエイク！」を合言葉に郵便局に立てこもるアイランドの闘志を描いた小説、謎の恋愛散文集の三篇を収録。
1109 四九五頁 三五〇〇円

100 兆の詩篇

レーモン・クノー 塩塚秀一郎・久保昭博訳

一日中、一年三六五日読み続けても、読了には二億年かかる！ 一行ずつバラバラにして組み合わせることが可能な10篇の14行詩、つまり、10¹⁴ = 100兆通りの組み合わせが可能な、一冊あれば一生、いや何百万生のあいだ「楽しめる」ことうけあいの伝説的な作品。
137 B5変判並製三三頁 二五〇〇円

ヴィクトル・セガレン著作集

編集 清水徹 木下誠 渡辺諒

二十世紀初頭、フランス海軍の船医としてタヒチ、セイロン、中国を巡り、他者の文化との衝突とそこに生起する《多様なもの》の経験から、《エグゼティスム》について追求しつづけた希有な作家の多岐にわたる作品群を総合的に紹介する。

内容見本呈 A5変判並製函入

④ 天子「小説」

黒川修司訳

押し寄せる西欧諸国 守旧派との闘争と挫折 蟄居での孤独な生活……、十九世紀末、中国の歴史に翻弄された光緒帝の人生を、「天」と「地」の媒介者——「天の子」による絶対の探求と多様性の統一を求める生の実験として、現実と想像を巧みに交えて描き出す。

三五頁 四〇〇〇円

① 記憶なき民「小説」

木下誠訳

船医としてタヒチに滞在した経験を契機に、初の「小説」として書かれたマオリ民族の失われた歴史。十八世紀末のクック来訪以降のマオリ文化の破壊と「文明化」の過程が、キリスト教への転向とそれへの抵抗の物語として語られる。

五三〇頁 七〇〇〇円

⑤ ルネ・レイス「小説」

黒川修司訳

光緒帝の伝記を書こうとしている「ぼく」に中国語の家庭教師として雇われ、紫禁城内部についての驚くべき話を次々と語るベルギー生まれの謎の男ルネ・レイス。彼の言動を通し、紫禁城 神祕の内部を探ろうとする日記形式の疑似探偵小説。

三二六頁 四五〇〇円

② ゴーガン礼讃／異教の思考「評論・短編小説・日記」

丹治恆次郎訳

ゴーガン論を中心に、マオリ民族論を収録。ゴーガンの死の三カ月後に同島を訪れたセガレンが、その最期をゴーガンの友人らから直接聴き取って書いた「最後の舞台装置」の中の「ゴーガン」をはじめ、「ゴーガン礼讃」、「異教の思考」などを収録。

近刊

⑥ 碑／頌／チベット「韻文詩」

有田忠郎訳

中国語の縦書きの碑文と仏語の横書きのテキスト、それら全体を囲む黒い矩形の枠という形式による、また独自の韻律法による、全く特異な詩集「碑」をはじめ、「頌」、「チベット」の三詩集を収録。第十回日仏翻訳文学賞受賞。

二分冊計四六四頁 六〇〇〇円

③ 二重のランボー／オルフェウス王「評論・中編小説・戯曲」

木下誠訳

タヒチから帰国後、中国に向かうまでの二年間のセガレンの思考の軌跡。文学と旅に引き裂かれたランボーを人格の分裂（ボヴァリスム）の理論によって論じた「二重のランボー」、「ゴータマ・シッタールタ、オルフェウスをめぐる戯曲、ドビュッシューとの往復書簡などを収録。

105 六九九頁 一〇〇〇〇円

⑦ 絵画／想像のものたち「散文詩・短編小説・エッセイ」

木下誠訳

全体が一続きの「香具師の口上」で成り立つ特異な散文詩集「絵画」。言葉によって様々な種類の中国絵画を現出させ、同時にそれらに批評を加えることで、絵画のイメージと意味を無限に増殖させてゆくこの作品に、「神祕的なもの」に関する試論」などを収録。

六三八頁 八〇〇〇円

⑧ 煉瓦と瓦「旅日記」

渡辺諒訳

一九〇九年八月から一九一〇年一月までの 中国内陸部への五千キロ、六カ月 にわたる旅の日記。旅の過程で出会った中国のさまざまな場所と出来事の記録に加えて、その間に構想されたさまざまな作品の計画、草稿、完結したテキスト、短い物語なども収める。

近刊

バルザック幻想・怪奇小説選集

編集 Ⅱ 私市保彦＋加藤尚宏

《人間喜劇》で知られる、未来の大小説家の出発点となった怪奇、幻想、ゴシックの恐怖にみちた流行小説群を五巻に集成する新選集。知られざるバルザックの全貌をあかす！ 全篇、新訳。本邦初訳、多数。

内容見本呈 四六判上製

① 百歳の人―魔術師

私市保彦訳

夢想を誘う七月の真夜中、岩山の懐からは煙が立ち上り、父親思いの娘が失踪する。若き天才ペランゲルト將軍の生涯につきまとう不気味な老人、人間を束の間の生の子ら」と呼ぶこの老人が姿を現すところ、不可解な事件が……。バルザック版《放浪者メルモス》。

074 三九三頁 三〇〇〇円

② アネットと罪人

私市保彦監訳 澤田肇・片桐祐訳

すべては乗合馬車の旅から始まった。あの金曜日に旅立ちさえしなければ……。しかし、すでにアネットの運命は、一人の男に愛されて大きく狂い始めている。運命の警告に怯えながらも、天使のような少女は破滅的な愛へと……。バルザック青年期の傑作盗賊小説。

075 四六〇頁 三五〇〇円

③ 呪われた子他

私市保彦・加藤尚宏・芳川泰久・澤田肇・片桐祐・奥田恭士訳

貴族の子でありながら、父に呪われて海辺の小屋に暮らす少年、母の愛と自然の神秘に育まれたこの繊細な魂は、封建制度と戦乱に……。厄大な《人間喜劇》から、神秘に彩られた八短篇を集成する。

077 四四六頁 三五〇〇円

④ ユルシユール・ミルエ

加藤尚宏訳

《あんな女に遺産をとられてたまるか！》裕福な医者ミノレとその養女ユルシユールをめぐる渦巻く、相続人たちの悪意と陰謀。《人間喜劇》らしい活気溢れる人物描写の背後で、保護者を亡くした娘の運命の変転はあの謎めいたメスメリズムによって……。

076 三四七頁 三〇〇〇円

⑤ 動物寓話集他

私市保彦・大下祥枝訳

何と滑稽な人間どもよ！ 恋する牝猫、旅する雀、おしゃれたライオン……時代と社会を観察し尽くした辛辣な一大風俗絵巻。グランヴィルの挿絵に彩られた表題作に、「魔王の喜劇」「廃兵院のドーム」を収録し、《諷刺と諧謔の作家》バルザックに光をあてる。全五巻、完結！

078 二九六頁 三〇〇〇円

バルザック芸術／狂気小説選集

編集 Ⅱ 私市保彦＋加藤尚宏＋芳川泰久

狂気におちいる芸術家、過剰な想像力につかれ、時代を先取りし過ぎたが故に悲劇的な末路を迎える天才の物語……。ロマン派特有の天才の観念と重ねながら、小説に狂気を登場させた点でも先駆的だったバルザックの芸術／狂気に関する作品を四巻に集成。小社創立三十周年記念出版。 内容見本呈 四六判上製

① 知られざる傑作他【絵画と狂気】篇

澤田肇十片桐祐十芳川泰久十私市保彦十奥田恭士十佐野栄一訳

命ある絵を描くため長年探求を続けるうち、ついに自らの絵を黒く塗り込めてしまうほどの狂気にとった老画家を描いた「知られざる傑作」をはじめ、バルザックの絵画観を垣間見ることができ「鞠打つ猫の店」「財布」「ピエール・ケラスー」「海辺の悲劇」「石榴屋敷」の、計六篇を収録。

106 三三〇頁 三〇〇〇円

② ガンバラ他【音楽と狂気】篇

博多かおる十加藤尚宏十私市保彦十大下祥枝訳

ガンバラは酒に酔ったときのみ天才的な演奏をすると気づいたアンドレアは一計を案じるが……。フランスで最初に音楽を論じた小説とされる「ガンバラ」に、音楽と小説が一体となって新たな芸術を生み出す「マツシミア・ドローニ」「ファチーノ・カーネ」「アデュー」の、計四篇を収録。

108 三三三頁 三〇〇〇円

③ 田舎のミューズ他【文学と狂気】篇

加藤尚宏十芳川泰久訳

裕福だが吝嗇でエゴイストの夫との田舎での虚しい結婚生活。パリで活躍する郷土出身の文筆家と愛人関係になり、パリまで彼を追ってきたディナだが……。書くことに追われ、書くことに生きたバルザック自身の姿にも重ね合わせられる表題作と「カディニヤン公妃の秘密」を収録。

1010 三八七頁 三五〇〇円

④ 絶対の探求他【科学と狂気】篇

私市保彦訳

「ダイヤモンドを創造する」という考えにとりつかれ、実験に没頭する男、妻は死に、残された娘がとった方法、そして男の行き着いた果てとは……。バルザックならではの神秘的科学観から時代の空気を感ずることができ表題作に「赤い宿屋」。人間の極限の狂気を描く二篇。

1012 三八七頁 三五〇〇円

全巻完結 全四冊セット定価 三、〇〇〇円

バルザック関連書

神秘の書

オノレ・ド・バルザック

私市保彦十加藤尚宏十芳川泰久十大須賀沙織訳
北欧の神秘思想家スウェーデンボルグの思想の小説化を企てた「追放された者たち」「ルイ・ランベール」「セラファイタ」の三篇に著者の序文を付して刊行された一八三五年版を初めてそのまま邦訳する。神秘と狂気の世界を描き尽す、著者渾身の謎めいた三部作。 109 A5判クロス装クロス函入四三五頁 八〇〇〇円

バルザック『脳』と『知能』の小説家

東辰之介

「バルザックは描写したのではない。ヒトを解剖したのだ。」《近代リアリズム文学》の怪物バルザックは、なぜ「脳」に執着し、「脳」を描いたのか？ 気鋭のバルザシヤンが、脳生理学からバルザック秘術の人間学に肉薄する斬新な試み。

A5判 三三〇頁 四〇〇〇円

マルキ・ド・サド全集

編集 植田祐次＋私市保彦＋鷺見洋一＋原好男

激動の十八世紀末、生涯の多くの時を獄中にすごした異端のフランス作家の合法、非法のすべての作品を一行の削除もなしに完訳する本邦初の完訳版全集。本国フランスにおける本文批評の最新の成果をも反映させ、サドの全体像に迫る。
内容見本呈 A5判上製貼函入

④ ジュリエットの物語あるいは悪徳の栄え(上)

真部清孝訳

近刊

① ソドム百二十日あるいは放蕩学校／閨房哲学

橋本到・中村英俊訳

近刊

⑤ ジュリエットの物語あるいは悪徳の栄え(下)

真部清孝訳

近刊

② 美德の不運／ジュスティヌあるいは美德の不幸他

植田祐次・余語毅憲訳

近刊

⑥ 恋の罪、壮烈悲惨物語

私市保彦・橋本到訳

二〇六 六四九頁 八〇〇〇円

恋の駆引き、情欲、邪恋、嫉妬。近親相姦、多重相姦、姦通、陵辱。さらには政略結婚、野心と裏切り、策謀……美德と悪徳の限りない対立によって生み出される壮絶なピカレスク絵巻、ありとあらゆる欲望の変奏曲。初の完訳。

③ 新ジュスティヌあるいは美德の不幸他

鷺見洋一訳

近刊

⑦ 小咄、昔話、おどけ話他

橋本到他訳

近刊

⑧ アリーヌとヴァルクールあるいは哲学的物語(上)

原好男訳

若き恋人アリーヌとヴァルクールの愛の運命をたどる。自伝的告白を含む書簡体の大長篇小説。美德と悪徳、感情と理性、慈善とエゴイズム等、人間の本性をめぐって、人間への怨嗟と社会への憎悪にみちた異端の思想が交錯する。
四〇三頁 四五〇〇円

⑩ ガンジュ侯爵夫人

橋本到訳

悪徳神父の奸計に美德の鑑 Ⅱ ガンジュ侯爵夫人はどう対抗するのか。ゴシック建築の城、闇の回廊、予知夢等、暗黒小説的な設定のなかで、美德と悪徳が対等の権限をもって闘争する、著者の知られざる一面を映し出す傑作中編。本邦初訳。
三二七頁 三五〇〇円

⑨ アリーヌとヴァルクールあるいは哲学的物語(下)

原好男訳

アリーヌの父、悪徳法院長ブラモンの謀略により、二人の純愛は悲劇的結末へ。サンヴィルとレオノールの冒険譚で語られる、婚姻、財産、宗教を巡る独特の理想社会論が異彩を放つ。フランス革命一年前に獄中で構想された長篇の後半部。
四九八頁 五五〇〇円

⑪ フランス王妃イザベル・ド・バヴィエール秘史他

原好男・中川誠一訳

一四一―一五世紀 シャルル六世治下におけるフランス王妃イザベルの恐るべき策略の数々。一一世紀、ザクセン大公妃アーデルハイトをめぐる愛と陰謀のアラベスク。サド晩年の想像力が飛翔する、悪徳と美德に彩られた凄絶な歴史絵巻、二篇。
一八一 四七六頁 七〇〇〇円

フィクションの楽しみ

海外のもっとも新しい小説、実験的精神にあふれるフィクションの数々を最速の訳者によって贈る、新しい翻訳小説シリーズ。

四六判上製

人生 使用法

ジョルジュ・ペレック 酒詰治男訳

ウリボを代表する小説家があらゆる形式の物語と多彩な言語遊戯の収集の果てに、ルーセル、カフカ、ジョイス、ボルヘス等々からの《剽窃》を、極めて緊密な構成のうちに散種した前代未聞の破天荒な大長篇。第三回日仏翻訳文学賞受賞。
10.10 七三頁 五〇〇〇円

ステュディオ

フィリップ・ソレルス 齋藤豊訳

パリの《ステュディオ》で暮らす主人公の日常に現われる謎めいたミイラ、そしてプログラム化された世界への糾弾、ヘルダーリンとランボーの人生をめぐってあふれだす豊饒なことば……。現代フランス文学の極北を歩む著者のポリフォニクな小説。
二五六頁 二五〇〇円

家出の道筋

ジョルジュ・ペレック 酒詰治男訳

なぜ書くのか、そしてどのように書いたのか？ 短篇小説、自伝的テクスト、ヌーヴォー・ロマン論、対話等、十九のテクストによって、『人生使用法』、『煙滅』によって知られる前代未聞の怪物的作家の知られざる一面を明かす。
117 二二七頁 二五〇〇円

煙滅

ジョルジュ・ペレック 塩塚秀一郎訳

《い》段がない！ 失踪した男と失踪した《文字》をめぐる前代未聞のミステリー。E抜きで執筆され翻訳不可能とまで言われた、パリアの実験文学集団《ウリボ》の最高の作家の幻の代表作、ついに刊行！ 小社創立三十周年記念出版。
10.11 三三七頁 三三〇〇円

Wあるいは子供の頃の思い出

ジョルジュ・ペレック 酒詰治男訳

少年時代の回想がときに微笑ましく、ときに哀切に綴られる「子供の頃の思い出」。虚構と現実、歴史と記憶とが《読むこと》によって、架橋される、鬼才ペレックの痛切な自伝的小説。
13.11 二三四頁 二八〇〇円

美術愛好家の陳列室

ジョルジュ・ペレック 塩塚秀一郎訳

一九一三年、一枚の絵に全米は騒然となった。そして、あふれかえる数々の名画。ドラクロワ、ルノワール……。フランスにおける実験文学の旗手が、美術市場を巻き込んだ大騒動をめぐって綴る鮮やかな中編。
一五四頁 一五〇〇円

ぼくは思い出す

ジョルジュ・ペレック 酒詰治男訳

ジョー・ブレインード『ぼくは覚えている』に想を得て、四八〇の『忘れられた、どうでもいい凡庸な思い出』を列挙しつづける、言語遊戯の作家ならではの『記憶』をめぐる奇妙な試み。戦後から六〇年代にかけてのフランス版枕草子!!
15.4 二九二頁 二八〇〇円

秘められた生

パスカル・キニヤール 小川美登里訳

《かつての愛》から、異郷を求めて自己、外部へと《出立》する愛の物語。ことばと沈黙、秘事、セクシュアリティの蠱惑から人間の官能と《再生》に迫る愛のエクリチュール。
13.11 五二二頁 四八〇〇円

家族手帳

パトリック・モディアノ 安永愛訳

父になったパトリックは娘の出生が記録された「家族手帳」を手にする。しかし彼は自分がどこで生まれたのか、父母が何という名前だったのか、知らないのだった……。断片的記憶を手がかりに、失われた自らの《出生》を事実とフィクションを織り交ぜて物語る鮮烈な自伝的小説。13.1 二二二頁 二五〇〇円

骨の山

アントワーヌ・ヴォロディーヌ 濱野耕一郎訳

SF? 恋愛小説? 《ポスト・エグゾチスム》的ロマンス! 革命の希望さえ失われた終末論的世界で、マリアとジャンの紡ぐ、もの悲しくも美しい夢想の書。複数のペンネームで独自の世界観を生み出し続ける奇才による、《監禁学》小説。
15.1 一八五頁 二二〇〇円

地平線

パトリック・モディアノ 小谷奈津子訳

青春時代の思い出の断片から浮かびあがる亡霊のようなシルエット。かつての恋人の足跡を求めて、パリアの街を彷徨するひとりの男。かすかな記憶の糸が、四〇年の時を経て、恋人の生まれたベルリンへと誘う……。ノーベル賞作家モディアノによる記憶と夢想の物語。
15.2 一八七頁 一八〇〇円

長崎

エリック・ファーフユ 松田浩則訳

平凡な独身男シムラはある日、自宅の押し入れに見知らぬ女性が潜んでいるのを知る。彼女はいったい何者なのか……。日本で実際に起きた出来事を題材に、現代社会に生きる人々の孤独な宿命を描きたす、奇妙にして哀切な物語。
13.10 一四二頁 一八〇〇円

あなたがこの辺りで迷わないように

パトリック・モディアノ 余田安広訳

両親の愛情に恵まれることになかった少年時代。苦悩に満ちた青年時代。そして、小説家となった現在の謎めいた交錯のうちに立ち現われる孤独な生の歩み。ノーベル賞作家の《自伝》的フィクションの新しい地平!
15.5 一七二頁 二〇〇〇円

わたしは灯台守

エリック・ファーフユ 松田浩則訳

《灯台を除けば、この風景の中で永遠に変わらないものなど何もないだろう》……。世界から隔絶された男の魂の叫びと嘯きを、陰鬱でありながらユーモラスに綴る表題作をはじめ、不条理で幻想的、ときに切なくノスタルジックな珠玉の九編を収録。
14.9 二四八頁 二五〇〇円

赤外線

ナンシー・ヒューストン いぶきけい訳

《わたし》を貫く男たちのあの瞬間を赤外線カメラで撮る……。世界を駆けめぐる女性写真家の自由奔放な男性遍歴。女の視点から男の性をあからさまに描き、フランスでセンセーショナルな話題を呼んだ、バイリンガル作家の過激な最新小説。
11.12 三五六頁 二八〇〇円

草原讃歌

ナンシー・ヒューズトン 永井遼訳

ヨーロッパからの移民／土地を追われるカナダ・インディアン。自然を支配する西欧文明／自然との共存をめざす土着の文化。堅実な妻／奔放な愛人。相反する価値観にひきまかれたカナダ移民の四代にわたる波乱にとんだ家族の歴史を背景に、人間の再生そして救済を物語る。 131 二七六頁 二八〇〇円

モンテスキューの孤独

シャードルト・ジャヴァン 白井成雄訳

テヘランからイスタンブール、そしてパリへと逃れてきた少女は、孤独のうちに、十八世紀の思想家モンテスキューにあてて手紙を書き、いまわしい過去の世界を忘れられるだろうか、新しい国、新しい言葉のなかで…… 101 二八三頁 二八〇〇円

バルバラ

アブドウラマン・アリ・ワベリ 林俊訳

「死ぬ前に証言する、消滅する前に書く。」植民地時代の悪弊、帝国主義列強の支配、氏族独裁主義の迷妄と内紛……。血塗られたジブチの歴史的苦劇。混迷する日常のなかで格闘する、四人の若者の抵抗を描く実験的心理小説。 141 一七六頁 二〇〇〇円

モレルの発明

A・ビオイカサーレス 清水徹十牛島信明訳

二つの太陽、二つの月が輝く絶海の孤島での亡命者と若い女の奇妙な恋物語のうち、現実とイマジジュ、現実と虚構とを巡る形而上的思考を封印し、『去年、マリエンバートで』、『ピアノ・チューナー・オブ・アースクエイク』の靈感源ともなった、ボルヘスの盟友による異色の中篇小説。 197 一五〇〇円

連邦区マドリード

J・J・アルマス・マルセロ 大西亮訳

妄想と現実が混ざりあつた都市（マドリード）を背景に、嫉妬、偽装／計略／篡奪が織りなされる美しくも謎めいた物語。《洪水のように溢れ出る言葉の奔流》（バルガス・リョサ）。 144 三四四頁 三五〇〇円

古書収集家

グスタボ・ファベロン・パトリアウ 高野雅司訳

ペルーの言語学者が、北米産ミステリーと六〇年代南米小説の実験精神を融合させた驚異のデビュー作！《本書は野心的な小説だ……読むことを通じて作品の創造に加わり、この小説に秘められた緻密な意味と謎を享受することができる読者この本を忘れることはないだろう》（M・バルガス・リョサ）。 142 二八四頁 二八〇〇円

これは小説ではない

デイヴィッド・マークソン 木原善彦訳

「これは小説か、あるいは究極の反小説か？」作家、芸術家を襲う病氣、狂気、不遇、死因……トリビアな伝記的記述が積み重ねられていく、未曾有の（死の類別目録）小説にして、ジョイス、ベケットに比せられる実験的な「まったく物語のない小説」。 130 三〇頁 二八〇〇円

ライオンの皮をまとうて

マイケル・オンダーチェ 福岡健二訳

橋から落ちる尼僧、受けとめる命知らずの男。失踪した大金持ち、あとを追うラジオ女優……。カナダの人気小説家がオムニバス映画のように切り替わる詩情豊かな場面のなかに織りなす官能と労働の物語。 336 頁 二八〇〇円

神の息に吹かれる羽根

シークリット・ヌーネス 杉浦悦子訳

愛を、そして言葉を不器用にしか表わすことのできない貧しい移民たちの不安と苦悩、そしてマンハッタンに生きるひとりの女性の孤独と焦燥を繊細な感覚で描く、全米で話題沸騰のアジア系作家のデビュー作。 233 頁 二二〇〇円

ミッツヴァージニア・ウルフのマーモセット

シークリット・ヌーネス 杉浦悦子訳

第二次世界大戦前夜。ブラジルの密林からやってきた世界一小さなサル「ミッツ」。ウルフの小説、日記、書簡などを縦横に駆使して織りなす、ユーモアと悲哀にみちた新しいフィクションの試み。ウルフの伝記？ サルの伝記？ 187 頁 一八〇〇円

メルラーナ街の混沌たる殺人事件

カルロ・エミリオ・ガッタ 千種堅訳

ムッソリーニ政権下のローマ。成金街の宝石盗難・殺人事件。奮闘する敏腕警部。迷走する捜査劇。混乱。脱線。紛糾……。ジョイス、ブルースト、カフカに比肩する、イタリヤ・ポストモダン小説の金字塔。 112 四二頁 三五〇〇円

暮れなずむ女

ドリス・レスリング 山崎勉訳

長く家庭に束縛されていたケイトはある夏、海外で单身生活を送ることになった。新しい体験を経て、彼女が見出した自由とは？「目を開ければそこに戦争があり、憎み合う人間がいる。そういう時代において人間とは何なのか？」本年度ノーベル文学賞作家の代表作。 285 頁 二五〇〇円

生存者の回想

ドリス・レスリング 大杜淑子訳

破壊と暴力が蔓延する近未来都市に生きる老女のもとに、少女が届けられた。荒廃した現実と、「壁」の向こうに広がる異世界を往還しつつ、未来を信じる少女たちのサヴァイヴァルが今、はじまる……。 237 頁 二二〇〇円

シカスタアルゴ座のカノープス

ドリス・レスリング 大杜淑子訳

今や野蠻と殺戮が支配する星シカスタ。この星の再生のために送り込まれたジョーリアだったが……。宇宙的視点から一つの星の命運を描き出す、現代社会への痛烈な批判にみちた、壮大な黙示録。 52 頁 三八〇〇円

現代ウイーン・ミステリー・シリーズ

ドイツ語圏におけるミステリーの一大中心地、ウイーン発、異色のミステリー・シリーズ。ウイーンっ子に人気の若手作家からおなじみの中堅作家までの野心作、話題作をとりそろえ続々紹介。登場地名を網羅した、豪華ミステリー・ガイドマップ付き！

内容見本呈 四六変判並製

きたれ、甘き死よ

ヴォルフ・ハース 福本義憲訳

白昼のウイーン中心街で、血液銀行社長とその恋人が狙撃され、続いて赤十字救護隊のドライバーが絞殺される。その背後には、(人命救助)を賭けて熾烈なライバル争いを繰り広げる二つの救急隊組織の存在が……。ドイツ・ミステリー大賞最優秀賞受賞作品。

二七八頁 一六〇〇円

『ケルズの書』のもとに

ペーター・R・ヴィーニンガー 松村国隆訳

中世の装飾写本『ケルズの書』が辿る教奇な運命と、そこに密かに刻まれた謎の文字。かたや現代のウイーンでひき逃げ事故を起こした男のもとに舞い戻る無傷の愛車——時空を超えて、二つの謎が出会うとき、明らかになる一つの「真実」とは？

二六八頁 一八〇〇円

消えた心臓

ユルゲン・ベンヴェヌーティ 唐沢徹訳

閑静な住宅街で犬や猫の惨殺事件が続発。人間までもが同じ手口の犠牲者となる。おまけに遺体からは心臓がえぐり取られていた。三流大衆紙の若きカメラマン、ブライトマイアーは、持ち前の好奇心と粘り強さで事件の裏側へと潜入。ある事実突きあたるが……。

二四四頁 一五〇〇円

ペスト記念柱

ロツテ・イングリツシュ 城田千鶴子訳

突如失踪した親友フアーニーの行方を追う女子大生のフローは、失踪の謎を探るうち、身辺で錯綜する人間心理の迷宮に迷い込む。そう言えばウイーンは「心理学の街」だった。わたしは一体、誰？ フロー？ それともフアーニー？

一九八頁 一四〇〇円

小さな花

エルンスト・ヒンターベルガー 鈴木隆雄訳

雪もよいの薄ら寒いある日、行方不明の幼女がドナウ河岸に死体となって漂着する。司法解剖の結果、児童虐待の事実が判明し、犯人の目星もすぐに付いたかに思えた。しかし事態は急転、重要参考人が次々と撲殺され……。

三〇九頁 一八〇〇円

マン嬢は死にました。彼女からよろしくとの

ヘルムート・ツェンカー 上松美和子訳

私立探偵ミニ・マン嬢は身長一二〇センチで体に障害を持つが、頭はとびきりの切れ者。ある日二人の男にトランクに押し込まれ運ばれた先に待っていた依頼人は、指名手配中の女実業家だった。トレード・マークの(松葉杖)を武器に事件解明に大暴れ！

一八〇頁 一四〇〇円

カルトの影

クルト・ブラハルツ 郷正文訳

カルト教団に入信して消息を絶った資産家の娘の捜索を依頼されたが、不信所員は、調査を進めるうち、そのセックス・カルトに大いに関心をそそられ、グルの言葉に誘われるまま、甘美で異次元の女性の迷宮へと足を踏み入れる。娘捜しの件はどうなる!?

一七三頁 一四〇〇円

病んだハイエナの胃のなかで

マルティン・アマンズハウザー 須藤正美訳

ウイーンの地下鉄で偶然、謎のミステリー小説を手にしたのが運のつき。二十三区を順番に巡る先々で出没するキテレツな人たちが、素っ頓狂な出来事、忍び寄る魔の手。可笑しくて、ちょっと不気味な異色のヘンテコ・ミステリー。

一八二頁 一四〇〇円

血のバセーナ 八人の女性ミステリー作家による短篇集

ミヒヤエル・ホルヴァート編 伊藤直子・須藤直子訳

美しい、青きドナウを流れる死体、それを引き上げるひとりの老女。さえない中年男の怪しげな恋心。突如、失踪した声楽家の行方は？ 個性豊かなウイーンの女性作家たちが紡ぎ出す、ミステリアスなタペストリー。

三〇七頁 一八〇〇円

全巻完結 全九冊セット定価一四、一〇〇円

アンデスの風叢書

編集 桑名一博 十篠田一十 清水徹十 鼓直

破天荒な物語への意志、方法論のラディカルな探求、言語実験……今日の世界文学の最も熱い中心のひとつ、ラテンアメリカから吹き送られてきた言語の爆風。本邦でもようやく知られ始めた現代ラテンアメリカ文学の息吹きを伝える文学シリーズ。
四六判上製

ボルヘス、オラル

ホルヘ・ルイス・ボルヘス 木村栄一訳

ラテンアメリカ文学の名を世界に轟かせたあのボルヘスが、幻想的なまでの博識と苦いユーモアのうちに、半世紀にわたって追求し続けてきた書物、時間、そして不死性の問題へと肉迫する、故国アルゼンチンにおける最晩年の連続講演。
一七五頁 二〇〇〇円

天国・地獄百科

ボルヘス十ヒオイカサーレス 牛島信明・内田吉彦・斎藤博士訳

天国とはそして地獄とは何か。人類の宗教的感情とともに古いこの問いに答えるべく、アルゼンチンの二人の国際的作家が編んだ古今東西の文学者・哲学者・宗教家等の珠玉のアンソロジー。天国に憧れ地獄を恐れる全ての読書人に贈る奇書。
一七七頁 二〇〇〇円

光の世紀

アレホ・カルペンティエル 杉浦勉訳

カリブ海域にフランス大革命の理想を広めるべくハバナを訪れたビクトル・ユーグと三人のキューバ青年の波瀾にみちた運命を語りつつ、『革命』への限りない情熱と深い幻滅を描ききった現代キューバを代表する小説家の待望久しい大長篇小説。
三五〇頁 二五〇〇円

この世の王国

アレホ・カルペンティエル 木村栄一 十平田渡訳

ヴードゥー教がいまだに根強く生き延び、圧制と反乱のうちに続くカリブ海の島ハイチで、世にも数奇な運命を辿った一黒人奴隷の眼に映った新大陸の驚くべき現実。シュルレアリスト 魔術的レアリストとして知られる著者の初期の傑作中篇。
一六五頁 一五〇〇円

追跡

アレホ・カルペンティエル 杉浦勉訳

《かれ》はかつて革命のために暗殺を敢行した『英雄』しかし、今は庇護なき逃亡者。次第に明かされる、魂の救済を希求する一人の男の血塗られた歴史とその末路。物語構造の中に大胆に『音楽』を編みこんだことでも有名な異色の中篇。
一六三頁 二〇〇〇円

すべての火は火

フリオ・コルタサル 木村栄一訳

侵犯する幻想……崩壊する日常……。洗練された実験的手法と幻想的な技巧を駆使して、日常と非日常が混濁する不可思議な小説空間を構築する現代アルゼンチン作家による、脱出不可能な八つの迷宮的短篇。
二四七頁 二三〇〇円

ファラベウフ

サルバドル・エリソンド 田澤耕訳

バタイユの『エロスの涙』に触発され、耐えがたい苦痛であると同時に恍惚的な愛の儀式を執拗に描きだした未聞の残酷奇譚。解剖学、写真術、心靈術、中国幻想、性愛術をめぐる言語が強迫的に読者を襲うメキシコのヌーヴォー・ロマン。
二〇四頁 二〇〇〇円

セルバンテスまたは読みの批判

カルロス・フエンテス 牛島信明訳

現代メキシコ最大の小説家が、近代的意味における《小説》そのものの創始者にしてその変革者セルバンテスを、その時代的文脈において、そしてとりわけジョイス等の現代の文学的冒険との関連において論じたセルバンテス論の白眉。
一四三頁 二〇〇〇円

ある遭難者の物語

G・ガルシア・マルケス 堀内研二訳

一九八二年度のノーベル文学賞を受賞し、コロンビアの、というよりは、今日のラテンアメリカ文学の代表者ともいえるべき著者が、あの『百年の孤独』の直後に発表した、英雄的冒険が『商売になる』時代の奇妙な苦い漂流譚。
一三九頁 一五〇〇円

泥の子供たち

オクタビオ・パス 竹村文彦訳

理性の時代 近代 感性と情熱の言語 《詩》とは何であったのか。シュルレアリスムの洗礼をうけたメキシコのノーベル賞詩人が、ロマン派からアヴァンギャルドに至る近代詩の中から『近代性の終焉』を剔抉する根源的詩論。
二八五頁 二八〇〇円

燃える平原

ファン・ルルフォ 杉山晃訳

灼熱の太陽が照りつける荒涼とした大地を舞台に、人間の愛憎、孤独、欲望、宿命を禁欲的な文体で描き、意識の奥深くに抗道を掘り込むが如き神話的な物語にまで昇華した、現代メキシコの伝説的な前衛作家の唯一の短篇集。
一一二頁 二〇〇〇円

フィクションのエル・ドラード

編集 寺尾隆吉

欧米を席卷したラテンアメリカ文学の〈ブーム〉から半世紀を経た現在も、政治と社会の混乱のなから、陸続と新しい小説、新しい小説家たちが現れつづけている。〈ブーム〉の巨匠たちから異色の新鋭まで、フィクションの未来を告げる新シリーズ。
四六判上製

対岸

フリオ・コルタサル 寺尾隆吉訳

ホルヘスと並ぶ、アルゼンチンを代表する作家による幻の処女短編集。怪奇・幻想的な作品からSF的な作品まで、フィクションと現実のあいだで戯れる珠玉の十三編。貴重な講演「短編小説の諸相」もあわせて収録。
142 一八四頁 二〇〇〇円

八面体

フリオ・コルタサル 寺尾隆吉訳

日常のなかに突如として闖入してくる〈鮮烈な夢のイメージ〉を作品へと昇華させるコルタサルが、実験的な語り的手法を用いて幻想と日常の交錯を多面的に描き出した傑作短篇八篇を収録。実践的な短篇小説論（『短篇小説とその周辺』）を併録。
148 二三五頁 二二〇〇円

境界なき土地

ホセ・ドノソ 寺尾隆吉訳

大農園主に支配された小村を舞台に、性的〈異常者〉たちの繰り広げる奇行を猟奇的に描き出し、〈錯綜した神経症的世界と豊かな文学的想像力〉（バルガス・ジョサ）と評された、チリの〈グロテスク・リアリズム〉の知られざる傑作。
137 一七頁 二〇〇〇円

ロリア侯爵夫人の失踪

ホセ・ドノソ 寺尾隆吉訳

若さ、富、美貌 すべてを備えた侯爵夫人に唯一欠けていたのは、夫との〈愛の達成〉だった。未亡人となりながらも快樂を追求し続け、さまざま男性を経験するブランカにおとずれるものとは……? 軽妙なタッチで人間の際限ない性欲を捉え、その破壊的魔力を歪に描き出す、ドノソの官能小説! 157 一六九頁 二〇〇〇円

別れ

ファン・カルロス・オネットイ 寺尾隆吉訳

語り手の視点から言葉巧みに読み手作品世界へと誘う、作者自身が偏愛した秀逸な表題作のほか、モンテビデオで起きた実話を愛憎と復讐の物語へと変貌させた「この恐ろしい地獄」、婚礼というオプセッションに取り憑かれた狂女を幻想的に描く「失われた花嫁」の三篇を収録。
1310 一六八頁 二〇〇〇円

ただ影だけ

セルヒオ・ラミレス 寺尾隆吉訳

鮮烈な描写と圧倒的な語り技法のもと、ニカラグアでの歴史的事件の裏側をフィクションの力によって再構築する南米文学の新たな傑作。〈アイロニーと距離感、内面性とユーモア〉。ラミレスは銅のような三面記事から言葉と想像力で黄金を生み出す錬金術師だ! (C・フエンテス)。 134 三二四頁 二八〇〇円

孤児

ファン・ホセ・サエール 寺尾隆吉訳

ホルヘス以後のアルゼンチン小説の代表者が、無から生まれ、親もなく、名前もない、この世の孤児となった語り手を通して、現実と夢幻の狭間で揺れる存在の儚さを描き出す破格の物語。〈現実世界の強烈な存在感〉。サエールは現代世界の超重要作家になるだろう! (ロブ・グリエ)。 135 一八六頁 二二〇〇円

ガラスの国境

カルロス・フエンテス 寺尾隆吉訳

国境を接するメキシコとアメリカ。〈こちら側〉と〈あちら側〉の人間たちが生きる世界を九つの物語によって多層的に描き出し、登場人物たちの声を響かせ、祖国〈メキシコ〉を高らかに謳いあげる、現代版〈人間喜劇〉。
153 三三三頁 三〇〇〇円

闇を讃えて

ホルヘ・ルイス・ボルヘス 斎藤幸男訳

《私は今すべてを忘れようとする。私の中心に、私の代数学、私の鏡、私の鏡に達するのだ。私は誰か、今それを知らなう。》初期三詩集の刊行から四十年、アルゼンチンの碩学が満を持して放った第四詩集。本邦初訳。
四六判一七七頁 二〇〇〇円

エル・オトロ、エル・ミスモ

ホルヘ・ルイス・ボルヘス 斎藤幸男訳

古今東西の文学作品のなかを、そして現実と虚構のあいだをたくみに往還する、二十世紀文学の《魂》とも言うべき著者の第五詩集。他者は自身であり、自身は他者であり……。

疎外と叛逆 ガルシア・マルケスとバルガス・ジョサの対話

寺尾隆吉訳

厳密な理論派のバルガス・ジョサと、諧謔的ユーモアを繰り出すガルシア・マルケス。現代ラテンアメリカ作家の頂点二人による若かりし頃の貴重な対話。「アラカタカからマコンドへ」(バルガス・ジョサ)、「バルガス・ジョサへのインタビュー」も収録。
143 四六判一七六頁 一八〇〇円

ブエノスアイレスの熱情 初期詩集成 1923-1929

ホルヘ・ルイス・ボルヘス 斎藤幸男訳

〈ブエノスアイレスの明りよ、／お前だけが友だった、／この街の明りであつたの生と／死を歌うのだ。／色褪せぬ大いなる街よ、／わたしの生を知る／唯一の音楽よ。ながいヨーロッパ滞在から戻った、後の学匠詩人 小説家の最初期の三詩集を完訳、集成する。 四六判三六頁 二八〇〇円

批評の小径

四六判上製

マラルメ セイレーンの政治学

ジャック・ランシエール 坂巻康司・森本淳生訳

詩を未来の宗教に変え、出現と消滅とを分節化するフィクションの力とは何か。エクリチュールによる〈共同体〉を作り出すことを夢見た詩人を稀代の哲学者が詳細に解説する。

145 二三三頁 二五〇〇円

氷山へ

J・M・G・ル・クレジオ 中村隆之訳

二〇〇八年にノーベル文学賞を受賞したル・クレジオの思考と実践に大きな影響を与えた孤高の詩人アンリ・ミショールの至高の詩編「氷山」について、読むことは旅すること、だと語るル・クレジオが、包括的かつ詩的に綴る珠玉の批評「エッセイ」。

153 一四三頁 二〇〇〇円

オペラティック

ミシェル・レリス 大原宣久・三枝大修訳

作家／民族学者／美術批評家／闘牛愛好家などさまざまな顔をもつレリス。彼はオペラに何を見て、何を得たのか？ 幼少期からオペラに親しみ、深い影響を受けてきた作家の未発表草稿をまとめた、異色のオペラ論。レリス美学の精髓がここに！

14.10 二六五頁 三〇〇〇円

日本のうしろ姿

クリスチャン・ドゥメ 鈴木和彦訳

日本について何の予備知識も持たないフランス人作家が、ある日突然、京都という町が見せる日本のイメージに直面することになった。私たちの日常生活にまぎれこんだ何気ない瞬間の数々が、新たな輝きを帯びて立ち現われる、異色の日本論。

13.11 二六〇頁 二〇〇〇円

みどりの国 滞在日記

エリック・ファークユ 三野博司訳

注目のフランス人作家が、南は屋久島から北は宗谷岬まで、その眼と耳と肌で日本各地を味わいながら、所々に隠れた異国の神秘に触れてうつろう内面を、率直に綴った美しい〈日記〉。著者への最新インタビューを収録。

14.12 一九五頁 二五〇〇円

夢かもしれない娯楽の技術

ボリス・ヴィアン 原野葉子編訳

現実と虚構のあわいで軽やかに綴られたエッセイを、「くらす」「でかける」「まなぶ」の三部に収録。ささやかな日々の暮らしをとりきり贅沢に過ごすための、突拍子もないアイデア満載のエッセイ集。

14.9 二五五頁 二八〇〇円

フローベールにおけるフォルムの創造

ジャン＝ピエール・リシャル 芳川泰久・山崎敦訳

「恋する者は液化するまえに、愛のなかでねばつく。」「生地」と「ねばつくもの」をめぐり、〈フローベールの存在〉の様態を鮮やかに描き出す。二十世紀の文学批評を一新させた主題論的批評の核心的書物。

13.11 二四〇頁 三〇〇〇円

ロラン・バルト 最後の風景

ジャン＝ピエール・リシャル 芳川泰久・堀千晶訳

波状模様（モアレ）、きらめくもの、ニュアンスといったバルトが愛したモチーフのあいだを、軽やかに飛翔し、この大いなる「変容の思想家」に迫る、テーマ批評の第一人者による、ロラン・バルト入門。

08.1 二〇〇頁 二〇〇〇円

ポストメディア人類学に向けて 集合的知性

P・レヴィ 米山優十清水高志十曾我千亜紀十井上寛雄訳

実現されるべき未来がここにある――。人類学的スケールの視野をもって、二一世紀におけるポストメディア時代の到来を予感させる、マーシャル・マクルーハンの「メディア論」以降、最高の情報哲学の書。

15.3 三六二頁 四〇〇〇円

エコクリティシズム・コレクション

四六判上製

〈故郷〉のトポロジ―場所と居場所の環境文学論

喜納育江

言葉のない場所に言葉を、生命のない場所に生命を感じとる。アメリカ先住民や沖縄の民らの表現を媒介に、重層化する彼らのアイデンティティを問う清冽な環境文学論。

117 二三四頁 二五〇〇円

動物とは「誰」か？ 文学・詩学・社会学との対話

波戸岡景太

古川日出男、大澤真幸、管啓次郎の三人の表現者との白熱の対話！ 人間に限りなく身近でかつ遠い他者Ⅱ《動物たち》を通して《文学》と《人間》の現在を問い直す《クリティカル・アニマル・スタディーズ》の実践。

124 二〇〇頁 二二〇〇円

ピンチョンの動物園

波戸岡景太

壮麗無比なピンチョン文学の奇想天外なサブキャラクターⅡ動物たちに着目し、処女長篇『V.』から最新作『インヒアレント・ヴァイス』にいたる全作品を徹底的に読み解く。

117 二四八頁 二八〇〇円

他火のほうへ食と文学のインターフェイス

結城正美

汚染 エコロジープーム、失われる季節感……。〈食〉に関する意識が問われる現在、石牟礼道子、田口ランディ、森崎和江、梨木香歩の四人の文学者との対話を通じて、食と人間の関係、人間と環境の関係の再考をうながす新しい文学批評。

122 二六七頁 二八〇〇円

語学

ロシア語文法の基礎

杉山麻子十藤沼敦子

近年のロシア語学、ロシア語教授法の発展に則しつつ、約百点の図表を用いて、初心者向きに、わかりやすくオーソドックスに説いたロシア語文法への好入門書。

菊判二三三頁 二五〇〇円／別売カセット・テープ（リュドミラ古田吹込み）三〇〇〇円

ロシア文法の要点

原求作

初級のロシア語文法を終えた学習者を対象にした、古今の様々なテキストからの豊富な例文をまじえた中級レベルのロシア語文法書。これまで存在しなかった、日本人による日本人のためのロシア語中級文法の決定版。

A5判並製三〇二頁 四〇〇〇円

ロシア語の体の用法

原求作

ロシア語の動詞範疇のなかでも初学者にとってとりわけ難解とされる「完了体」「不完了体」の使い分け方、その意味、用法を懇切丁寧にときあかす総合的な概説書。「体」の問題への親しみやすく画期的な入門書。

A5判並製二二九頁 三〇〇〇円

ロシア語の体の用法【練習問題編】

原求作

ロシア語文法の難所「体」の用法を親しみやすい解説で論じ好評を博した「ロシア語の体の用法」の続編Ⅱ練習問題編。初級から応用まで、幅広いレベルに対応する練習問題によってロシア語特有の表現の修得を目指す実践的問題集。

A5判並製一六三頁 二五〇〇円

ロシア語動詞の構造

原求作

旧来しばしば行なわれてきた動詞分類の方法のある種の便宜主義、「覚えさせるための整理」といった方法を選び、動詞の「構造」を理解することにより「ロシア語動詞」をより深く学習するための一冊。

A5判並製二六七頁 三五〇〇円

ロシア語の運動の動詞

原求作

従来、まとまったかたちで論じられることのほとんどなかった（ロシア語の運動の動詞）の用法を、語用論の観点からの理論的な説明をもまじえつつ詳述する本邦初の包括的概説書。

A5判並製二六頁 三〇〇〇円

ロシア語史講話

原求作

ロシア語の歴史を印欧諸語、スラヴ諸語の歴史のなかに位置づけるとともに、とりわけ現代ロシア語との関連の面で重要なトピックスを中心に平易に論じた、ロシア語歴史文法への読んで楽しめる入門書。

A5判並製三五八頁 五〇〇〇円

共通スラヴ語音韻論概説

原求作

個々の方言に分化せず同一性を保っていた時代のスラヴ語、共通スラヴ語の音韻構造の概要を、現代ロシア語のよりよき理解のために、主として現代ロシア語との関係の中で説く。

A 5判並製三二八頁 四五〇〇円

The Hamlet Tradition by John Gielgud (ハムレットの演技伝統)

編注 加藤誠

長年ハムレットを演じてきた今世紀イギリスを代表する男優が、自らの経験をもとに伝統的ハムレット像の演出の歴史と自らの新しい解釈について、そして演技方法や公演記録について詳述する貴重な書。

[英語語学教科書] A 5判並製八七頁 一五〇〇円

The Craft of Fiction by Percy Lubbock (フイクションの技術)

編注 諸坂成利

トルストイ「戦争と平和」やフロロベール『ボヴァリー夫人』を精緻に読み解きながら、フイクションにおける「技術」の問題を鋭く捉え直し、構造的論の小説理論の先駆ともなった英国文芸批評の古典。

[英語語学教科書] A 5判並製八六頁 一五〇〇円

The Stuarts in Love by Maurice Ashley (恋する王様たち)

編注 大西章夫

「恋愛への対応ほど、男の人間性の深層をあらわにするものはない」というフロイトの言葉をヒントに、歴史を動かした英国国王たちの言動と決断の鍵とを、その生い立ちと結婚生活に求める、碩学の英国王朝史。

[英語語学教科書] A 5判並製二六頁 一五〇〇円

The Faerie Queene, Book III, Cantos I - VI, by Edmund Spenser (妖精の女王 第三巻第篇〜第六篇)

編注 内田市五郎・植月恵一郎他

シェイクスピアと双璧をなす、十六世紀イギリスが生んだ偉大な詩人スペンサーの代表的長篇詩を、個々の語の意味や歴史的背景を詳述する注釈によって解説する。

[英語語学教科書] A 5判並製二二三頁 二〇〇〇円

The Faerie Queene, Book III, Cantos VII - XII, by Edmund Spenser (妖精の女王 第三巻第七篇〜第十二篇)

編注 内田市五郎・植月恵一郎他

「第一篇〜第六篇」につづき、この有名な詩篇を詳細な注釈付きで解説。妖精と騎士が織りなす幻想的な物語を、現代語で読みこなす助けとなる入門書。

[英語語学教科書] A 5判並製二〇二頁 二〇〇〇円

Invitation à la Grammaire Française par K. Seto et Sh. Tanaka (フランス語をよむ)

瀬戸和子・田中成和

フランス語の基礎的な文法事項を簡潔に網羅した、仏語初級文法の決定版。必要以上の文法事項を省き、基礎のみに徹した、わかりやすい初級文法書。

[フランス語学教科書] A 5判並製七七頁 一五七五円
別売カセット・テープ(フランス・ドルヌ吹込み)一五〇〇円

芸術／美術、写真、絵本

美術史とその言説「ディスクール」

宮川淳

近代美術を再現性と造形性の絶えざる相剋と葛藤、そして表現概念の転換を求めている苦悶とみる著者が、印象派を中心とする近代画家たち(セザンヌ、スーラ、シニャック、ゴッホ、ルソー、ゴーギャン、モロー)の歩みを克明にたどる。

四六判四〇〇頁 三八〇〇円

紙片と眼差とのあいだに

宮川淳

《引用とは読むことなのだろうか、書くことなのだろうか》。引用について考えながら、近代的な意味における《芸術》と《主体》の概念を、そしてついには《われわれがそのなかで語りつづけてきた文脈そのもの》を問い直そうとする、著者の思考の極点。

四六判二八頁 一五〇〇円

三鷹天命反転住宅

荒川修作十マドリン・ギンズの死に抗する建築

三鷹の地に出現した極彩色の建築の全貌を多数のカラー図版と気鋭の批評家たちのテキストによって明かす。《私たちはいまだ能力の二〜三%しか活用できていない。人間の、生命としての能力を最大限に発揮させる建築、天命反転住宅は人類最大の革命である》(河本英夫)

B 4変判総一六八頁 五〇〇〇円

建築―宿命反転の場

荒川修作十マドリン・ギンズ 工藤順一十塚本明子訳

ダイアグラム絵画によって知られる国際的なアヴァンギャルド画家がついに建築へと向かった。岐阜県養老公園をはじめ世界各地で進行中の著者の建築プロジェクトの思想を、最先端のCGを用いて著者自らが明かす。

内容見本呈 B 4変判並製オールカラー一三三頁 六五〇〇円

生命の建築

荒川修作十藤井博巳

臨海副都心の住宅プロジェクトに果敢に挑み続ける根源的《建築家》荒川修作と、これまでプロブレマティックな建築作品を国内外に発表し続けてきた建築家、藤井博巳の、真の《建築革命》へ向けての白熱の対話。

A 5判並製一九八頁 二五〇〇円

藤井博巳に関するあるいは藤井博巳による七つの建築試論

藤井博巳

常にラディカルな思考を続ける建築家藤井の、これまでの建築プロジェクトをめぐるポートフォリオ。多数の建築写真、設計図、模型等の図版と、自身の論文と寄稿文により、建築の解体を目指すその思考の根幹が明らかになる。

B 4変判並製一八頁 三〇〇〇円

世界拡大計画

高松次郎

戦後美術の最も先端的な部分を代表する美術家の未完の思考の軌跡を二冊にまとめる。本書にはハイレッド・センター結成前夜に書かれた「不在体のために」に始まり、六〇年代の活動と並行して構想された「世界拡大計画」を中心とした理論的テキストを集成する。

内容見本呈 A 5判二八八頁 四〇〇〇円

不在への問い

高松次郎

セザンヌからハイレッド・センターまで、近現代の美術。同時代の美術、そして自作をめぐるテクスト……作家とその時代を新たに浮かびあがらせる批評とエッセイを収める。

内容見本呈 A 5判三五六頁 四五〇〇円

高松次郎 制作の軌跡

国立国際美術館編

「点」影」「遠近法」「単体」「複合体」「平面上の空間」「形」といったテーマにそって、絵画、版画、立体作品、写真、多数のドローイングを詳細に読み解くことによつて、言葉とものの関係を問い続けた高松次郎の思考の推移を探る。四〇〇点以上の作品をカラー図版で収録。

154 B 5変判並製二二三頁 三五〇〇円

高松次郎 言葉ともの

日本の現代美術 1961-72

光田由里

ハイレッド・センターのパフォーマンス、そして「影」の画家として戦後美術を駆け抜けた高松次郎。後期資本主義が終わりにさしかかった現在、へかつては存在したが今はすでに断絶してしまつた「現代美術」の本質を、高松次郎を通して考察する。図版多数。

110 A 5変判二七七頁 三〇〇〇円

高松次郎を読む

真武真喜子・神山亮子・沢山遼・野田吉郎・森啓輔編

四〇年にわたり「現代美術」を牽引しつづけた高松次郎の六〇年代の「点」影」「遠近法」のシリーズ、ハイレッド・センターのイベントから九〇年代の絵画作品まですべてを考察する。執筆〓針生一郎、中原佑介、李禹煥、菅木志雄、寺山修司、石子順造、川保正、東野芳明、高梨豊他

1412 A 5判二八二頁 四〇〇〇円

加納光於論

大岡信

銅版画から亜鉛板レリーフ、オブジェ、油彩へと異質な冒険を重ねる加納光於に捧げられた十篇の詩と散文。言葉に憑かれた詩人と物質に憑かれた画家の二十年に及ぶ稀有の共感と友情の美しい結晶。造本〓菊地信義。

A 5判二七頁十別丁カラー図版一六頁 二二〇〇円

瀧口修造 沈黙する球体

岩崎美弥子

前衛芸術の擁護者、詩人として知られる瀧口が生涯をかけて取り組んだ「詩的」な「実験」とは？「妖精の距離」「物質のまなざし」など、瀧口の詩的テクストからその表現衝動の根幹を見極めるテクスト読解の試み。造本〓加納光於。

四六判三二頁 二八〇〇円

ヨコ・オノ 人と作品

飯村隆彦

日本を代表する実験的な映像作家が、ジョン・レノンの夫人という以上に、ダイナミックな芸術家〓パフォーマンスとしてのオノ・ヨコの人と作品に鋭く迫る。レノンを交えた鼎談、オリジナル写真約一〇〇点、詳細年譜等をも付す。

四六判二九四頁 二二〇〇円

反覆する岡本太郎 あるいは「絵画のテロル」

北澤憲昭

前衛か？ 伝統主義者か？（岡本太郎）とは、誰だったのか。戦前の〈アセファル〉から〈3・11〉までをも貫く類稀なアーティストの思想と実践、そして作品の緻密な分析を通してその両義性を問い、昨今の〈岡本ブーム〉を葬送する挑発的作家論。

1211 四六判二二〇頁十別丁図版八頁 二五〇〇円

タイムコレクション

今井祝雄 構成・テキスト執筆〓大日方欣一

「真体」の作家として出発した今井の、さまざまな映像メディアを駆使して「時間」という不可視な存在をとらえようとした実験的作品、《RED LIGHT》《ビデオスナップ》《タイムコレクション》《時間の衣裳》などをとおして、「映像」と「時間」を考察する。

153 A 5判二六頁 三三〇〇円

彫刻の呼び声

峯村敏明

〈真の彫刻は、関係を破壊する実践からしか生まれないだろう。オブジェの世紀のただなかで彫刻をみつめつづけた批評家の彫刻論を集成する。ジャッドからロッソへ、そしてまだ見ぬ彫刻へ。〉

A 5判三〇五頁 四〇〇〇円

現代美術／パラダイム・ロスト

中村敬治

国立国際美術館に勤務しつづけた現代美術の批評の第一線にたつ著者がジャスパール・ジョーンズ、ウォーホルから荒川修作、李禹煥に至る内外二百余名の現代画家を論じつつ、パラダイムなき現代美術の混沌を鋭く撃つ。装幀〓森村泰昌。

A 5判四八九頁 五〇〇〇円

現代美術／パラダイム・ロストII

中村敬治

世紀末のカオスが世界的規模で加速度的な展開をみせた残酷な「失楽園」〓現代美術。一九七五―八七年を扱った前著に続き、八七―九七年にかけての現代美術の状況を、いわば定点観測した最も新しい美術批評。装幀〓森村泰昌。

A 5判四四三頁 五〇〇〇円

現代美術巷談

中村敬治

内外の現代美術、映像、メディア・アートから建築、文学、思想まで、犀利な切開、老練な縫合でつづる現代美術クロニクル（一九九七―二〇〇三年）、あるいは諧謔のすすめ（芸術）と〈アート〉のはざま、批評は生き残れるかな。装幀〓戸田ツトム。

A 5判並製三四九頁 四〇〇〇円

現代美術巷談 その後

中村敬治

パラダイムなき混沌の現代美術を静かな情熱で見続け、語り続けた著者の最後の言葉。彦坂尚嘉、栗原一成との鼎談、二〇〇四年の日記、画廊・美術館めぐりの自筆ノート等も収録。

A 5判並製二四四頁 二〇〇〇円

アート・ジャングル 主体から〈時空体〉へ

中村英樹

アート（美術／芸術）とは、離れて自己を見つめ、「未来の現在化」を企図する異空間の体験装置だ。モダン・アートに潜在するポストモダンの萌芽を読み解き、モダンとポストモダンの対立を越えて、今後の実践のための理論的根拠を問う。

四六判二六七頁 三〇〇〇円

生体から飛翔するアート

中村英樹

近代の遺産である「個人」という枠組みに秘められた視点システムを変換し、間知覚的メタ・セルフの確立をめざす、現代美術の果敢な営みを気鋭の批評家が鮮やかに読みとく！

A 5判二四八頁 三〇〇〇円

想起のかたち 記憶アートの歴史意識

香川檀

ナチズム／ホロコーストという負の記憶を作品に据えイメーজの《想起》を促す《後から生まれた世》の四人の美術家たち——ボルタンスキー、ゲルツ、ホルン、ジグールドソンの作品を通して美術家たちによる《歴史の表象》への扉を開く。 1211 A5判三五六頁十別丁カラー図版二頁 四五〇〇円

発見する力 現代美術の時空間

黒岩恭介

《さまざまな時間に関与しながらも、作品は作品であるかぎり、時間に抵抗し永遠を目指さざるをえない》。加納光於、河原温、桑山忠明ら、戦後美術史に異彩を放つアーティストたちの新たな一面を現場から照射し、視覚芸術の水脈と諸相を問う鮮烈な美術批評。 102 A5判二八二頁 四〇〇〇円

時の晶相 1960-70年代の芸術家たちとの私的交友

馬場駿吉

瀧口修造、武満徹、瀧澤龍彦、土方巽、寺山修司……芸術の最前線で内なる想像力を爆発させた《カオスの驍将たち》と、名古屋にあって現代美術への熱い批評を書きつづける著者との数十年に及ぶ貴重な交友録。 四六判二六九頁 二五〇〇円

スクール・アート 現代美術が開示する学校・教育・社会

中川素子

《子どもたち》と《教育》の現状を鋭く、ときにユモラスに表現した今日の美術作品を読みとるときながら、学校・教育・社会のあるべき姿をさぐる。登場する主な美術家たち＝浅田政志、沢田知子、石田徹也、豊島康子、島田寛昭、河口龍夫、みかんぐみ、山本高之他 127 A5判二五五頁十別丁図版一六頁 二八〇〇円

日本のダダ 1920-1970

白川昌生編 テクスト＝阿部良雄・中原佑介・針生一郎他

美術の《制度》への全面的反抗を《ダダ》と名づけるならば、日本においてもその歴史は短くはない。大正年間の《マウオ》から六〇年代の前衛群に至る運動を、三百余葉の貴重な写真と関係者の証言によって検証する。 A4判五九頁クロス装製本 七〇〇〇円／並製本 三八〇〇円

白川昌生 ダダ、ダダ、ダ

アーツ前橋編

前橋で活動する白川昌生の初期作品から最新作「駅家の木馬祭り」「プラットフォーム計画」「Tomoko」までを網羅したアーツ前橋での大回顧展を機に編まれた充実したカタログ。白川の批評家としての処女作、「日本現代美術序説——その端的覚え書」を併録。 143 A4判並製二〇〇頁 二五〇〇円

フィールド・キャラバン計画へ 白川昌生 2000-2007

松浦寿夫・北澤憲昭・稲賀繁美・白川昌生他

《美術》制度のダダ的破壊者にして、地域の歴史—文化の活性化をめざす《場所・群馬》の果敢なオルガナイザー、そして謎めいた構成主義的作品の作者が到達した《フィールド・キャラバン計画》の全貌と、白川の出発から現在までを克明に跡づける。 A5判一七六頁十別丁図版六頁＋DVD付 二五〇〇円

村山知義とクルト・シュヴィッターズ

マルク・ダシー＋松浦寿夫＋白川昌生＋塚原史十＋田中純

《ダダはいったい何であろうか。その根本的な基準は美的なものではなく、《マウオ》が言う三つの言葉に表されている。過激さ、創造、革命である。》近代日本最大のアヴァンギャルド村山とダダの異端児シュヴィッターズからダダへ迫る。 A5判一八五頁十別丁図版三頁 二五〇〇円

ブック・アートの世界 絵本からインスタレーションまで

中川素子＋坂本満編

絵本からブック・オブジェ、インスタレーションまで、《本》の概念を揺るがし破砕する三十二の驚くべき作品によって、《本》と《美術》の新しい世界へと誘う。図版多数。 A5判二六五頁 三〇〇〇円

気配、その美

千種さつき

Creativity of Tat Now. ニューヨーク、パリ、ローマ、東京……世界各地で友情の《花》が開く。Tatavis SATSUKIのピュアな魂が放つ《美》の茶会をすべて。 1410 A5判並製オールカラー一三三頁 二八〇〇円

美術・記憶・生

白川昌生

《公共の美術》とは何か? 《美術》の《公共性》とは何か? 民衆に《歴史》を忘却させ、民衆の《記憶》を抑圧し、抹殺する美術ではなく、新たな《想起》、新たな《治癒》、新たな《覚醒》のための美術を求めて苦闘する美術家の果敢な思考の歩み。 四六判二六〇頁 二五〇〇円

美術・マイノリティ・実践 もうひとつの公共圏を求めて

白川昌生

新しい美術は新しい公共性、新しい社会、新しい政治の探求と同時的ではない。クラストル、ブルデュー、スピノザ等によりつつ、《ホスピタリティ》としての芸術を求めて苦闘する現代美術家による《近代—美術》批判。 四六判二五八頁 二五〇〇円

絵を書く

マリアンヌ・シモンⅡ及川編

画家、作家、作家にして画家……彼らが言語とイメージを通して、あるいはその狭間で生みだしたさまざまな言語的、絵画的表象を読みとるとき、《創造》の核心に迫る。執筆ⅡA・M・クリスタン、A・アルペール・ビロ、E・ペレ、千葉文夫、桑田光平、寺田寅彦、塚本昌則他 126 A5判二七七頁 四〇〇〇円

詩とイメージ マラルメ以降のテクストとイメージ

マリアンヌ・シモンⅡ及川編

書物／挿絵／タイポグラフィ／視覚詩において記念碑的な作品を生み出したマラルメの影響のもと、《詩とイメージ》の表現はどのように多様化してきたのか。日仏の研究者たちがその本質を究明する。執筆Ⅱ三浦篤十鈴木雅雄十千葉文夫＋塚本昌則他 156 A5判二四六頁 四〇〇〇円

美術館という幻想 儀礼と権力

キャロル・ダンカン 川口幸也訳

われわれはなぜ美術館へ行くのか。そもそも美術館とは何のためにあるのか。教養の証明か、成金や権力の誇示か、あるいは植民地主義の発露なのか。近代以降の美術館の成立と現在を、《儀礼》と《権力》をキーワードに、最も挑発的かつ論争的に論じる。 117 A5判三三五頁 三八〇〇円

展示の政治学

川口幸也編

博物館、美術館、博覧会、あるいは日常生活のなかで、《見せること》と《見ること》は、どのような意味をまとうのか? シャンネルや研究領域を越えて多様な視座から《展示》という擬制を解体し、《見せる》という共同幻想の再考を促す出色の共同研究。 A5判四〇〇頁 四八〇〇円

余白は芸術に関係がない——が、ひとつのフォルムである。

オクヤナオミ

マルセル・デュシャンとジョルジュ・ペレックのあいだで、絵画とオブジェと言語遊戯を経回りつづける特異なアーティストが、〈五月革命〉前後のバリの思い出と自らの絵画観、芸術観を率直に語る。

A 5判二六頁 三〇〇〇円

対角線上の異邦人 ヒトデ方陣とアダム方陣

オクヤナオミ

《芸術と数学の創造的きずなは構造の探求だ——》。数学的知性を源泉にして視覚芸術作品を制作する美術家が、創作活動のために生み出した独自のルール、方陣のもとに綴った芸術をめぐる思考の軌跡。

A 5判一八〇頁 二五〇〇円

反絵、触れる、けだもののフラボン 見ること

福山知佐子

大野一雄、中川幸夫、若林奮との出会い、花や動物たちとの全神経細胞を震わせる共振、これら記述不可能な体験の深みに向けて言葉を酷使する、けだものの息による絵画論（書いても描いても尽くせないのちの豊穣に焦がれて生きる……）（谷川俊太郎）。

1910 四六判一七二頁 二二〇〇円

となり町の寒山

菅沼荘二郎

ニューヨークからとなり町へ、原始美術から現代アートへと自在に往還する画家が従来のテーマである《寒山拾得》を禅とのかかわりで語りながら、混沌とした現代美術の行方を考える。

0912 A 5判並製一五〇頁 二〇〇〇円

ロシア・アヴァンギャルド小百科

タチヤナ・コトヴィチ 桑野隆監訳

《芸術の革命》をめざして、美術・建築・デザイン・演劇・音楽・詩等、芸術の全領域を横断しつつ激動の二十世紀を駆け抜けた前衛芸術運動の全貌を詳述する本邦初の事典。

A 5判五二五頁 八〇〇〇円

ロシア・アヴァンギャルド遊泳

大石雅彦

今世紀初頭のロシアで社会革命と相俟つ形で勃発した芸術革命。ロシア・アヴァンギャルド運動。全分野の芸術への襲撃と破壊を敢行しながらストーリーニズムに抹殺されたこの運動を今日の問題として捉え返す。第二回木村彰一賞受賞。

四六判三六四頁 三三〇〇円

彼我等位

大石雅彦

マレーヴィチ、ヴェルトフ、ソクーロフ、平戸廉吉、神原泰、稲垣足穂、江戸川乱歩……。ジャンルやメディアを超えて、時代に先駆けた二十世紀の表現者たち。日本—ロシアを往還しながら、〈前衛〉を駆け抜けた彼らの前史／後史を精緻に読み解く。

四六判三二八頁 三五〇〇円

ロシア・アヴァンギャルドの映画と演劇

岩本憲児

二人の革命的映像作家、ヴェルトフとエイゼンシュタインを中心に、一九二〇年代の〈ロシア・アヴァンギャルド〉運動が生み出した映画、演劇、写真、ポスターなどの多くの作品を細密に検証した、気鋭の映画学者による斬新な論考集。

四六判三五〇頁 三〇〇〇円

ロトチェンコとソヴェト文化の建設

河村彩

視覚表現を刷新してきたロトチェンコの抽象絵画やフォト・ルポルタージュなどを分析しながら、同時代の芸術家・批評家の理論／実践との関係をたどり、アートを超えた社会主義社会の生活文化の創造の〈夢〉を明らかにする。

1411 A 5判三七頁十別丁カラー図版八頁 六〇〇〇円

ロシア・アヴァンギャルドの世紀 構成×事実×記録

江村公

ロシア革命から全体主義への過渡期を生きたアレクサンドル・ロトチェンコの、絵画からモンタージュ写真へといたる軌跡をたどりつつ、今日の美術と文化への根底的な批判を企てる。

111 A 5判二六七頁 四〇〇〇円

最後の絵画

ニコライ・トラブリーキン 江村公訳

ロトチェンコのモノクローム絵画を「最後の絵画」と呼び、ロシア・アヴァンギャルドの、構成主義から生産主義への転換を決定づけた芸術理論家の二論文を収録し、アヴァンギャルド芸術の核心に迫る。

A 5判三四頁 三〇〇〇円

全体主義芸術

イーゴリ・コロムシトク 貝沢哉訳

独裁者たちの嗜好あるいは民族文化的伝統の枠組みを超え、あらゆる全体主義国家に共通して出現したスタイルとそのメカニズムを、ヒットラー、ムッソリーニ、スターリン、毛沢東の統治下の事例を横断しながら検証する。闘争とテロ、そして沈黙の二十世紀芸術史。

A 5判六〇二頁 七〇〇〇円

イタリア・ファシズムの芸術政治

鯖江秀樹

〈ファシズムの芸術〉とは何か？ 政治権力による桎梏のもと、グラムシ、ゴッティエリの卓抜な批評によって浮上するモダン・アートの可能性／不可能性を実例を通して検証する。第三回表象文化論学会賞奨励賞受賞。

116 A 5判二七六頁 四〇〇〇円

シュルレアリスム、あるいは作動するエングラマ

ジャクリーナ・シエノウー|| ジャンドロン 齊藤哲也編

アヴァンギャルドからも、モダニズムからも、逸脱してみせたシュルレアリスムは何をもって我々を誘惑し挑発し続けているのだろうか。現実と表象が〈癡癡的〉に邂逅し、常に謎を作動させるディスクールを巧緻に読み解く、シュルレアリスム研究の泰斗の足跡。

154 A 5判三六八頁 五〇〇〇円

マルセル・デュシャン論

オクタビオ・パス 宮川淳・柳瀬尚紀訳

九〇年度のノーベル文学賞をうけたメキシコの詩人が、今世紀の最も謎めいた画家の生涯と作品を辿りつつ、今日における《絵画》の在り方に、そして断末魔の《近代》というこの時代そのものに根底的な転換を迫る。

四六判三三頁十別丁図版八頁 一五〇〇円

マン・レイとの対話

ピエール・ブルジャッド 松田憲次郎・十平出和子訳

シュルレアリスム写真の代表者にして、絵画、版画、映画等の既成のジャンルを常に挑発し、横断し続けた米国生まれの芸術家が、その晩年にフランス人作家を相手に、自らの人生と作品について率直に語ったエスプリ溢れる貴重な対話。

銀紙書房との共同出版 四六判一九五頁 二〇〇〇円

シュルレアリスムと《手》

松田和子

シュルレアリスム芸術において頻出する《手》のイメージについて、美術史を踏まえつつ、精神分析学、身体論、文化史などのさまざまな視点から総合的に考察し、二五〇点以上にのぼる図版とともに解き明かす、初の本格的論考。

A5判四七五頁 七〇〇〇円

イヴ・タンギーアーチの増殖

長尾天

なぜ イヴ・タンギーのイメージはこれほどまでに語りにくいのだろうか？ デ・キリコ、心霊学、バイオモーフイズム、エスと集合的無意識、ケイ・セイジ……シュルレアリスム絵画の極限がもつ構造を説き明かす。

1412 A5判三三三頁十別丁カラー図版八頁 五〇〇〇円

クリムトとピカソ、一九〇七年 裸体と規範

ジャン・クレール 松浦寿夫訳

規範と逸脱、秩序と冒険。その人生においても、美術史の言説においても、決して相まみえることのなかった二人の画家の作品を大胆に横断しつつ、二十世紀芸術が孕まざるを得なかった矛盾と葛藤を精緻に炙り出す。

四六判一四四頁 二〇〇〇円

ジョン・ハートフィールド

ヴァイラント・ヘルツフェルド 針生一郎訳

写真を切り裂け！ イメージの収集／操作／破壊によって、芸術／帝国／大衆に挑んだ、フォトモンタージュの創始者の生涯と作品を実弟が克明に描く。《モンタージュ》という方法は二十世紀芸術の最大の発明だ》(プロッホ)。図版多数。

A5判一九三頁 三〇〇〇円

ピカソと闘牛

須藤哲生

この二十世紀芸術の巨人の生涯と作品を貫く《闘牛》のテーマのなかにピカソ芸術の秘められた鍵を探求する。現代フランス文学の泰斗による鮮烈なピカソ論。《ピカソは闘牛士にして雄牛なのだ》(コクトー)。収録図版、八十六点。

四六判三三七頁 三五〇〇円

クリスチャン・ボルタンスキーの可能な人生

ボルタンスキー十カトリヌ・グルニエ 佐藤京子訳

今日のフランス美術の代表者が気鋭の美術批評家を相手に自らの《生》と《作品》の全てを語り下ろす。《かつてクリスチャン・ボルタンスキーという人間がいて、作品は残っていないけれどどいろなる問いを投げかけた人間、物語を語った人間がいたという……》

107 A5判三三七頁 四五〇〇円

パウル・クレールとシュルレアリスム

宮下誠

一九二五年、パリにはじまる「クレール＝シュルレアリスト」像の起源と伝播の実態を緻密に描き出し、美術批評という言説が、いかに政治的、党派的装置となりうるかを浮き彫りにする。スリリングなクレール受容史研究の記念碑的大著。図版多数。

A5判六三三頁 七〇〇〇円

クリスチャン・ボルタンスキー 死者のモノメント

湯沢英彦

写真・古着のインスタレーションによって《名もなき者たち》の記憶の可能性を問いつづけるフランスの現代美術家のデビューから現在までの軌跡を追う、《忘却の時代》の新たなモノメント論。収録図版、七十六点。第十四回吉田秀和賞受賞。

A5判三三八頁 四五〇〇円

レメデイオス・バロ 絵画のエクリチュール・フェミニン

カトリヌ・ガルシア 湯原かの子訳

人間として芸術家として女性であるということは何なのかという根源的問い。シュルレアリスムの実験的手法、秘教思想に学びつつ、死と再生、人間と世界の宇宙的循環を、画布の上で自由に織りなすバロの独創的な幻想世界を、女性性による創造の秘密から探究する。147 A5判二六五頁十別丁カラー図版八頁 四〇〇〇円

実践としての芸術

アントニ・タピエス 田澤耕訳

フランコ独裁の抑圧に苦悶したカタルーニャにあって、ピカソとミロの、そしてダダとシュルレアリスムの衣鉢をつぐ現代画家が、芸術と社会の根底的な変革をめざして書きついだ戦闘的現代美術論。

四六判二八九頁 三〇〇〇円

cameraChimera [カメラ・キメラ]

オノデラユキ作品集 [テキスト] 前田英樹

カメラのメカニズム＝身体性を絶えず挑発しながら、現代アートと写真の境界線を超え軽やかに活動し続ける写真家待望の作品集。代表作「古着のポトリート」を初め、一九九四～二〇一一年までに発表された九シリーズを収録。第二十八回木村伊兵衛賞受賞。

A4変判二八八頁 五〇〇〇円

cameraChimera (特装版)

オノデラユキ作品集 [テキスト] 前田英樹

実験的な手法を用いた先鋭的な写真表現の企てによって、写真界・美術界から注目を集め、国際的に活躍する写真家初の作品集刊行を記念する特装版。

内容見本呈 限定一〇〇部 / 作家サイン＋エディションナンバー入りオリジナルプリント (300 × 205mm) 一点 / A4変判クロス装クロス箱入二八頁 五〇〇〇〇円

まなざしに触れる

鷹野隆大(写真) + 新城郁夫(文)

主に男性ヌードを撮ることでジェンダーを問う写真家と、その写真のもつ社会へのエロスの侵犯を論じるジェンダー / 日本現代文学研究者によるコラボレーション。二人の著者のまなざしはどのように交わり、どのように接するののか。鷹野の写真作品七八点を収録。

149 A5判一四九頁 三〇〇〇円

まなざしに触れる(特装版)

鷹野隆大(写真) + 新城郁夫(文)

木村伊兵衛賞受賞の写真家による七八点の写真と、ジェンダー / 文学研究者による鷹野隆大論を収録する作品集の刊行を記念する特装版。

149 A5判クロス装 クロス貼函入 / 一四九頁 / オリジナルプリント二葉＋サイン＋エディションナンバー入り / 収録作品七八点 / 限定三〇部 / 八〇〇〇〇円

印象主義運動

レオニード・アンドレーエフ 貝沢哉訳

《印象主義》を単に美術の一流派としてではなく、絵画・文学・音楽等の諸ジャンルを包括するものとして捉え直し、自然主義から象徴派までの世紀末芸術の隠された内的原理を剔出し、印象主義研究に新しい地平をひらく。

四六判二七五頁 二八〇〇円

愛の女神 アプロディテの姿を追って

ジェフリー・グリグスン 沓掛良彦 + 榎本武文訳

一般には「ヴィーナス」の名で知られる古代異教の女神アプロディテ。先史時代から古代ギリシアを経て近代芸術の中にまで生き延びているこの女神の姿容と系譜を古典文学・神話・美術の探査を通じてたおやかに描く。

A5判三三二頁十別丁図版一六頁 三五〇〇円

落葉伽藍

武内理能作品集

街路で、公園で、都市のはずれの黄昏時の鈍色の河のほとりで拾い上げられた植物界のフラグメントによる「紋章学」。この微小で精巧で厳肅な構造物たち。十年間にわたって「蒐集」された五十三葉の作品が開く写真表現の新しい可能性。
B5 変判貼面入六四頁 三三〇〇円

フランス12カ月の贈り物

パリ郊外シユヴルーズのママ

ム・コリタ・ジェロニミから 文||武田尚子/写真||村松史郎
復活祭、万聖節、ノエル……ヨーロッパの文化に息づく歳時記に合わせて、家族や友人たちに手作りの贈り物をする——人生を楽しむ、美しく生活することにこだわるフランス人の一年を、四季折々のカリタ家の風景を収めた多数の写真とともに紹介する。
B5判オールカラー九二頁 二八〇〇円

諷刺画家グランヴィル

テキストとイメージの19世紀

野村正人
十九世紀の視覚文化を体現した諷刺画家グランヴィル。観相学、骨相学の影響下、獣頭人間を使って政治や社会風俗を諷刺した肖像画や風俗画、挿絵等の世界を読み解き、出版・文化的観点から考察する。第六十五回芸術選奨文部科学大臣賞受賞。
145 A5判四一八頁十別丁図版八頁 六〇〇〇円

絵本の子どもたち

十四人の絵本作家の世界

寺村摩耶子
絵本を舞台に、個性あふれる美しい作品をつくりつづける絵本作家たち。圧倒的な輝きをはなつクリエイターたちの魅力を、二百点以上の絵本をとおして語る、注目の絵本作家論。
104 A5判三二四頁十別丁図版八頁 三五〇〇円

オテサーネク

エヴァ・シュヴァンクマイエロヴァー 矢川澄子訳

チェコで活躍するアニメーション作家ヤン・シュヴァンクマイエルの「オテサーネク」の劇中絵本が、映画を飛び出し実際の絵本になった。グリムよりも恐ろしいチェコの民話を美術監督を務めたエヴァのシュールで幻想味溢れるイメージで読む。
A4判オールカラー三〇頁 一六〇〇円

海辺のネコ

A・ウサキエイチ作 A・オチコ絵 渡辺克義訳

あたたかな春の日。浜辺で、左の耳に白いブチのある、真つ黒な子ネコが砂だらけになっていました。このかわい子ネコはどこからやってきたのでしょうか？ ポーランドで活躍中の絵本作家が贈る、心温まる八篇の小さな小さな物語。
115 B5判オールカラー六三頁 一八〇〇円

ドングリトプスとマックロサウルス

中川淳

鉛筆でこすりだした真つ黒なほらあな。そこにいたのは？ ぼくといぬのブッチ、そして身近な素材から生まれたカラージュのドングリトプス、フロッタージュのマックロサウルスとの楽しい冒険の一日をえがいた絵本。
126 A4判オールカラー三二頁 一五〇〇円

子象のエルフィー

昭和女子大学短期大学部文化創造学科

森で助けたおじいさんサルからもらった、何でも願いがかなうという三つの魔法の種。それを手にしたエルフィーは……。森のみんなを幸せにした、心優しい象のお話
A4判オールカラー四〇頁 二〇〇〇円

音楽

サイレンス

ジョン・ケージ 柿沼敏江訳

二十世紀音楽最大の革命家が《コラージュ》的手法を縦横無尽に駆使した破格のテキスト形式の中で、自らの芸術哲学そしてその作品と技法の全てを語り尽くす。著者の処女作にして現代音楽を考えるための最も重要な著作。
A5判四五六頁 四〇〇〇円

ジョン・ケージ伝

新たな挑戦の軌跡

ケネス・シルヴァーマン 柿沼敏江訳
キノコ博士、『易经』で作曲した男、ピアノにハンマーを投げ込んで弾いた男……ジョン・ケージとはいったい誰か？ 沈黙も音楽だとし、音楽の概念を一変させてしまった、二十世紀を代表する音楽家の、本邦初の伝記。坂本龍一氏推薦！ 論創社との共同出版。
167 A5判五〇六頁 五八〇〇円

音楽のピクニック

小杉武久 序文||ナム・ジョン・パイク

ケージ等とともにカニングハム舞踊団の専属音楽家として、また現代日本の最も多岐的な作曲/演奏家として知られる著者が、制度的音楽への吊鐘を鳴らし、無名の《音》と《波動》の存在へ向けて激しく越境する未開の現代音楽論集。
四六判二六六頁 二五〇〇円

実験音楽

マイケル・ナイマン 椎名亮輔訳

今日のイギリス現代音楽の第一人者が、ケージを嚆矢とする《実験音楽》の歴史を、サティ等の前史から、フルクサス派、ライヴ・エレクトロニック・ミュージック、ミニマル派に至るまで、多数の図版を駆使して解説する唯一の通史。
四六判二二六頁 三〇〇〇円

ミュージッキング

音楽は《行為》である

クリストファー・スモール 野沢豊一 西島千尋訳
音楽とは作品やモノのことではない。行為であり、実践なのだ。《音楽すること》の担い手を演奏家と聴衆に限定せず、広く《関係》として捉えることで既成概念を根底から覆し、《音の現場》へといざなう。音楽を愛するすべての人の必読書。
118 四六判四三六頁 四〇〇〇円

ミュージック・アズ・ソーシヤルライフ

歌い踊ること

をめぐる政治 トマス・トウリノ 野澤豊一 西島千尋訳
音楽家であり、大学で民族学を講ずる教育者としても名高い著者が、ペルー、ジンバブエ、アメリカでのフィールドワークで得た経験をもとに、パースやペイトソンなどの理論を用いながら、《音楽》の社会性||政治性を鋭く分析する、音楽民族学の理論的入門書。
158 A5判四四一頁十CD付 六〇〇〇円

音楽をひらく

アート・ケア・文化のトリロジー

なぜ私たちは《音楽》から《生きるよろこび》を得るのか。現代の多文化社会で、音楽はいかにして他者理解を可能にするのか。音楽を《生きるのびるための叡智》として再発見し、《実践としての音楽》を問う。
136 四六判二五〇頁 三〇〇〇円

音の海

デイヴィッド・トウープ 佐々木直子訳

一八八九年、ドビュッシューはジャワ音楽に魅せられた。そしてそれ以降、音楽は異文化、自然、環境の放つ音と対峙しつつ大きく変容してゆく。二十世紀音楽の実験的潮流を克明に追う。

四六判三九三頁 三五〇〇円

現代音楽のポリテイクス

ウォルフ、ノーノ、エロワフ、グロポカール、近藤譲他 小林康夫編

音楽、とりわけ現代音楽は、一体何のために、誰のためにあるのか？ 現代音楽のカオスの中から鋭く政治化した（あるいはしなかった）五人の第一線作曲家が、今日の社会における音楽の意味を問い、自らの方法論を語る。

四六判二〇九頁 二〇〇〇円

第三帝国と音楽

明石政紀

ナチスは、どのようにしてドイツ音楽界を掌握していったのか。ナチスは音楽のいかなる「効用」に期待したのか。膨大な資料をもとに、ナチスと音楽の錯綜した関係に様々な角度から光をあてる新鋭の書き下ろし芸術/政治論。

四六判二三三頁 二五〇〇円

ドイツのロック音楽

明石政紀

九〇年代のテクノ・ブレイク以降、その源泉として再評価が始まったジャーマン・ロックの歴史を、クラフトワーク、カン、ファウストを中心に、鋭利な問題設定と徹底した調査によって捉え直す本邦初のドイツ・ロック史！

四六判二〇〇頁 二五〇〇円

ポピュラー音楽理論入門

キース・ニーガス 安田昌弘訳

アドルノの大衆文化批判の検討から、音楽生産と音楽消費の相互関係、そしてそれをつなぐ媒介（音楽産業、活字メディア、録音媒体、テレビ、ラジオ、映画、インターネット等）の問題に着目し、今日のポピュラー音楽研究の到達点を明らかにする。

四六判並製三九八頁 三五〇〇円

ファイル・アンダー・ポピュラー

クリス・カトラー 小林善美訳

ヘンリー・カウ等のバンドで革新的なロックを実践する一方、RIO、レコメンドッド・レコース等のオーガナイザーとしても知られる著者が、音楽創造の現場体験を踏まえた上での厳密な思考によって、ポピュラー音楽の意味を問う。

四六判三〇八頁 三〇〇〇円

ソニク・エティク

陣野俊史

パンク以降の、八〇―九〇年代のポップス（ハウス、テクノ、グランジ）の歴史Ⅱ運動を、ヴァレリーの身体論を武器に、ポスト構造主義的地平から解明し、ハウス以後の世紀末ポップスの相貌をも予見する新鋭の書下し本格的ロック論。

四六判二三三頁 二二〇〇円

クラフトワーク

パスカル・ビュッシー 明石政紀訳

テクノ・ポップの元祖というだけでなく、ニューウェイヴ、ヒップ・ホップ、ハウス等の、その後の新しい音楽の動向にも多大な影響を与え続けるドイツのロボット・ポップ・ユニットの二十余年の足跡を追う初の評伝。

四六判二八〇頁十別丁図版八頁 二八〇〇円

ブライアン・イーノ

エリック・タム 小山景子訳

初期ロキシ・ミュージックでの活動、R・フリップとの共同作業、環境音楽《アソビエント》の案出等、ロックから現代音楽に至る広い視野で多様な活動を繰り広げるこの音楽界のトリック・スターの全貌を気鋭の音楽学者が明かす。

四六判三五二頁 三〇〇〇円

ニルヴァーナ、ネヴァー・フェイド・アウェイ

デイヴ・トンプソン 小山景子訳

ニルヴァーナの世界的大ブレイクによって一躍スターダムの頂点に上り詰めながら、突如、謎の自殺を遂げた悲劇のロックシンガー、カート・コバーン。バンド結成から突然の終焉に至るコバーンの全活動を再現する決定版伝記。

四六判並製七四頁 一五〇〇円

キャプテン・ビーフハート／ルナ・ノーツ

ズート・ホン・ロロ 小山景子訳

フランク・ザッパの盟友にして、最もカルトな音楽家、キャプテン・ビーフハートの唯一の評伝。名盤『トラウトマスク・レプリカ』でマジック・バンドのギタリストだったズート・ホン・ロロが語り尽くす奇書。

四六判二九三頁 二八〇〇円

XTC ソング・ストーリーズ

XTC十ネヴィル・フアーマー 藤本成昌訳

メンバー自身が自らの曲やアルバムについて語り、本作りにも全面的に参加した公認XTCストーリー。バンド結成から最新作『WASH STAR』までの全アルバム、全曲についてのコメント、未発表の作曲構想ノート、イラスト、写真も多数収録。

A5判四七三頁 三五〇〇円

チャーリー・パーカー モダン・ジャズを創った男

カール・ヴォイデック 岸本礼美訳

モダン・ジャズの巨匠チャーリー・パーカーの波乱に満ちた生涯を辿るとともに、詳細な分析によってその革新的な音楽のすべてを明らかにする、最新の本格的評伝。日本版独自のディスコグラフィを付す。

A5判三〇八頁 三〇〇〇円

ブエナ・ビスタ・ソシアル・クラブとキューバ音楽

大須賀猛編

ヴィム・ヴェンダース監督のドキュメンタリー映画『ブエナ・ビスタ・ソシアル・クラブ』。映画に登場するキューバ音楽界の伝説のミュージシャンたちの豊富な写真とインタビュー、詳しい解説によって、古き良きキューバ音楽界をガイドする。

A5変判一六四頁 二二〇〇円

クレイジー・ダイヤモンド／シド・バレット

マイク・ワトキンソン他 小山景子訳

ピンク・フロイドの初期中心メンバーにして音楽的リーダーでありながら、ファーストアルバム発表後に脱退してしまった伝説のミュージシャン、シド・バレットの生涯をたどる決定版評伝。親族へのインタビューや貴重な写真も多数収録。装幀＝常盤響。

四六判二七五頁 二二〇〇円

映画、演劇

映画における「語り」について 七人の映画作家の主題によるカプリッチオ

浅沼圭司

レネ、キューブリック、ゴダール、ヴィスコンティなどの作品における映画の叙述（語り）の問題の美学的、物語論的な深化によって到達されるメタ・シネマの地平。映画美学の第一人者が奏でる、二十世紀映画に捧ぐ七篇の綺想曲。

A5判二九二頁 四〇〇〇円

ロベール・ブレソン研究 シネマの否定

浅沼圭司

映画における「視覚的なもの」と「聴覚的なもの」の関係についてもっとも意識的な映画作家の、「抵抗」「すり」等、主要四作品をめぐり、映画理論のみならず、美学／芸術哲学の観点からの詳細かつ徹底的な解説の試み。

四六判四〇〇頁 四〇〇〇円

パリⅡ東京 映画日記

飯村隆彦

日本の生んだ国際的な実験映画作家が、自らの極めてコンセプチュアルな作品を携えて、ニューヨーク、ベルリン、パリと移り住んだこの十数年間の思考と行動を、日付のない日記もしくは日記風エッセイによって総括する。

四六判三二二頁 二五〇〇円

黒沢清と〈断続〉の映画

川崎公平

世界の映画シーンを震撼させてきた奇才・黒沢清。『CORE』以降の六つの作品を解体・再構築しながら、断絶と接続の二重性＝〈断続〉というキーワードによって、黒沢映画の創作の核心に迫る初の本格的黒沢清論。

141頁 A5判三七二頁 五〇〇〇円

映画的最前線 1988-1993

佐々木敦

映画を撮ること、そして映画について書くことはまさしく戦争だ。気鋭の映画批評家が八八年から九三年に至る映画の現在を《闘争としての映画》の観点から鋭く撃つ。映画の世紀末にむけて新世代の批評家が放つ《闘争批評》宣言。

四六判並製二六九頁 二二〇〇円

フィルム・スタディーズ 社会的実践としての映画

グラハム・ターナー 松田憲次郎訳

映画産業の勃興から映画理論の成立、そして今日の映画理論の種々相とその展開までを克明にたどる映画の《カルチュラル・スタディーズ》。歴史が浅いとはいえずすでに広大な学問領域となっている。フィルム・スタディーズへの最良の入門書。

124頁 A5判二七七頁 二八〇〇円

ヌーヴェル・ヴァーグの全体像

ミシェル・マリ 矢橋透訳

映画史上未曾有の大変動＝革命、《ヌーヴェル・ヴァーグ》の実態とはいかなるものだったのか？ 時代背景、経済状況、撮影技術、美学、監督、俳優・女優……さまざまな側面からこの映画革命の真相／深層に迫る、最良の概説書。

141頁 四六判二八〇頁 二八〇〇円

フランソワ・トリュフォーの映画

アネット・インスドーフ 和泉涼一・二瓶恵訳

トリュフォー映画の基調をなすテーマとスタイルはなにか？ 初期の作品から自伝的なドワネル・シリーズ、そして晩年の傑作『終電車』まで、師と仰ぐヒッチコック／ルノワールとの比較を通してトリュフォー映画の魅力を残すことなく論じるファン必読の書。
132 四六判五〇四頁 四八〇〇円

トリュフォーの映画術

アヌヌ・ジラン編 和泉涼一・二瓶恵訳

膨大なインタビュから浮かび上がる、映画を愛し映画に愛された、《ヌーヴェル・ヴァーグ》の映画作家の感動的な姿。トリュフォーの全作品についての、作家自身の発言を作品別に網羅した決定版インタビュ集。
A5判五〇〇頁 五〇〇〇円

タルコフスキイの映画術

アンドレイ・タルコフスキイ 扇千恵訳

世紀を超え、国家を超え、いまなお観客の魂を魅了する映像作家が、映画に対する情熱、そして作劇、演出の実際に行き届いたまでを肉声で語り尽したソ連時代の貴重な映画講義録。
A5判二二頁 二五〇〇円

キエシロフスキ映画の全貌

マレク・ハルトフ 吉田はるみ十渡辺克義訳

ポーランド時代のドキュメンタリー『ワツチの街から』『初恋』から、国際的声価を得た『デカログ』『ふたりのペロニカ』『トリコロル』三部作、そして没後、後継者たちによって作られた『ヘヴン』『美しき運命の傷痕』まで、鬼才の全作品を読み解く初の本格的評伝『作品論』。A5判三二〇頁 三〇〇〇円

ふたりのキエシロフスキ

アネット・インスドーフ 和久本みさ子十渡辺克義訳

『トリコロル』三部作『ふたりのペロニカ』『デカログ』をはじめ、美と愛と輝きにみちた、キエシロフスキの多彩な映像世界が甦る。キエシロフスキ映画をこよなく愛する著者が『ダブル・ライフ／セカンド・チャンス』をキーワードに、天逝した名匠の全体像をあざやかに解明する。
A5判三〇四頁 三〇〇〇円

『フリークス』を撮った男

D・J・スカル、E・サヴァダ 遠藤徹他訳

映画史に屹立する怪作『フリークス』。この禁断の映画を製作するにいたる、監督トッド・ブラウニングの数奇な人生と、公開時の大騒動、そしてその後の悲劇的な結末……恐怖と怪奇に魅せられた映画監督の全貌が今、蘇る。
A5判二七頁 二八〇〇円

ラース・フォン・トリアー ステイグ・ビョークマンとの対話

オスターグレン晴子訳

『奇跡の海』で世界を感動の渦に巻き込み、ビョーク主演の新作『ダンス・イン・ザ・ダーク』によってカンヌ映画祭パルムドールを受賞したデンマークの鬼才、トリアーが初めて明かす、みずからの作品と映画製作の秘密。
A5変判並製三四四頁 二六〇〇円

ジーン・セバーグ

ギャリー・マッキー 石崎一樹訳

ジャン・リュック・ゴダール監督の『勝手にしやがれ』で、いまも観客のこころをとらえて離さない孤高の女優の生涯を暗転させたのは、FBIの謀略だった……。謎の死を遂げた稀代の女優の実像を関係者への取材や膨大な資料から浮かびあがらせる決定版評伝。
113 四六判並製四四九頁 三五〇〇円

FBI vs. ジーン・セバーグ 消されたヒロイン

J・R・ライオン＋G・マッキー 石崎一樹訳

ヌーヴェル・ヴァーグのトップ女優は「政治」に謀殺されたのか？ 個人と国家権力の相剋を、秘められた「裏」資料を駆使しつつ徹底検証する迫真のドキュメント。
125 四六版並製二八四頁十別丁図版八頁 二五〇〇円

仮想現実メディアとしての演劇 フランス古典主義芸術における〈演技〉と〈視覚〉

矢橋透

近代的世界観の形成期において、個人の主体化と世界の仮象化の意識をうながした「演劇」ひいては「絵画」というメディアの世界を、モリエールの普遍的なとするフランス古典主義芸術のうちに読み解き、『演劇的なもの』の普遍的な力を解き放つ。
四六判三〇〇頁 四〇〇〇円

演劇の精神史 バロックからヌーヴェルヴァーグまで

矢橋透

《古来、演劇はみずからを主題化してきた》。ロトルー、マリヴォー、ミュッセから、クローデル、ジュネ、リヴェットに至るフランス演劇の三五〇年を、メタ演劇の歴史、演劇的世界観の革新の歴史として読みかえる気鋭のフランス文学者の野心作。
四六判二八八頁 二五〇〇円

世界は劇場／人生は夢

磯野守彦・佐竹謙一・矢橋透他

シエイクスピアから能、京劇、ハイナー・ミュラーまで、古今東西のジャンルの垣根を越えた九名の研究者による最新の演劇論集。《劇場／世界》の中で繰り広げられた〈夢／人生〉を鮮烈に描き出す。関係年表、参考図版付きで入門者に最適。
四六判二八四頁 二八〇〇円

安部公房の演劇

高橋信良

一九五〇年代から七〇年代にかけて、自ら劇団を組織し、《安部システム》と名付けられた演技体系によって、新劇とも小劇場運動とも異なる独自の道を模索した、《小説家》安部公房の演劇に気鋭のアルト研究者が迫る。
A5判三三三頁 四〇〇〇円

劇場としての世界

矢橋透

フランス古典主義演劇を単なる心理劇、風俗劇とする通説をすて、世界の「仮象」化の現象、中世的エピソードの解体と《近代》の創出のドラマとの関連において捉えようとする、気鋭の演劇学者＝フランス文学者の意欲作。
四六判三三七頁 三五〇〇円

エリザベス朝演劇の誕生

玉泉八州男編 執筆＝荒木正純・井手新・成田篤彦・高田茂樹他

シエイクスピア登場以前の民衆演劇の《起源》を浮き彫りにすべく、十六世紀演劇の文化的コンテクストを捉え直し、「大学才人」の位置づけを再考し、さらには代表的大学才人の詳細な作家論、作品論に及ぶ画期的論文集。
A5判六三七頁 七〇〇〇円

六〇年代演劇再考

岡室美奈子・梅山いつき編

六〇年代演劇とはいったいなんだったのか？ 唐十郎 蛭川幸雄 別役実 佐藤信、横尾忠則、扇田昭彦、大笹吉雄、菅孝行といった〈アンケラ演劇〉の巨人たちと批評家たちが語る六〇年代演劇の実像。決定保存版！

123 A5判二八〇頁 三五〇〇円

「三人姉妹」演出ノート*

「トフストノーゴフ 矢沢英一訳

《今日の演出にはチエーホフが必要である。古くなったのはチエーホフではなく、その演出方法である》。古典の現代的演出で知られるポリシヨイ・ドラマ劇場の演出家がチエーホフ劇演出の新たな方向を示す。

A5判一四八頁 一五〇〇円

メイエルホリド 演劇の革命

エドワード・ブローン 浦雅春十伊藤愉訳

ロシア・アヴァンギャルド芸術の中心的存在にして二十世紀演劇史上最大の演出家、メイエルホリド。スターリニズムに抹殺されたその鮮烈な演劇の實際を夥しい図版を駆使しつつ生き生きと再現する決定版評伝。

A5判四五二頁 五〇〇〇円

タンブレイン

クリストファー・マローウ 高田茂樹訳

《獲るか、獲られるか。死か、生か》。十五世紀初頭 中央アジアに興り、地中海沿岸からインドにまで版図を拡げた覇者ティムール大帝の野心とあくなき欲望を壮大に描き、エリザベス朝演劇の幕開けとなった傑作戯曲。

1212 A5判二八五頁 四〇〇〇円

サーカスと革命 道化師ラザレンコの生涯

大島幹雄

ロシア革命の旗手として民衆の絶大な支持を集めた「赤い道化師」ヴァタリー・ラザレンコ。その生涯を追うとともに、彼の盟友として同時代のアヴァンギャルド芸術を牽引したマヤコフスキイやメイエルホリドの足跡をもたどる、臨場感あふれるドキュメント。

1312 四六判二七二頁 二八〇〇円

グランニギニョル傑作選 ベル・エポックの恐怖演劇

真野倫平編訳

硫酸をかけられ脳髓を切り刻まれ、生皮を剥がれる人間たち、そしてギロチン、人体改造、拷問……グランニギニョル座を中心にベル・エポックのバリを震撼させた恐怖の演劇がいま甦る。

1012 A5判二六七頁 三八〇〇円

モスクワ芸術座の人々 去りゆくソヴィエト時代

アナトリー・スメリヤンスキー 木村妙子訳

一九六〇―七〇年代の絶頂期には社会を揺がす震源地ともなったソヴィエト演劇。百年の歴史をもつモスクワ芸術座と関わりつつ、スターリニズム権力と闘いながら自由な表現を求めて時代に抗した演劇人たちの姿をおして、忘れられた〈ソヴィエト文明〉を検証する。

133 四六判三三九頁 三五〇〇円

チエーホフ戯曲選

松下裕訳

いまなお世界中で上演され続けているチエーホフ劇。演劇史上の傑作として名高い四大劇「かもめ」「ワーニャおじさん」「三人姉妹」「桜の園」を含む戯曲、全十四篇を一巻に収めた、著者の没後一〇〇年を記念する愛蔵本。

A5判六二九頁 六〇〇〇円

現代スペイン演劇選集

ミウラ、ブエロ・バリエホ、サストレ 佐竹謙一編訳

内戦に「勝利」したフランコ独裁体制下の検閲の嵐の中でも、演劇活動がやむことはなかった。この困難な時代の演劇的抵抗精神のありかを示す三人の劇作家の代表作三篇に、今世紀スペイン演劇の歩みを詳細に跡付けた解説を付す。

A5判並製二六七頁 三五〇〇円

ラテンアメリカ現代演劇集

レネー・マルケス ホセ・トリアーナ他 佐竹謙一編訳

欧米の新しい演劇の影響をうけつつラテンアメリカの《現実》を鋭利に抉りだしながらも、小説や詩に比して知られることの少なかつたラテンアメリカの現代演劇を一九六〇年前後の作品を中心に紹介する、本邦初のアンソロジー。

A5判二九九頁 四〇〇〇円

シュルレアリスムの25時

内部ではないはずなのに外部でもない場所、もはや今日ではないが、明日にも譲り渡すことのできない時間のうちに何度でも書きこまれていくシュルレアリスム。日本ではほとんど知られていない異端のシュルレアリストたちを紹介する書下しのシリーズ。小社創立三十周年記念出版。 内容見本呈 四六判上製

ジョゼフ・シマ 無音の光

谷口亜沙子

〈彼が目をさませば岩は砕けちる〉(オクタビオ・パス)。ポ・ヘミアからパリへ、再び冷戦下のチエコへ。境界を生き抜き一切が溶けあう光の表現へ達した異色画家の全貌。

121 総二六九頁(別丁図版三三頁) 三三〇〇円

クロード・カーアン 鏡のなかのあなた

永井敦子

女ではなく、男でもなく……。仮面や鏡を使って偽装したセルフポートレート等によってジュンダー・アイデンティティを問う革命的な写真家/作家/思想家。一九八〇年代後半に再発見された、特異なシュルレアリストの実像に迫る。

102 二七三頁 二五〇〇円

マクシム・アレクサンドル 夢の可能性、回心の不可

能性

鈴木雅雄

ユダヤ教/キリスト教、独語/仏語、夢/現実、そしてシュルレアリスム……あらゆるものに引き裂かれ、その内部にも、外部にも生きることができないまま詩を書き続けたひとりの(凡庸)な詩人の足跡をたどりながら、シュルレアリスムが個人にもたらしたものを再考する。

121 二八三頁 二八〇〇円

ルネ・クルヴェル ちりぢりの生

鈴木大悟

典型的なプチ・ブル。同性愛者。結核患者。コミュニスト…… 矛盾にみちた生を駆け抜けた異端のシュルレアリストにして絶対的自由を渴望する生粋のロマンチスト。かつての仲間とも決別せんとしたその激烈な生涯と作品を、さまざまな角度から読み解く。

123 二九二頁 三〇〇〇円

ヴィクトル・ブローネル 燐光するイメージ

齊藤哲也

いまもなお、深い闇の中で鈍い光を発する《魔術的画家》の全貌。ルーマニアに生まれ、疾走するシュルレアリスムの時代を《遅れ》の「アヴァンギャルド」として生き、そして左目を失った画家の実像に肉薄する野心的な試み。

0812 総三七九頁(別丁図版二八頁) 三五〇〇円

ロジェ・シルベル＝ルコント 虚無へ誘う風

谷昌親

なぜシュルレアリスムなのか——ルネ・ドーマルらと《大いなる賭け》グループを主宰し、ブルトンと対立しながらも、シュルレアリスムにこだわり続けたスキャンダラスな詩人の肖像。生を壊し、死を導き入れる異端のシュルレアリストの全貌。

107 三五六頁 三五〇〇円

ヴォルフガング・パーレン 幻視する横断者

齊藤哲也

ウィーンに生を享け、パリでシュルレアリスム運動に身を投じ、第二次大戦中にはメキシコへ亡命した理知の画家にして思想家、沸騰するインスピレーションによって哲学、物理学を吸収し、ブルトンを驚倒させながらも自裁に至るその五十四年の生涯を追う。

1212 二七六頁+別丁図版四〇頁 三五〇〇円

ゲラシム・ルカノシイ オイディプスの戦略

鈴木雅雄

つかえ切り裂き、攪乱する驚異の「吃音言語」! 圧倒的な吃音詩群を出し、「アンチ・オイディプス」とも比較される「アンチ・オイディプス」の概念を生み出した謎めいた詩人の生涯とテクストを追いながら、無名の詩人がシュルレアリスムをどう作りかえたのかを読みとく。

0912 二四九頁 二五〇〇円

ジョルジュ・エナン 追放者の取り分

中田健太郎

編集者、批評家、活動家、そして詩人…… 数多の顔をもつコスモポリタンにしてエジプト・シュルレアリスム運動の主導者、ジョルジュ・エナン。詩篇を読解しながら波瀾万丈の生涯と思想の足跡をたどる。

1311 二九六頁 三〇〇〇円

ジャン＝ピエール・デュプレイ 黒い太陽

星椋守之

〈心揺さぶる絶望のなかの無垢(マンディアルグ)。二十九歳で自ら命を断ったシュルレアリスト詩人の生涯を追い、語の解体/捏造/増殖による言語の新しい可能性を考える。

1010 二二五頁 二五〇〇円

全巻完結 全十冊セット定価三〇〇〇〇円

ロックの名盤！

洋楽ロックの名盤をまるまる一冊で語り尽くし、あの興奮をよみがえらせる話題のシリーズ！ 欧米の名だたる批評家／研究者たちが、歌詞やサウンド、ジャケットなど、そのアルバムの魅力のすべてを徹底解説する。日本語版オリジナルの解説とデイスコグラフィ付き。
内容見本呈 四六判並製

アバ・ゴールド

エリザベス・ヴィンセントリ 石本哲子訳
「チキチータ」「ダンシング・クイーン」を収録し、全世界で二八〇〇万枚を売り上げた、アバ再評価のきっかけともなった一九九二年のベスト盤。スウェーデンから世界を席卷したヒット曲の数々ほどのようにして生み出されたのか。ファン待望の一冊
131 一七九頁 一五〇〇円

レッド・ツェッペリンIV

エリック・デイヴィス 石崎一樹訳
「ブラック・ドック」「天国への階段」を収録し、三七〇〇万枚を売り上げた一九七一年のモンスター・アルバム。タイトルや歌詞、ジャケットに至るまでちりばめられた数々の謎と秘密を解き明かしつつ、「史上最高」とも評されるこのアルバムを解体する。
131 二二九頁 一八〇〇円

レット・イット・ビー

ステイヴ・マッテオ 石崎一樹訳
なぜ、これがビートルズ「最後のアルバム」なのか。(ビートルズのアルバムの中で唯一、結末が用意されていない)「あらゆる点で不完全」なこのアルバムはそれ故にこそ、多くの人を魅了する。貴重な証言と取材によって毀誉褒貶のスタジオセッションを紙上再現する。
135 一八九頁 一五〇〇円

人文科学

思考の最前線

浅沼圭司 十谷内田浩正編
執筆 有田英也・石原千秋・岩井克人・宇野邦一・小田亮・姜尚中・隅研吾・黒崎宏・黒崎政男・小谷真理・高橋哲哉・高山宏・田崎英明・巽孝之・富山太佳夫・西谷修・前田英樹・宮本陽一郎 現代思想ガイドの決定版！
A5判並製三二〇頁 一五〇〇円

記憶術

フランスス・A・エイツ 玉泉八州男監訳
印刷術の発達とともに滅び、完全に忘れさられた《記憶術》の、ギリシアにおける発生からルネサンス期のヘルメス主義的、隠秘主義的展開に至る二千年の歴史と理論を丹念に掘り起した西欧思想史研究の記念碑的大著。
A5判五一九頁十別丁四版二四頁 六〇〇〇円

想起の空間

アライダ・アスマン 安川晴基訳
記憶、歴史、忘却、想起……二十世紀の破壊と忘却を経て先鋭化する《記憶》をめぐる問題を、古代から今日のデジタル時代に至る文化的記憶の形態とその変遷を概観しつつ論じつづす記憶の思想史。
A5判五七五頁 六〇〇〇円

書物の現在

読書について

吉本隆明・蓮實重彦・清水徹・浅沼圭司
映像の優位、活字文化の衰退という俗説を排し、グーテンベルクから電子出版に至る《書物》の歴史と現在を二人の研究者(浅沼／清水)が検証するとともに、今日の出版の問題を二人の《編集者》(蓮實／吉本)が鋭く剔抉する。
四六判並製二八二頁 二二〇〇円

書物の迷宮

西沢栄美子
小説、詩、絵画、映画など、様々な場面に現れる「文字」、それが担う《意味》とは何か。文字を、単なる意味伝達的手段にとどまらない「イメージ」として捉え、あざやかに読み解く、気鋭の美学者の斬新な書物／芸術論。
四六判二〇九頁 二五〇〇円

18世紀印刷職人物語

ニコラ・コンタ 宮下志朗訳
産業革命前夜のバリ、見習い印刷工ジェロームの笑いあり涙ありの修業時代を描きながら、工房への入会儀礼、印刷工の組合とその規定、地下印刷の裏側など、著者自身の体験をもとに、十八世紀印刷工房の様子をいきいきと詳細に伝える貴重なドキュメント。
133 四六判二〇五頁 二五〇〇円

狂気と権力 フーコーの精神医学批判

佐々木滋子

《私は知の系譜学的歴史を書いているのだと考えていた。しかし真の導きの糸は、この権力の問題にあったのだ。》『狂気の歴史』の自己批判的再構成ともいえる。一九七三―七四年度の講義を徹底的かつ明快に読み解き、フーコーの思想の核心に迫る。
A 5判二八二頁 三五〇〇円

スピノザとわたしたち

アントニオ・ネグリ 信友建志訳

スピノザという異形の運命に立ち戻り、その批判的／転覆の意味そしてその《共》の哲学を今ここに布置する。《ポスト近代の政治的地平を展望しようとするネグリの思想の精髓》。
二二二 四六判二七頁 二五〇〇円

精神病院と社会のはざままで 分析的实践と社会的実践の交差点

フェリックス・ガタリ 杉村昌昭訳

ギリシャのレロス島から、パリ郊外のラボルド精神病院へ――。稀代の哲学者の原点を知るための、もつともコンパクトなガイダンス。ガタリのテクスト、日記さらには、盟友ジャン・ウリによる追悼文や貴重な写真などをモンタージュする。
二二八 四六判一八八頁 二五〇〇円

アンチ・オイディプスの使用マニアル

ステファヌ・ナドー 信友建志訳

ポップ心理学、資本主義そして死。混沌が支配する日常を生き抜くために、ドゥルーズ・ガタリの思想はいかに実践しうるのか。気鋭の哲学者の出色の論考。
一〇四 四六判三四七頁 三八〇〇円

共産主義の理念

C・ドゥズィーナス＋S・ジジェク編
長原豊監訳 冲公祐＋比嘉徹徳＋松本潤一郎訳

蔓延するクローバリズムへ向けて放たれた二十一世紀の「コミュニズム宣言」！ 大反響をよんだ二〇〇九年、ロンドンでのシンポジウムの全記録。執筆「J・L・ナンシー、A・ネグリ、J・ランシエール、A・バディウ、T・イーグルトン、M・ハート他」
二二六 四六判四三三頁 四五〇〇円

哲学とナシヨナリズム ハイデガー結審

中田光雄

ハイデガーにとってナシヨナリズムとは、ナチズムとは何だったのか？ そして彼の哲学は《現実》といかに切り結んだのか？ ナシヨナリズムの理念と存在概念の再検討を通して、いまなお議論を誘発しつづける《ハイデガーとナチズム》の問題を刷新する。
一四四 A 5判二九八頁 四〇〇〇円

現代思想と《幾何学の起源》 超越論的主観から

超越論的客観へ

中田光雄

数多の哲学者たちを魅了した人類の思考の起源《幾何学の起源》の問題を、フッサール、メルローポンティエ、デリダ、ミシェル・セールの思考をたどることにより再検証し、今日そして今後の「知」と「学」の営みを問う。
一四四 A 5判二七二頁 四〇〇〇円

差異と協成 B・ステイグレルと新ヨーロッパ構想

中田光雄

現代のデジタル情報文明を、哲学はいかに受け止め、人心や社会の向上に向けてどのように導くのか。ベルナル・ステイグレルの説く「ハイパー産業社会」の概念をもとに、ヨーロッパ共同体の運命を探る思索の集積。
一四四 A 5判三六八頁 五〇〇〇円

経験と出来事 メルローポンティエとドゥルーズにおける身体の哲学

小林徹

経験と出来事のあいだを揺れ動く――。「経験」に根差したメルローポンティエの思考と、絶えず「出来事」へと滑り込んでいくドゥルーズの思考とを何度も往還しながら、現代における《身体》の在り処を指し示す。
一四一〇 A 5判四〇五頁 六〇〇〇円

愛の世紀

アラン・バディウ＋ニコラ・トリュオング 市川崇訳

出会い系サイトとプラトンにおける、そして今日の芸術・宗教・政治における《愛》の諸相を、難解をもつてなる現代フランスの哲学者が語り尽くす。《愛》は最小のコミュニズムだ！
二二六 四六判七二頁 二二〇〇円

コミュニズムの仮説

アラン・バディウ 市川崇訳

二十一世紀の《共産主義》を聞え！ パリ・コミュニケーション、文化大革命、五月革命……それらは果たして「敗北」だったのか？ コミュニズムの「理念」の復権を試み、解放の政治の可能性を問う《論争的》状況論。
一三二〇 四六判二七七頁 三〇〇〇円

サルコジとは誰か？ 移民国家フランスの臨界

アラン・バディウ 榊原達哉訳

フランス大統領の欺瞞を暴け！ パリ郊外の移民たちを「社会のクズ」と呼んだ男が、なぜフランス大統領に選ばれたのか？ 現代フランスの碩学が、新自由主義と排外主義を標榜する現職大統領を徹底的に批判し、新たな《コミュニズム》を提示する。フランスでベストセラーとなった話題の本。 四六判二四四頁 二二〇〇円

マザリナード 言葉のフロンド

クリスチアン・ジュオー 嶋中博章・野呂康訳

《マザリナード》が飛び交い文芸が政治行為をテキスト化し、街が劇場となった十七世紀フランスのフロンドの乱。政治における《行為》と《行為者》と《言葉》に着目し、歴史記述に新たな地平を開く。
二二一〇 A 5判三〇七頁 五〇〇〇円

歴史とエクリチュール 過去の記述

クリスチアン・ジュオー 嶋中博章・杉浦順子・中畑寛之・野呂康訳

歴史資料／文学作品の背後の《行為》を読み解き、歴史解釈の新たな方法論を提示するフランス歴史学の新潮流の初めての紹介。著者の代表的論文に、日本での講演、未発表論文等を取めた日本語オリジナル編集版。
二二二一 A 5判三〇四頁 四〇〇〇円

メディアの近代史 公共空間と私生活のゆらぎのなかで

パトリス・フリッシー 江下雅之＋山本淑子訳

今日の基幹メディアの原型は近代国家建設の熱気の中で生れた。腕木通信から携帯電話へ至るコミュニケーション・システムの生成過程を社会と技術革新のダイナミックな相互作用の歴史として描く近代メディア史の決定版。
四六判三四三頁 三〇〇〇円

褐色の世界史 第三世界とはなににか

ヴィジャイ・プラシャド 栗飯原文子訳

《第三世界というプロジェクト、それはこれまでヨーロッパが答えられなかった問題を解決することなのだ》（フランツ・ファノン）。激動の二十世紀を《第三世界》の視座から描き出し、その未発の歴史／運動／現在をトータルに概括する。
一三九 四六判並製四四七頁 四〇〇〇円

テキストの解釈学

松澤和宏編

文学・哲学・言語学・歴史学の研究者たちが人文学を横断する〈テキスト解釈〉の営みを通して専門知に潜む暗黙の前提を問い糾す絶え間ない解釈Ⅱ自己理解の先鋭な試み。執筆Ⅱ佐藤彰一・小川正廣・戸松泉・金山弥平・釘貫亨・鎌田隆行・井上隆史他

123 A5判四四四頁 六〇〇〇円

文化の翻訳あるいは周縁の詩学

近藤昌夫十内田慶市十鼓宗十柏木治十角伸明

ユーラシア大陸に興った中国、イスラーム、西欧、そして日本という四つの文明の〈接触〉〈衝突〉そして〈翻訳〉の諸相を、西学東漸、ビザンツ帝国の崩壊と活版印刷術の発明、レコンキスタ、帝国主義と反ユダヤ主義、明治維新という激動の時代を背景に活写する。

129 A5判二三三頁 二八〇〇円

創造と情報 現代形而上学叙説

道躰章弘

二者の形而上学から「結合」の形而上学へ。「創造」を抑圧してきたギリシャ哲学的形而上学の歴史を、実証科学・基礎生物学と、ヘブライ思想の斬新な解釈によって書き替える新しい存在論の試み。

A5判四八二頁 六〇〇〇円

哲学のエチュード 九つのテーマからなる入門書

道躰滋穂子

「存在の究極原因」、「人間と自由」といった根本的命題を古今の哲学者たちは如何に問うたのか。九つの普遍的な問いを端緒に、哲学へと読者を誘う〈永遠の相の下に〉編まれた入門書。タレスからではない、〈私〉から始まる哲学のために。

四六判一五四頁 一八〇〇円

国家研究

エーデイト・シユタイン 道躰章弘訳

アウシュヴィッツのガス室にて凄絶な死を遂げるまで、哲学者として、またカレル会修道女として、思索の道を真摯に歩み続ける、フツサールの直弟子シユタインによる、犀利な現象学的共同体論Ⅱ国家論。

四六判二六一頁 三〇〇〇円

現代科学にもとづく形而上学 今日、神の实在の問題はいかに提出されるか

C・トレスモンタン 道躰章弘訳

アリストテレス、ペルクソン、テイヤールの系譜に連なるフランス現代哲学の巨星が実証科学に基づく新たな時代の形而上学を提起する衝撃の一冊。宇宙物理学、基礎生物学の知見をもとに〈宇宙・生命・思考〉の究極の根拠に迫る最先端の存在論。

A5判五三八頁 六〇〇〇円

ヘブライ人キリスト

クロード・トレスモンタン 道躰章弘訳

福音書はギリシャ語ではなく、ヘブライ語で書かれたものであった。フランス語、ギリシャ語、ヘブライ語を往還しながら、新約聖書の内奥に隠された真の姿〈ヘブライ語文書〉へと肉迫する、キリスト教研究の新たな地平を切り拓く画期的論考。

1310 A5判三六四頁 五〇〇〇円

〈フランス〉の誕生 十六世紀における心性のありかた

高橋薫

〈フランス〉の人々はなぜ王国の統一をめざしたのか。それはなぜ可能だったのか。ルネサンス後期のフランスの庶民、王侯貴族、文学者などの心性を読みと、ロンサル、モンクレチアン、フェビュス等の作品をひきつつ動乱の時代を生きた人々の暮し方から考察する。

127 A5判五七六頁 八〇〇〇円

歴史の可能性に向けて フランス宗教戦争期における歴史記述の問題

高橋薫

ルネサンス／宗教改革から「考証の時代」へ——フランス十六世紀の後期に歴史考証の洗礼を受けた五人の歴史家の残した膨大な歴史記述を仔細に読み解く。動乱の時代、フランス十六世紀に魅せられた著者による、宗教戦争期フランス史研究の集大成。

A5判六〇〇頁 八〇〇〇円

「コンスタンティヌスの寄進状」を論ず

ロレンツォ・ヴァツラ 高橋薫訳

中世最大の偽書「コンスタンティヌスの寄進状」。かつてローマ皇帝コンスタンティヌスが教皇シルヴェステルに教皇領を寄進した証拠とされたこの文書の真正性を、徹底的な文献学的・歴史学的考証により否定した論争の書。

144 A5判二〇〇頁 三〇〇〇円

奴隷制を生きた男たち

ジェームズ・ウォルヴィン 池田年穂訳

「アメージング・グレース」を作詞した奴隷商、農園主として君臨した奴隷所有者、自伝で奴隷制を告発した元奴隷。奴隷制をめぐる三人の人生を生きいきと描き出す、現代史を考えるうえで必読のバラレル・ヒストリー。

109 四六判三三三頁 三五〇〇円

日系人を救った政治家ラルフ・カー 信念のコロ

ラド州知事 アダム・シユレイガー 池田年穂訳

第二次大戦下のアメリカ合衆国で、合衆国民を差別することは憲法に反するという確固とした信念から、各州が嫌がった日系人を引き受け、その強制収容にも「頑固に」反対した、「アメリカの杉原千敏」の軌跡を追う。序文Ⅱ藤崎一郎

137 四六判四五一頁 四五〇〇円

ホロコーストを逃れて ウクライナのレジスタンス

ジェニー・ウイテリック 池田年穂訳

三〇／六〇〇、奇跡のような確率でわずかに生き残ったソルカ(ウクライナ)のユダヤ人。そこには、ある母娘の知られざる活動があった……。ナチをあざむく母の知恵と武力に頼らぬ闘いの日常とそれぞれの家族の絆の物語。

147 四六判二四四頁 二五〇〇円

ユダヤ人を救え！ デンマークからスウェーデンへ

エミー・E・ワーナー 池田年穂訳

第二次大戦のさなか、ナチ占領下にあつて 国内のほとんどすべてのユダヤ人をスウェーデンに逃亡させたデンマークの民衆の知られざる決断と行動。生きのびたユダヤ人たちの手紙や体験記、インタヴュー等々を駆使して、生き生きと描く救助劇の全貌。

101 四六判二六八頁 二八〇〇円

ヴァイマル共和国史 民主主義の崩壊とナチスの台頭

ハンス・モムゼン 関口宏道訳

第一次大戦終戦から第二次大戦開戦まで、ドイツ・ヴァイマル共和国における政治的変遷を、社会、経済、外交、政治的力関係などの多方面の事実をもとに克明に分析する。ヴァイマル共和国史研究の基礎ともいえるべき大著。

A5判五〇〇頁 七〇〇〇円

ナチスのキッチン「食べること」の環境史

藤原辰史

システムキッチン、家事労働から、レシピ、食材、エネルギーにいたるまで、ナチス体制下の〈食〉の制度と政策の現代への深い影響を暴き、来るべき〈食〉を展望する。第一回河合集雄学芸賞受賞

125 四六判四五〇頁 四〇〇〇円

この時代の遺産

エルンスト・ブロッホ 池田浩士訳

なぜファシズムが勝利するのか？ サラリーマン文化、通俗読物、表現主義、ニーチェ、そして映画。〈黄金の二〇年代〉に民衆を陶酔させたサブカルチャーをモニターし、ナチス前夜の危機の瞬間に空洞をとらえた「思想的実験」。

A5判六七頁 七〇〇〇円

ベンヤミン 媒質の哲学

森田 園

初期言語論、イメージ論から歴史哲学にいたるベンヤミンの思考の根柢には、〈媒質〉の概念があった。同時代の哲学者たちとの対比を通じて、その足跡を辿り、伝統の刷新を企てたベンヤミンの哲学の核心に迫る。

113 A5判五三頁 七〇〇〇円

ナチズム 地獄と神々の黄昏

エルンスト・ブロッホ 池田浩士・藤原辰史・本庄史明訳

ナチズム・ファシズムはいかにして批判可能なか？「もはや意識されていないもの」と「まだ意識されていないもの」をキーワードに、ヒトラー政権下の三〇年代の日常を鋭く批判し、瞞着者たちの暴力と野蠻をあばく。

A5判四七頁 四五〇〇円

ベンヤミンにおける「純化」の思考「アンファンク」

小林 哲也

「純粋さ」から「純化」へ。これまであまり顧みられることなかった初期のテクストから、後期の難解な「カール・クラウス」まで、多様なテクストのなかで繰り返され進化していくベンヤミンの思想を丁寧に追う、俊英の研究者によるモノグラフ。

154 A5判四八頁 六五〇〇円

宗教とファシズム

竹沢尚一郎編 執筆 川村邦光・深澤英隆・松村一男他

陶酔、非合理、翼賛。ナチスや大本教、イタリアにおける実践など、その類縁性を指摘される宗教とファシズムの関係を歴史的・文化的に捉え直し、この時代の経験へと逆照射する。

107 A5判三六七頁 五〇〇〇円

言語と狂気 シュレーバーと世紀転換期ドイツ

熊谷 哲哉

フロイト、ラカンの精神医学、キットラーのメディア論、心霊科学、進化思想など、多領域へと接続するシュレーバー『回想録』の「根源言語」の現代的意義を問う。自己/他者、意味/無意味、雑音/音楽を聴取る、シュレーバーによる神経言語の試みを解き明かす。

148 A5判三〇五頁 四五〇〇円

ベンヤミンと精神分析 ボードレールからラカンへ

三原 弟平

二十一世紀という強制收容所的日常のなかで、どのようにして「性関係」はありえるのか？ ベンヤミンの精神分析解釈をプリズムに、ボードレールのヒステリー論、ラカンの性別式へと反射する書き下ろし批評。パラジュー強制收容所へ現代を横断する新しい精神史の試み。

四六判二五六頁 二五〇〇円

フョードロフ伝

スヴェトラナ・セミーヨノヴァ 安岡治子・亀山郁夫訳

宗教的かつ科学的なその夢想的理念によって、あらゆるものを分離化する近代の知に異を唱え、特異な〈統合〉の思想を説く、十九世紀末ロシアの〈幻〉の思想家フョードロフの生涯と思想の全貌を明らかにする、本邦初の本格的評伝。

A5判三五五頁 四〇〇〇円

ポリシエヴィズムと〈新しい人間〉二〇世紀ロシアの宇宙進化論

佐藤 正則

ポリシエヴィズムの思想的根幹として強い影響力をもちながら、レーニンとの関係でしか語られることになった思想家アレクサンドル・ボグダーノフの思想を考察するとともに、ポリシエヴィズムの宇宙観と人間観を探り、その今日的意味を問う。

四六判二八〇頁 三五〇〇円

山高帽の男 歴史とイコノグラフィ

フレッド・ミラー・ロビンソン 赤塚若樹訳

文学・絵画・映画・演劇に現れる、山高帽をかぶった男たち/女たち。その姿・振舞い・視線が語りかけてくるものとは何か？ 山高帽の起源とその歴史的変遷を多くの図版とともに綿密に辿る、興味豊かな異色のカルチュラル・スタディーズ。

A5判三五〇頁 四〇〇〇円

サイボーグ・ダイアローグズ

D・ハラウェイ/T・N・グッドイヴ 高橋透・北村有紀子訳

いまなお絶大なインパクトをもつ「サイボーグ宣言」の著者自身が語る、科学史、フェミニズム理論からバイオ・ポリティクス、トランスジェニック生物、サイボーグまで。最前線で越境を続けるハラウェイの思想への格好の入門書。

四六判二六九頁 二五〇〇円

江戸知識人の世界認識

井田 清子

太田南歌、志筑忠雄といった国際的な視野をもった江戸の知識人たちは鎖国下にあつて、〈世界〉といかに対峙したのか。鎖国下日本の〈世界体験〉を膨大な資料によつて検証する。

A5判二二頁 三五〇〇円

サイボーグ・フェミニズム「増補版」

巽孝之編 執筆 D・ハラウェイ他 巽孝之・小谷真理訳

いまや「カルチュラル・スタディーズ」の正典ともなった、ダナ・ハラウェイの論文「サイボーグ宣言」を中心に、ふたたび問われる越境の思想！ 九一年に刊行され、多方面に影響を与えた画期的な翻訳アンソロジー、大幅な増補を加えて完全復活！

四六判三五二頁 三〇〇〇円

未完の国 近代を超克できない日本

アラン・マルク・リウー 久保田亮訳

江戸期、明治維新、転向と敗戦、高度経済成長、そして東日本大震災。「開かれた国」であるがゆえに未だ生成途上にあるこの国の歴史と未来を、フランス人哲学者が浮き彫りにする。

136 A5判三八二頁 六〇〇〇円

カンブリア革命

永澤 護

いまこの現実とは世界の終焉なのか、あるいははじまりなのか？「Lifebook」ではすでに知る人ぞ知る人物の全貌があきらかに。〈カンブリア革命〉とはなにか？ ページをひらけばそこに、まばゆい思考が待っている（酒井隆史）。

136 四六判二七三頁 三〇〇〇円

超克の思想

岩本 真一

日本思想史上、最大のアポリアともいうべき〈近代の超克〉の問題と激しく格闘した三人の批評家（小林秀雄／中村光夫／福田恆存）の思考と精神に肉薄し、新たな〈思想史〉へと向かう。

A5判二七九頁 三五〇〇円

戦争のある暮らし

乾淑子編

子ども茶碗、木像、幻燈、ひな人形、アニメ、美術、そして着物……。生活雑貨やメディアにあふれる戦争のイメージを、豊富な図版とともに検証し、日々の暮らしの視点から戦争を捉え直す。執筆 武田雅哉・草原真知子・浅川範之・手島仁・田中正流・木村智哉・辻千春・平瀬礼太 A5判二八四頁 三〇〇〇円

石が叫ぶだろう アメリカに渡った日本人牧師の自伝

シゲオ・シマダ 池田年穂訳

日系人強制収容所での苦難、父への授洗、ワシントン州での布教活動……。息子として、夫として、親として、そしてキリスト者としての思いを、アメリカに渡った日本人牧師がいっききと語る自伝。《神の子になるのに遅すぎることは決してない。》 四六判三二八頁 三五〇〇円

ユダヤ小百科

ユーリウス・H・シエプス編 鈴木隆雄他訳

世界の文化と歴史に影響を与え続けてきた(ユダヤ)に関わるあらゆる事象を、その発生から現代にいたるまで、歴史、宗教、政治、言語、文学、美術など、あらゆる領域にわたって網羅した小項目の決定版事典。第四十九回日本翻訳出版文化賞特別賞受賞。12x19 A5判函入二二三頁十別丁図版八頁 二八〇〇〇円

ミハイル・バフチン全著作

責任編集 新谷敬三郎

今世紀ロシア最大の文学理論家 言語学者 哲学者 との評価が定まりつつあるバフチンのほとんどすべてのテクストを収録するとともに、いわゆる「バフチン・サークル」の論文のなかで、バフチン自身に関連が深いとされる代表的なものをも収録する決定版著作集。 内容見本呈 A5判

1 行為の哲学によせて 美的活動における作者と主人公 他

伊東一郎・佐々木寛訳

【一九二〇年代前半の哲学・美学関係の著作】「芸術と責任(本邦初訳)」「行為の哲学」(本邦初訳)、「作者と主人公」、「言語芸術作品における内容・素材・形式の問題」の四論文によって、若き日の著者の美学と哲学の全体像を明かす。 五二七頁 六五〇〇円

2 フロイト主義 文芸学の形式的方法

磯谷孝・佐々木寛訳

【一九二〇年代後半のバフチン・サークルの著作 1】タルトゥ派のイワーノフによってバフチン思想総体の理解にとつて《不可欠と評された、ヴォロシノフの『フロイト主義』、メドヴェージェフの『文芸学の形式的方法』等の三篇によって謎めいたバフチン・サークルの全貌に迫る。 六二二頁 七〇〇〇円

3 マルクス主義と言語の哲学 他

野中進・北岡誠司・斎藤俊雄・佐々木寛訳

【一九二〇年代後半のバフチン・サークルの著作 2】カナエフ名義のバフチンの論文「現代の生氣論」(野中進訳)、ヴォロシノフの論文「生活の言葉と詩の言葉」(斎藤俊雄訳)、『マルクス主義と言語の哲学』(北岡誠司訳)「発話の構成」(佐々木寛訳)を収める。 近刊

4 小説の言葉 他

新谷敬三郎・伊東一郎・国松夏紀・佐々木寛訳

【一九三〇年代以降の小説の言葉論・テキスト理論】「小説の言葉」(伊東一郎訳)、「ことばのジャンル」(佐々木寛訳)、「テキストの問題」(佐々木寛訳)、「可能性を大胆に利用すべし」(国松夏紀訳)、「一九七〇―七一年の覚書」(新谷敬三郎訳)などを収める。 近刊

5 小説における時間と空間の諸形式 他

伊東一郎・北岡誠司他訳

【一九三〇年代以降の小説ジャンル論】古代より近代に至る小説の諸ジャンルの生成を、それぞれのジャンルに固有な時間と空間のタイプの問題として論じた表題作(北岡訳)をはじめ、「教養小説とそのリアリズム史上の意義」(佐々木訳)等、六篇を収める。 六〇四頁 六五〇〇円

6 ドストエフスキイ論

新谷敬三郎・伊東一郎訳

一九二九年のドストエフスキイ論の初版に、新たにメニツペア文学ジャンルの考察をくわえた一九六三年の第二版『ドストエフスキイの詩学の諸問題』(新谷敬三郎訳)を、改稿プラン(伊東一郎訳)とともに収める。 近刊

7 フランソワ・ラブレールの作品と中世・ルネサンスの民衆文化

杉里直人訳

ラブレール文学に住まう陽気でグロテスクな民衆のイメージを斬新に読み解き、中世・ルネサンス文化の新たな世界像を打ち立てた、著者の代表作の待望の新訳決定版。初訳(ラブレール)の増補・改訂)を付す。 九五〇頁 一〇〇〇〇円

別巻 書簡・資料集、バフチン論集

バフチン・サークルの活動の全貌とその時代背景をあきらかにすべく、バフチンおよび友人たちの書簡、伝記的資料、関係者たちの回想その他を収める。あわせて、内外の研究者や批評家によるバフチン論を収める。

近刊

叢書 二十世紀ロシア文化史再考

責任編集 桑野隆

マルクス主義、レーニン主義だけがロシアの思想ではない。ソヴィエト体制下において、隠蔽され、抑圧されてきた、知られざる二十世紀ロシアの文化／思想を再検討するとともに、その秘められた可能性を探る新叢書。

内容見本呈 四六判上製

逆遠近法の詩学 芸術・言語論集

フロレンスキイ 桑野隆・西中村浩・高橋健一郎訳

中世イコンの精緻な幾何学的読解を試みた芸術論や、ポリグロットならではの周密な固有名詞論などによって、二十世紀ロシア文化史上にひととき異彩を放つ思想家の、言語・芸術分野の代表的論考を収録する。

三九三頁 四〇〇〇円

言葉と文化 ポエジーについて

マンデリシターム 斎藤毅訳

【二十世紀ロシア最大の詩人、オーシプ・マンデリシタームの唯一の評論集。ロシア詩の百花繚乱と革命の激動の中で、言葉を媒介とした人間と世界との関係を明らかにすべく、言語・芸術・歴史・政治等に関する思考が展開される。

三〇二頁 三五〇〇円

零の形態 スプレマチズム芸術論集

マレーヴィチ 宇佐見多佳子訳

対象、イメージ、意味から解放された純粹な創造行為としての絵画そのものの自立を求める〈スプレマチズム絵画〉を提唱し、「白地の上の黒い正方形」などの作品を残した、ロシア・アヴァンギャルドを代表する画家の理論的論放を集成する。

四〇二頁 四〇〇〇円

記号としての文化 発達心理学と芸術心理学

ヴィゴツキイ 柳町裕子・高柳聡子訳

精神発達や芸術理解のメカニズムを社会的・文化的な観点から考察しながら、スターリン体制下で完全に黙殺された心理学者の思想的エッセンスに迫る。

三四八頁 四〇〇〇円

美学断章

シペート 加藤敏訳

現象学をロシアに導入するとともに、当時隆盛をきわめたマルクス主義とも宗教哲学とも異なる独自の美学、解釈学、言語理論を展開し、ついにはラーゲリで銃殺された悲劇の哲学者が、革命の嵐のなかで書き上げた、芸術と詩と哲学を巡る異色の言語美学。

三二六頁 三五〇〇円

プロットとジャンルの詩学

フレイデンベルグ 杉谷倫枝訳

近刊

ノオスフェーラ 惑星的现象としての科学的思考

ヴェルナツキイ 梶雅範訳

近刊

《存在はそのあらゆる様相において、意味を携えて出現する文そのものである》。失われた普遍性と統一性への郷愁を断ち、政治的言語ではなく、言語の、言語という政治の新たな在り方を求めて、ポスト構造主義的地平から哲学と芸術に架橋する新叢書。

A5判上製

ユートピア的身体／ヘテロトピア

ミシェル・フーコー 佐藤嘉幸訳

権力による服従化とともに存在し、抵抗へと反転しうる身体を考察する「ユートピアの身体」、権力への抵抗と、権力の解体の可能性を秘めた反場所を模索する空間論「ヘテロトピア」の二篇を収録。ジュディス・バトラ「フーコーと身体的書き込みのパラドックス」を付す。

136 一四四頁 二五〇〇円

レイモン・アロンとの対話

ミシェル・フーコー 西村和泉訳

権力はいかに行使されるのか？ 二十世紀を代表する思想家フーコーと、対極的位置にいる社会学者アロンの、歴史の解釈、主体の問題をめぐっての白熱の対話。ジャン＝フランソワ・ペールによる「解説」を付す。

136 九五頁 一八〇〇円

絵葉書Ⅰ ソクラテスからフロイトへ、そしてその彼方

ジャック・デリダ 若森栄樹・大西雅一郎訳

《誰が書いているのか？ 誰に書いているのか？》そして、何を送るために？ ソクラテス、フロイト、精神分析運動を数多の笑い、ユーモア、涙、絶望と歓喜、そして「歌」のうちにたどる、要約不可能な書簡体の哲学。明解な日本語による待望の翻訳。

三八〇頁 四〇〇〇円

絵葉書Ⅱ ソクラテスからフロイトへ、そしてその彼方

ジャック・デリダ 若森栄樹・大西雅一郎訳

ポスト・モダンの条件

ジャン＝フランソワ・リオタール 小林康夫訳

主体、自由、解放、革命といったあらゆる《大きな物語》が解体しつつある今日のポスト工業化社会の状況を、ウイトゲンシュタインの《言語ゲーム》の概念を用いて分析する、ポスト構造主義の旗手による極北のポスト・モダン論。

二二二頁 二五〇〇円

聞こえない部屋 マルローの反美学

ジャン＝フランソワ・リオタール 北山研二訳

最初期に問題とされた《文体Ⅱ様式》への愛からモダンの批判へ、そして「モダンの声」を聞こうとしない作品群から漏れ出てくるものを聴取しようとする仕事までを、過剰と逸脱に充ちたマルローの作品の読解を通じて総括する、著者の最後の著作。

一七二頁 二五〇〇円

国家に抗する社会

ピエール・クラストル 渡辺公三訳

若くして非業の死を遂げた人類学者が、南米インディアン諸族における《権威なき酋長制》、婚姻制度、言語、神話、拷問等を鋭く分析しつつ、《国家機械》の出現の阻止のダイナミズムに肉迫し、西欧中心の未開社会像を根底から転倒する。

三二八頁 三五〇〇円

ジョン・ケージ

ダニエル・シャルル 岩佐鉄男訳

メシアンに学んだ作曲家にしてパリ第Ⅷ大学で美学を講じる哲学者が、単に音楽の革命家という以上に今日の芸術、思想の全体に深い影響を及ぼしつつあるこの現代音楽の神話的巨人の作品と行為の多元性、放浪性、リズムの様相を解説する。

三七七頁 四〇〇〇円

問いの書

エドモン・ジャベス 鈴木創士訳

《自己になることの不可能性の別名》としての《ユダヤ人》であることを果敢にひきうけつつ、書くことと《書物》への無限の問いを問う引き裂かれた言葉。現代フランスの最もユダヤ的な詩人＝思想家の代表作。われわれはみなユダヤ人だ。

三〇四頁 三五〇〇円

ユーケルの書

エドモン・ジャベス 鈴木創士訳

ユダヤ人たることを、迫害の怒号、追放の辛酸、砂漠での流涕を生きぬいた著者が架空のラビによる鷹の注釈と引用によって織りなした一組の恋人たちの愛と絶望と狂気の物語。ブランシヨ・デリダらの称賛を浴びた《問いの書》シリーズ第二作。

三三九頁 三〇〇〇円

書物への回帰

エドモン・ジャベス 鈴木創士訳

架空のラビの鷹の注釈と引用という遅延を通して、《ユダヤ人》たることを巡る無数の問いを問う類例なき文学の特異点、《問いの書》三部作の完結編。「過去十年フランスで書かれたものでジャベスのテクストほど独自なものはない」(デリダ)。

一七三頁 二五〇〇円

参照点

ピエール・ブーレーズ 笠羽映子・野平一郎訳

セリー音楽から出発して電子的テクノロジーを駆使する作品にまで至った今日のフランスを代表する作曲家＝指揮者が、現代音楽の先駆者たち(メシアン、ストラヴィンスキー、ベルク等)を讀るとともに音楽の今日の在り方を根源的に問う。

四二二頁 五〇〇〇円

他者のユマニスム

エマニュエル・レヴィナス 小林康夫訳

今日のフランス哲学のうちに、全く独自の反存在論的な、切迫した《倫理》の哲学を打ち立てた著者が、五月革命の衝撃の中から、自由な《主体》のユマニスムを廃棄し、絶対的に《他なるもの》の、痕跡の《倫理》を問う困難な思考の精華。

一九二頁 二〇〇〇円

芸術の幼年期 フロイト美学の一解釈

サラ・コフマン 赤羽研三訳

精神分析が芸術を説明するのではない。芸術こそが精神分析的言説の成立に寄与するのだ。余技とみなされてきたフロイトの芸術論の斬新さと根源性を精密に読みとぎ、フランスにおけるフロイト再評価の先鞭をつけたデリダ派哲学者の代表作。

二八三頁 三五〇〇円

異邦人のフィギュール

アブデルケビル・ハティビ 渡辺諒訳

モロッコ生まれの《異邦的》著者が、ジュネ、バルト、デュラス、セガレンといった、異国の地で思索と創作を重ねた作家／思想家の幾多のテクストを渉猟し、文学そのものに内在する《異邦性》を摘出せんとする脱中心的文芸批評。

三三三頁 四〇〇〇円

言語への愛

ジャン・クロード・ミルネル 平出和子十松岡新一郎訳
言語学とラカン派精神分析の接点を通して明らかに、言語を《全》の構造として捉えようとする言語学者たちの欲望とそこから常に逃れ出るもの、「ララング」。ラカン派言語学宣言ともいうべき、気鋭の言語学者による構造主義言語学批判。
二二六頁 三〇〇〇円

近代芸術の五つのパラドックス

アントワーヌ・コンパニオン 中地義和訳
ボードレールの「モデルニテ」の概念を手掛かりに、印象派から、シュルレアリスム、さらにはポップアートにいたる近代／現代芸術の「伝統」を検証し、それが抱える背理を明らかにする、スリリングな芸術論／ポストモダン論。
二八四頁 三五〇〇円

第二の手、または引用の作業

アントワーヌ・コンパニオン 今井勉訳
引用はいつ、どこで、なぜ始まったのか？ アリストテレスからボルヘスに至る引用史をたどり、現象学、記号学、系譜学などさまざまな観点から、単なることばの反復にとどまらない、戦略的・政治的な実践としての〈引用〉を分析し、「書くこと」の本質に迫る。
一〇三 五七二頁 八〇〇〇円

スピノザと政治

エティエンヌ・バリバル 水嶋一憲訳
いまなおきわめて難解な十七世紀オランダの謎めいた哲学者の、ついには、同時代の諸種の問いを徹底的に転位させるに至ったその政治哲学を、マルクスとの《相補的な交換性》をも視野に入れながら、ネグリの以降の新たな視点で読み解く。
一三 二七八頁 四〇〇〇円

神の身振り スピノザ『エチカ』における場について

A・カリオラト+J・L・ナンシー 藤井千佳世十の場寿光訳
『エチカ』の一節の綿密な分析により、二元論の枠に収まらないその思想を、開かれた存在の可能性として大胆に提示する。倫理と政治を結ぶスピノザ哲学の根源に触れる理論的かつ実践的なマニフェスト。
一三五 二〇二頁 三〇〇〇円

欺瞞について ジャン・ジャック・ルソー、文学の嘘と政治の虚構

セルジュ・マルジェル 堀千晶訳
権力に抵抗する戦略的無為とは？ ルソーのテクストを精密に読み解き、緊密に絡みあう文学の権力と政治の権力の構造を暴き解体する、デリダの高弟による新たなルソー論。文学／政治の欺瞞に抵抗する、ルソー／マルジェルの戦闘的エリクチュール。
一三一 二八頁 三〇〇〇円

記号学的実践叢書

構造言語学の《影響》下に登場した記号学的思考が人文諸科学に与えた衝撃ははかり知れない。一九六〇年代から今日に至る記号学の最新の動向を伝えるとともに、ソシュールとパースに、さらにはストア派の言語理論にまで遡るその史的展開をも探る。
A5判上製

ソシュールのアナグラム語の下に潜む語

ジャン・スタロバンスキー 金沢忠信訳
あらゆるラテン詩にはアナグラムが潜む……。詩行に秘められた語を探し出す果てしのない作業に憑かれたソシュールの足どりを透徹した読解によって検証する。構造言語学の、というよりは言語学そのものの創始者の、知られざるもう一つの〈別の貌〉。
二二二頁 二五〇〇円

昔話の形態学

ウラジーミル・プロップ 北岡誠司+福田美智代訳
《文》を超えた《テクスト》のレベルにおける《文法》の探究の最初の試みとして、民話、神話、物語等の記号論的研究において、今や、構造言語学におけるソシュール『講義』にも比すべき位置をもつ、記号学の第一の古典。
三八九頁 五五〇〇円

プロップを読む

レヴィイストロース、メレチンスキー他 北岡誠司編
今日でこそあまりにも名高いが、一九二七年の発表以降、スターリニズムの嵐の中で完全に黙殺されていた「昔話の形態学」の突然の爆発的復興の契機となったレヴィイストロースの「形式と構造」、プロップの精密化を図るメレチンスキー論文等を取める。
中刊

レーニンの言語

シクロフスキ+エイヘンバウム+トウイニヤーノフ他 桑野隆訳
二十世紀の言語学革命を主導したロシアのフォルマリストたちが、《詩的な美しさや文体上の装飾にうんざりし、「美辞麗句」を憎み、「雄弁」を軽蔑する》レーニンの政治的デイスクルの言語学的、修辭学的、記号論的な分析に挑む。『レフ』誌レーニン特集号の全訳。
二二二頁 二五〇〇円

神話の詩学

エレアザール・メレチンスキー 津久井定雄+直野洋子訳
プロップの《再発見》の立役者ともいえるべきロシア神話学の泰斗が、レヴィイストロース、フライ、キャンベル等の神話理論を詳細に検討したのち、神話の古典的諸形態の構造と生成、さらには二十世紀文学における神話主義（ジョイス、カフカ等）の考察と位置づけを試みる。
五六三頁七〇〇〇円

詩の記号学のために

ヤーコフソン、レヴィイストロース他 花輪光編
構造言語学の巨人ヤーコフソンと構造化人類学の創始者レヴィイストロースが一九六二年に共同で発表したボードレールの詩篇「猫たち」の構造分析を巡る論争を、十二篇の論文によって克明に跡づけつつ詩の記号学への困難な道を探る。
三二六頁 三五〇〇円

意味について

A・J・グレマス 赤羽研三訳
パリ記号論派の重鎮が、より普遍的な意味の構造モデルの構築を図るべく、ヤーコフソンの音韻論に触発された《記号論的四角形》の概念を自在に駆使しつつ、意味論、神話学、物語論、詩学を横断するスリリングな記号論的冒険の書。
四二九頁 五〇〇〇円

ファイギュールⅠ

ジェラルド・ジュネット 花輪光監訳

今や、ロラン・バルト亡き後のフランス文学記号学の第一人者ともいふべき著者が、テーマ論的、構造論的文学批評家として鮮やかなデビューを飾った記念すべき処女作。スタンダール、バルザック、ランボオの詩「母音」等への構造論的接近。 三二頁 四〇〇〇円

ファイギュールⅡ

G・ジュネット 花輪光監訳

構造主義革命の嵐の中で、バルト、トドロフ等とともに《文学の科学》の旗の下に、テーマティスムから記号学へと向かった著者の第二論文集。スタンダール、ブルーストを巡る、「物語の境界」、「本当らしさと動機づけ」を巡る精緻な論考。 三二頁 四〇〇〇円

ファイギュールⅢ

G・ジュネット 花輪光監訳

文学の科学としての《ポエティック》(詩学)へ向けて、個々のテクストの個性性に拠る《クリティック》(批評)を廃するに至った著者の《詩学宣言》ともいふべき、シリーズ総決算の書。著者への長篇インタビューと監訳者の解説八十枚を付す。 二八六頁 三五〇〇円

物語のディスクール

G・ジュネット 花輪光・和泉涼一訳

ウラジーミル・プロップからバルトに至る物語の記号論的研究はもとより、広く欧米の文学理論をふまえながら、ブルーストの『失われた時を求めて』を素材に、物語の一般理論、物語の《新たな修辭学》の確立をめざす野心的大著。 四〇五頁 五〇〇〇円

物語の詩学続・物語のディスクール

G・ジュネット 和泉涼一・青柳悦子訳

《物語に関する構造主義的研究の極致(J・カラー)》、《小説テクストの研究のためのもつとも入念で体系的な装置(R・スコールズ)》と評された前者刊行以来十年、欧米各地にまき起った反響をも視野に入れ、理論の精密化へと向う続篇。 二五二頁 三〇〇〇円

アルシテクスト序説

G・ジュネット 和泉涼一訳

アリストテレス以来、西欧の修辭学Ⅱ文学理論の最大の問題のひとつである《ジャンルの問題、あの《三分法》の問題を、《テーマ》、《様式》、《形式》の三つのパラメーターの組み合わせによって解明し、ジャンル論の混乱に終止符を打つ。 二二〇頁 二五〇〇円

ミモロジック

G・ジュネット 花輪光監訳

語と物の自然発生的な類似の観念を、プラトンから聖アウグスティヌス、ライプニッツ、さらにはマラルメ、レリスなどへと辿りつつ、ソシュール以後の近代主義的言語観によって打ち捨てられた言語の詩的な力、ミモロジスムの復権へと向う。 六四三頁 七〇〇〇円

パランプセスト

G・ジュネット 和泉涼一訳

パロディ、パステイシユ、風刺、戯作、転移など、著者が《イベルテクスト性》と呼ぶものの壮大な理論化の試み。ホメーロスからパースに至る世界の文学の歴史を、テクストの変形と模倣の観点から読み直す。「もうひとつの世界文学史」。 七三三頁 二〇〇〇円

スイユテクストから書物へ

G・ジュネット 和泉涼一訳

著者名 タイトル エピグラフ 序文……。テクストを文学作品たらしめ、テクストの存在と受容・消費を「書物」という形で保証するこれら「パラテクスト」の意味と機能を探求する、文学研究において、いまだ手つかずの「大陸」に踏み込んだ、記念碑的大著。 五四四頁 七〇〇〇円

フィクションとディクシオン

G・ジュネット 和泉涼一・尾河直哉訳

『赤と黒』や『アエネイス』が文学作品として認知されるのと同様に、ルソーやミシユレが美的対象として受容されるとき、そこにはいかなる基準が働いているのか。テクストの《文学性》の客観的条件への構造論的、言語行為論的な接近。 一六七頁 二五〇〇円

芸術の作品Ⅰ 内在性と超越性

G・ジュネット 和泉涼一訳

《文学ではなく「文学性」を問いの対象とし、物語論やテクスト論の領域で新たな理論モデルを提示》してきた著者は、詩学を包含するものとしての美学へと向かう。音楽、文学、絵画、彫刻、建築など、芸術の諸領域を横断する一般美学の基礎理論を構築する斬新な試み。 一三一 三七九頁 五〇〇〇円

フィクションの修辭学

W・C・ブース 米本弘一・服部典之・渡辺克昭訳

《内在する作者》の概念により、古今東西の小説作品が読者に向ける「意味の伝達」の技法すなわち《修辭法》を精緻に読み解き、トドロフやジュネット等の物語分析にも多大な影響を与え、今や《シカゴ派》小説理論の古典として屹立する大著。 五七六頁 七〇〇〇円

自伝契約

フィリップ・ルジュヌヌ 花輪光監訳 井上範夫・住谷在昶訳

自伝と他の文学的ディスクール(小説・伝記等)とを分かちつものは何か? ルソー、ジッド、サルトル、レリス等の自伝的作品を犀利に分析しながら、フランスの構造論的文学理論家が自伝研究に一時代を画した野心作。 五二二頁 七〇〇〇円

小説と映画の修辭学

シーモア・チャトマン 田中秀人訳

アラン・レネ「アメリカの伯父さん」、カレル・ライス「フランス軍中尉の女」などのフィルム／テクストを通して、「小説」と「映画」に通底する物語構造を解剖し、「物語」に潜勢する《語り＝騙り》の枠組みを鮮やかに剔る。 三九三頁 五〇〇〇円

可能世界・人工知能・物語理論

マリー＝ロール・ライアン 岩松正洋訳

人工知能研究のテクストとストーリー自動生成の諸モデルを、言語行為論の成果とともにフィクションの研究に適用し、物語論の新たな展開を示す知的冒険の書。 五二四頁 六〇〇〇円

物語における時間と語法の比較詩学 日本語

と中国語からのナラトロジー 橋本陽介

これまでの物語論の議論を振り返りながら、テクスト言語学的な見地にもつき個別言語における物語の言語使用を比較・分析しつつ、現行の物語論を日本語と中国語の立場から更新する。ナラトロジーの新しい地平を拓く鋭敏の著者の野心作。 一四九 五二八頁 七〇〇〇円

映画における意味作用に関する試論

クリスチャン・メッツ 浅沼圭司監訳

《映画の「固有性」》とは、言語活動にならうとする芸術のただなかに、芸術にならうとする言語活動が存在するということなのである。《映画の記号学的研究に決定的な地平をひらいたフランスの高名な映画理論家の記念碑的著作》。

四四〇頁 五〇〇円

《力》の思想家ソシュール

立川健二

フロイトの精神分析をも視野に入れたつづ、構造言語学の創始者フェルディナン・ド・ソシュールの、とりわけ通時態の概念、言語変化をひき起すその《盲目的な力》に着目し、ソシュール像の転換を図る気鋭の言語理論家の野心的論考。

三三六頁 四〇〇円

映画記号学の諸問題

クリスチャン・メッツ 浅沼圭司監訳

《映画言語》というメタフォールを極限まで突きつめ、それに隠されているものを解明することをめざした著者が構造言語学、とりわけエルムスレウの言語学を武器に、映画理論の方法論的基礎を鮮やかに解明する。『試論』の続篇。第二巻。

三三二頁 四五〇円

源氏物語のデイスクール

福田孝

古来、作者複数説さえ唱えられる程に著しい『源氏物語』の前半と後半とを分つ断絶をロシア・フォルマリズム以降の物語論の概念を駆使して明確に測定し、その断絶の巨大さにこそ、この日本文学史上最大の古典の豊饒性をみる進鏡の処女作。

二二三頁 二五〇円

映画のためにI

浅沼圭司

今日の映画理論のすさまじい混乱を止揚すべく、現代日本の映画理論の第一人者ともいべき著者が、コアン・セア、ミトリ等の映画理論、そしてとりわけバルト、メッツの記号学的方法を駆使しつづ、二十年ぶりに書き下した大著の第一巻。

二六九頁 三〇〇円

闘う衣服

小野原教子

《私とは誰か》という問いと戯れる今日のファッションの多様な様相を、日本のモード雑誌のなかに、そしてヴィヴィアン・ウエストウッドの諸作品、女子プロレスのコスチューム、ゴスロリ・スタイルのなかに探る記号学的モード研究。

一七五 三八十別丁 四四二頁 四五〇円

映画のためにII

浅沼圭司

画とその理論の史的展開を概観した後に、《映像》とその意味作用を極めて厳密に論じる第一巻に続き、映像を、《作品》ではなく《テクスト》と捉えつつその技法と受容の問題を徹底的に究明する。今日の映画理論の最高の到達点。全二巻完結。

三五五頁 四〇〇円

神秘学

シュタイナーが協会と自由大学に託したこと

ルドルフ・シュタイナー 入間カイ訳

シュタイナーが生涯最後の二年間に心血をそそいだ「アントロポゾフィー協会」と「精神科学自由大学」について残した手紙・講演。

一七五 四六判二八八頁 三五〇円

神秘学小百科

リチャード・キャンペンディツシュ 鎌田東二・横山茂雄他訳

J・B・ラインを顧問に迎え、魔術、オカルティズム、超心理学、心靈研究等いわゆる精神世界の全分野、全問題を網羅し、公平で正確な記述によって、現在最も信頼しうると定評のあるエンサイクロペディア。精神世界に興味をもつ人々の必携書。

近刊

アントロポゾフィー協会の進化について

パウル・マツカイ 入間カイ訳

アントロポゾフィー協会はどのように進化するののか？ 三十三年の周期で発展してゆくその過程で発生する課題を示しつづ、時代の運命ときわめて深く結びついた、これからの協会のあり方について語る、ゲーテアヌム理事による講演集。

一七五 四六判二六八頁 二五〇円

ルドルフ・シュタイナーと人智学

フランス・カルルグレン 高橋明男訳

この、『シュタイナー教育』の提唱者にして二十世紀最大の神秘学者の生涯と思想を、そして彼の創始した人智学運動の全体像を、平易かつ簡潔に描きだし、広く世界各国で愛読されている定評ある入門書。

四六判三九頁十別丁 四版三三頁 一五〇円

『魂の暦』とともに

マンフレッド・クリューガー 鳥山雅代訳

四季に思づく《思考》をたどり、より深い《私》へ向かう、ルドルフ・シュタイナーによる十二月の魂の言葉。四季を通じた瞑想の道へと誘う、このシュタイナーの『魂の暦』の一篇一篇を、読みながら、そして考える。

A5判一四五頁 一八〇円

哲学の謎

ルドルフ・シュタイナー 山田明紀訳

ギリシア哲学からカント、ヘーゲル、マルクス、ベルクソンまで、西欧の大哲学者たちの世界観の根底を流れる衝動を深い共感をもって汲み上げ、人間の生にとっての哲学的思考の意味を開示する著者の哲学的な主著。

A5判七二六頁 七〇〇円

瞑想 芸術としての認識

マンフレッド・クリューガー 鳥山雅代訳

《この本が示しているのは、いかに瞑想を通して人間の中の認識の力が目覚め、強くなっていくかということです。》ドイツの代表的人智学者が現代におけるシュタイナーによる魂の小道。待望の新訳・改訂版。

四六判一六七頁 一八〇円

人智学の死生観

ワルター・ビューラー 中村英司訳

近代西洋医学の限界をルドルフ・シュタイナーの思想によって打ち破ろうとする今日の人智学的医学の代表者が、地上の生の意味について、死の恐れとその克服について、そしてカルマと再生について、深い思索を平易に語る。

四六判一八七頁 二〇〇〇円

オイリュトミーが育むところから 動きの教育学

秦理絵子

オイリュトミーは子供たちにどのように働きかけ、またどのようにしてその成長をひきだすのだろうか。オイリュトミーの原理と基本要素を概観するとともに、シュタイナー学校におけるオイリュトミー教育の実践、そしてその教育的可能性を考える。

121 A5判二五四頁 二〇〇〇円

オイリュトミーの世界

高橋弘子編訳

ルドルフ・シュタイナーによって創始された、まったく新しい運動芸術《オイリュトミー》。この新しい舞踊の基本的な考え方、また教育に、治療にと応用されるつつある、その多様な側面にも光をあてる最高入門書

A5判並製一六〇頁 一五〇〇円

神秘学叢書

編集 高橋 巖

古代以来の《影の水脈》ともいうべきオカルティズム 神秘学を抜きにして西欧を語ることはできない。また、東洋、日本においても霊学 神秘学の伝統は長く深い。世紀転換期にあつて、洋の東西のオカルト的思考の在り方を探る異色の叢書。

A5判 / 四六判上製

霊界の境域

R・シュタイナー 西川隆範訳

霊的認識の諸段階と瞑想行を巡る諸問題を包括的に論じ、多くの人智学徒の導きの書ともなっている表題作に、「霊的認識の階梯」、「宇宙論・宗教・哲学」の二論文をも収録して、著者後期の人智学的霊学の核心に迫る重要著作。

四六判二七〇頁 二五〇〇円

美術史から神秘学へ

高橋 巖

ルドルフ・シュタイナーの思想の日本への紹介者として著名な著者が、原始キリスト教の美術から世紀末芸術、そしてパウル・クレーの音楽体験に至る西欧の美的精神のありかを、神秘学の相の下に探求する。

A5判二七〇頁十別丁 四六判二八頁 三〇〇〇円

蓮華の書

メイベル・コリンズ 西川隆範訳

ブラヴァツキー夫人の親密な友人にして、《神智学協会の最高の作家のひとり》と称された英国の小説家が、古代エジプトの神殿と都市を舞台に、ひとりの少年の霊的な覚醒と成長、秘儀と闘争の中での転生を描く驚くべき神秘小説。

四六判二六六頁 二〇〇〇円

岡田茂吉における宗教と芸術

高橋 巖

ヨーロッパのみならず東洋、日本の霊学の伝統にも造詣の深い著者が、ゲーテの色彩論、ユングとパウリの共時性論《濃縮》の理論等をも縦横に援用しつつ、世界救世教の開祖、岡田茂吉の思想へ人智学の立場から肉迫する。

四六判クロス装 八三頁 一九〇〇円

偉大な秘儀参入者たち

エドゥアール・シュレー

西川隆範十河野和子十槇野かおり十金子孝行十川杉哲子訳
シュタイナーのフランスにおける高弟が、古代の秘儀、そしてラーマ、クリシュナ、ヘルメス、モーセ、オルフェウス、ピュタゴラス、プラトン、そしてイエスの八人の秘儀参入者たちの霊的生涯と思想とを活写し、十九世紀末のオカルト復興に決定的な影響を与えた魂の書。

131 四六判五二七頁 四八〇〇円

仏陀からキリストへ

ルドルフ・シュタイナー 西川隆範編訳

二十世紀最大の神秘学者が、古代パレスティナにおける仏陀、ゾロアスター、そしてナートン系とソロモン系の《二人のイエス》の劇的な出会いを、さらにはそれら諸教の、とりわけ仏教とキリスト教の内的関連を説く衝撃的な仏教論集。

四六判一八四頁 二〇〇〇円

ヒエロニムス・ボッス

ヴィルヘルム・フレンガー 麻原雄訳

ブラド美術館の《快樂の園》によってあまりにも名高いボッスと、当時のオカルト・グループ、さらにはヨーロッパの秘教的伝統との関係を克明に追求し、ボッスの作品に新しく決定的な照明をあてた題目すべき研究。

近刊

パラケルススとその周辺

アレクサンドル・コイレ 鶴岡賀雄訳

後に著名な科学史家となったコイレは、ヤコブ・ペーメを初めとする十六世紀のドイツ神秘主義の犀利な研究者でもあった。パラケルスス、シュヴェンクフェルト、フランク、ヴァイゲルの四人の神秘家たちについての貴重な研究。

四六判二八五頁 三〇〇〇円

ロサ・ミステイカ叢書

近代のオカルト的思考はかつてない広がりと言え、深さとを獲得したのではないだろうか。ルドルフ・シュタイナーの人智学的諸著作から現代日本のオカルト小説まで、現代という切迫した危機の時代における霊的、オカルト的作品を幅広く紹介する。

四六判上製 四六判上製

シュタイナー思想入門

西川隆範

この今世紀最大の神秘学者の劇的な生涯、そして《アカシヤ年代記》に基づいたその壮大な宇宙論、人間論を平易、簡潔に説く好個の入門書。苦難に満ちたこの人生において、霊的認識と修行の道を歩もうとする人々への小さな贈り物。

二二二頁 二〇〇〇円

仏教の未来

西川隆範

高野山にも学んだ気鋭の人智学者が、輪廻からの解脱を説く小乗仏教と人類の業を担おうとする大乘仏教の本質を神秘学の認識の光の下に解明し、近代仏教学の限界を打ち破る。

近刊

道元とシュタイナー

塚田幸三

《道元が十三世紀に説いた神秘思想を、シュタイナーが二十世紀に再び説いたと言えるのではないだろうか。『正法眼蔵』とシュタイナーの人智学のなかに《輪廻》と《カルマ》》についての思考をさぐり、道元の仏教とシュタイナー人智学の共通の基盤を探求する斬新な試み。

131 二六五頁 二八〇〇円

聖別された肉体

横山茂雄

ついにユダヤ人大虐殺に至るナチズムと、アドルフ・ランツ（さらにはブラヴァツキー……）等のオカルト進化論と人種論との深くかつ微妙な関係、現代史の影の部分ともいえるべきこの問題に、気鋭の英文学者が夥しい文献を渉猟しつつ肉迫する。

三九八頁 三五〇〇円

アクアリウムの夜

稻生平太郎

邪教白神教の影の下に、謎めいた老人の《チベット紀行》に導かれて、《ぼく》と良子は、水族館の地下へと……。恐るべき《闇の力》に翻弄される若者たちの運命を新進の幻想文学研究家が渾身の力をこめて書下した衝撃のサイキック・ホラー。

二六六頁 二〇〇〇円

四季の宇宙的イマジネーション

R・シュタイナー 西川隆範訳

秘儀参入の道としての四季の魂的、霊的体験のために、四季の秘密を四つの壮大な宇宙的イマジネーションのうちに解明し、四季の中で四人の大神使の協働を讀めた著者最晩年の連続講演。人智学的福音書ペリコーペ「日曜日の福音」を付す。

二二〇頁 二〇〇〇円

輪廻転生とカルマ

R・シュタイナー 西川隆範訳

極めて複雑で錯綜した輪廻転生とカルマの問題を巡って、人類の霊的指導者間でエーテル体等のいかなる譲渡が行われたかを《霊的経済》の名の下に説く霊的経済の原理、「人智学運動のカルマ」等を収録し、著者のカルマ観の一面を示す。

二四七頁 二五〇〇円

神秘主義と現代の世界観

R・シュタイナー 西川隆範訳

近代の《新しい自然科学の認識に浸透されつつ》エックハルト、バラケルスス、ペーメからブルーノ、シレジウスに至る西欧中世の九人の大神秘家たちの思想の今日的意味を問う、著者のオカルト的思考の出発点を示す最初期の重要著作。
二二九頁 二〇〇〇円

人智学指導原則

R・シュタイナー 西川隆範訳

一般人智学協会の出発に当って、「協会のなかには統一の意識が生じるべきである」と考えた著者が、病の床にあって、最後の力を振りしぼって人智学の内容をあらためて整理、発展させた人智学徒の必読書。「人智学的共同体形成」を付す。
一三九頁 一五〇〇円

黙示録の秘密

R・シュタイナー 西川隆範訳

聖書中、最も難解とされるヨハネ黙示録の驚くべきヴィジョンを、来るべき時代、地球がアストラル的天体に変化し、人間が霊界へ再上昇する時代を描いたものと捉え、《六六六》の謎を著者独自の壮大な霊学によって解明する秘教的黙示録論。
二六三頁 二五〇〇円

西洋の光のなかの東洋

R・シュタイナー 西川隆範訳

フランス世紀末の神秘学者シュレーの『ルシファアの子供たち』の上演に触発された著者が、インドに代表される東洋の霊性を、西洋の薔薇十字の神秘学によって解明し、信仰からルシファアの霊認識への必然的移行を説く連続講演集。
二五九頁 二五〇〇円

創世記の秘密

R・シュタイナー 西川隆範訳

旧約聖書創世記冒頭の物語はポラール時代、ヒュベルボレアス時代、レムリア時代の出来事を描いたものだ、とする著者が、創世記の言語の忘れられた霊的な意味を、そして宇宙進化の頂点たる《人間》の責任を深く考察する著者唯一の旧約論。
二〇三頁 二〇〇〇円

霊視と霊聴

R・シュタイナー 西川隆範訳

薔薇十字的瞑想修行によって霊視と霊聴に至るための理論と具体的プロセスを、基礎から、深遠で難解な核心部に至るまで、余すところなく公開する極めて秘教的な連続講演集。《この道を歩む者は確実に超感覚的世界に参入することができぬ》。
一八七頁 二〇〇〇円

世界史の秘密

R・シュタイナー 西川隆範訳

ギルガメッシュとエンキドゥ、ジャンヌ・ダルク、背教者ユリアヌス、コペルニクス、カント等の輪廻転生を極めて具体的に説き明かしつつ、世界史の背後に存在する霊的な力の解明に挑むスリリングな連続講演集。
一四七頁 一五〇〇円

社会改革案

R・シュタイナー 西川隆範訳

勃興する労働運動と迫りくる《世界大戦》の危機を前にして社会問題、労働問題の根本的な解決をめざした著者が、近代の技術と資本によって傷ついた《人間と人間社会を、社会有機体を癒そう》とする《社会有機体三分節化》の試みについて語った四講演を収録する。
一一二 一一五頁 二五〇〇円

釈迦・観音・弥勒とは誰か

R・シュタイナー、H・ベック、R・カールツ他 西川隆範編訳

原始仏教から、《人類の救済》をめざす大乘仏教への発展には、キリストの出現、その死と復活が霊的に大きくかかわっているのではないだろうか。シュタイナー派の五人の仏教学者が釈迦・観音・弥勒の宇宙的働きと大乘仏教成立の意味を問う。
二二三頁 二〇〇〇円

シュタイナー教育・医学

シュタイナー教育基本指針II 三歳から九歳まで

ライナー・パツラフ、ヴォルフガング・ザスマンスハウゼン 入間カイ訳

〈人間の心身の健康を維持するものは何か?〉 幼児期から少年期への心身の健全な成長をうながす「健康生成」の理念と実践。保育園・幼稚園教育と学校教育の連携をめざす持続的・統合的なシュタイナー教育のガイドライン。
152 四六判一九〇頁 二五〇〇円

小児科診察室 シュタイナー教育・医学からの子育て読本

M・グレックラー/W・ゲーベル 入間カイ訳

乳児期から青年期まで、「教育と医学のつながり」から子どもの発達全体の支える新しい育児書。数多くの言語に訳された世界中で読みつがれてきた、子ども一人ひとりの「私らしさ」を育てるための育児百科。
A5判五八六頁+別丁四版四八頁 四〇〇〇円

日本のシュタイナー幼稚園

高橋弘子

日本で最初のシュタイナー幼稚園の創設者が、自らの実践を通じた具体例を豊富にまじえながら、シュタイナー幼児教育の基本的な考え方と、そのユニークな保育の実際を平易に紹介する。シュタイナー幼児教育への最良の入門書。
四六判二〇〇頁 二〇〇〇円

乳幼児のためのシュタイナー保育

バーナデット・ライチエル 入間カイ訳

世界で最初にシュタイナー教育にもとづいた保育園をニュージーランドに設立し、運営しつづけてきた著者が、確立されつつある〈シュタイナー保育〉の可能性——その理論と実践のすべてを語る。
四六判三六頁 二五〇〇円

シュタイナー幼稚園のうた

高橋弘子編

ドイツの、そして日本のシュタイナー幼稚園でうたわれている《流れゆく雲のような》《雨の降る音のような》美しいうた、楽しいうたを、楽譜とともに六十五曲収録する日本でただ一冊のシュタイナー幼稚園歌曲集。おとももども、さあ、うたいましょう!
106 B5判並製五六頁 一〇〇〇円

シュタイナー教育基本指針I

ライナー・パツラフ、クラウディア・マッキーン他 入間カイ訳

ヴァルドルフ教育は、学校、幼稚園・保育園での実践としてのみならず、人びとの自律性と創造性を高めるために何ができるのか? 日本独自の、乳幼児教育の基本指針を創つてゆくための基本指針。シュタイナー教育に関心をよせるすべての人の必読書。
142 四六判二四〇頁 二五〇〇円

七歳までの人間教育 シュタイナー幼稚園と幼児教育

エリザベト・M・グルネリウス 高橋巖・高橋弘子訳

ルドルフ・シュタイナーの遺志をひきつぎ、その思想に基づいて、シュトゥットガルトにおける最初のシュタイナー幼稚園を設立した著者が、未来の教育者にむけて語りかけた、シュタイナー幼児教育の原点。子どもに子どもの世界をかえし、子どもたちの魂の開花に立ち会う喜び。
四六判一五四頁 一五〇〇円

遊びとファンタジー 親子で考えるシュタイナー幼児教育

クリスチアーネ・クレーテイク 森章吾訳

子供の創造性やファンタジー、そしてのびやかさをどう育んでゆくのかが。幼稚園や保育園ばかりではなく、家庭での、また友人たちとのグループでの毎日の育児のなかにシュタイナー教育の考え方をいかに新しい育児読本。
四六判並製二六七頁 二五〇〇円

子どもの絵くことは

ミヒャエラ・シュトラウス 高橋明男訳

シュタイナー自身に学んだドイツの女性美術教育家による、シュタイナー教育からの児童絵画論。幼児の絵画を身体と心の発達を映し出すものと捉え、児童画の理解に新しい展望を開く画期的論考。
A4変判オールカラー九五頁 三〇〇〇円

九歳児を考える

ヘルマン・コエプケ 森章吾訳

成長の「節目」である九歳前後の子どもたちをいかに手助けできるのか。具体例を手掛かりに、シュタイナー教育の立場から、危機的状況にある子どもたちを自由と創造性へ向かって導くための考え方と実践的指針を示す。
四六判並製二二六頁 二〇〇〇円

シュタイナー学校の算数の時間

エルンスト・シューベルト 森章吾訳

シュタイナー教育の数学の分野の第一人者が、子供たちに初めて算数を教えるさいの基本的な考え方を具体例をまじえて明快に説き、《点数をとるための算数》ではなく、内的な力を育む算数へといたる道を示す。
四六判並製一七三頁 一五〇〇円

子供の叱り方 子供の教育と自己教育における《罰》

エーリッヒ・ガーベルト/ゲオルク・クニーベ 森章吾訳

子供を《叱る》というこの困難な問題をシュタイナー教育の観点から深く考察し、実践的な指針をも与えてくれる稀有な書。《怒りの背後には、より高次なものを感じとられなくてはならない》。
四六判並製二二二頁 二〇〇〇円

シュタイナー学校の英語の時間

ロイ・ウィルキンソン著 飯野一彦訳

《子供たちへの取り組み方は芸術的でなければなりません》シュタイナー教育の研究・実践に七十余年取り組んできた著者が、自らの教師経験をふまえて書いた「英語教育」の実践的な手引。
131 四六判並製一八四頁 二二〇〇円

魂の保護を求めると子どもたち

トーマス・J・ヴァイス 高橋明男訳

シュタイナーの思想にもとづく障害児のための治療教育共同体《キャンパビル》の創立者のひとりが種々の障害を発達の観点から考察し、治療法、対処の基本姿勢、周囲の人々の変化の必要性を説く、シュタイナー治療教育の古典。
四六判二九六頁 二八〇〇円

シュタイナー学校は教師に何を求めるか 授業形成と内面性

クリストフ・ヴィーヒェルト 入間カイ訳

今日のシュタイナー教育運動の国際的な指導者ゲーテアナム教育部門代表が、《子どもに現れようとする霊的な個性に対する限りない畏敬の念》をこめて、学校運営の具体的な問題から、教員会議、メディアーションといったきわめて内的な領域までを広く、深く解き明かす。
四六判一九八頁 二〇〇〇円

メルヘン論

ルドルフ・シュタイナー 高橋弘子訳

シュタイナー教育そのものを創始したドイツの思想家「神秘学者が、グリム童話や世界各地の童話を例に、『人間の魂の最奥の深み』から湧き出る最も根源的なものとしての童話」メルヘンを独自の霊学的観点から具体的に解明する。

四六判二三三頁 二〇〇〇円

メルヘンの世界観

ヨハネス・シュナイダー 高橋明男訳

ルドルフ・シュタイナーに学んだドイツの人智学者「教育者が、メルヘン、とりわけグリム童話と日本の民話に秘められた深い意味、人類の歴史と人間の成長をめぐる深い叡知の意味を説き明かす日本での連続講演集。

四六判二二二頁 二二〇〇円

幼児のためのメルヘン

スーゼ・ケーニツヒ編 高橋弘子訳

子供たちの魂の奥深くに働きかけ、子供たちの主体性と独創性を育むメルヘン。世界中のシュタイナー幼稚園で語り継がれ、また教材として使われている定評あるメルヘン集。

四六判三〇三頁 一八〇〇円

ハンスとリンゴの種

ブロンヤ・ツァーリングゲン編 高橋弘子訳

メルヘンの果樹園によろこそ！子供たちに生きる喜びと生きる力を与え、創造の泉へと誘うメルヘン。子供たちが輝く笑顔を取り戻すための二十二篇の珠玉のメルヘンを明快で香り高い訳文によっておくる。

四六判一七二頁十別丁四版八頁 二〇〇〇円

バイオグラフィー・ワーク入門

グードルン・ブルクハルト 樋原裕子訳

《わたしはどこから来て、どこへ行くのか》シュタイナー思想にもとづくアントロポゾフィー医学から生まれた、自らの人生を自伝的文章や詩絵などによって振り返り、よりよい人生をおくるための実践の数々を紹介する。

四六判三九九頁 三〇〇〇円

アントロポゾフィー医学の本質

ルドルフ・シュタイナー・イタ・ヴェーグマン 浅田豊十中谷三恵子訳

《健康になるためには、体、エーテル体、アストラル体、そして自我の、崩れたバランスを再び取り戻す治療を見出さねばならない》一九三五年、シュタイナーが迫りくる死の三日前まで、最後の力を振りしぼって推敲を続けた最後の著書。

124 四六判一八五頁 二五〇〇円

医学は霊学から何を学ぶことができるか

ルドルフ・シュタイナー 中村正明訳

二十世紀最大の神秘学者として、また《シュタイナー教育》の提唱者として知られる著者が、迫りくる死の影の下に、霊学と医学の深いつながりについて語った連続講演。今日のおまりにも唯物的な医学の彼方へ歩もうとする人々の必読書。

四六判一〇七頁 一五〇〇円

時代病としての癌の克服

リタ・ルロア 高橋弘子・高橋明男訳

晩年のルドルフ・シュタイナーに出会い、彼の示唆にもとづく癌の研究に長年、従事してきた著者が、シュタイナー医学の基本とヤドリ木製剤（イスカドール）による癌治療の理論と実際について詳述する。付論「堀雅明」

四六判一五七頁 一八〇〇円